

まお一転生

秋月あきら

プロローグ

異世界の魔王よ、君にこの物語を捧げよう

異世界の魔王よ、お前は在るべき世界へ還るがいい。

この世に光が在る限り、闇があることを覚えておけ、光の勇者よ。

お前のことは忘れない……愛した者よ。

また逢おう、次なる舞台で……。

第1話 エクストリーム生徒会選挙！

「私がこの学園の学園長 てんどうまお 天道舞桜だ」

収容人数約一万五千人を誇る巨大なホールのステージ立つ美少女。

桜色のロングヘアを風に靡かせ（黒子たちが扇風機で風を起こしている）、端正で知的な顔立ちだが学園長と呼ぶには若く、この学園の白い制服で身を固めている。

そう、この美少女は学園長で生徒なのだ。

天道舞桜の個人データの入手は、簡単に情報漏洩してしまうような企業や行政に比べ、断然ガードが堅い。なぜなら、彼女は経済市場において世界を支配する超巨大グループ企業の会長の孫娘だからだ。

トップシークレットな彼女だが、人々から投げかけられるよくある質問にはちゃんと会見を開いて答えている。

桜色の髪の毛は地毛だが、なにか問題でもあるのか？

センセーショナルなこの発言は、長らく論争を続けていた地毛派 と 染め派 の戦いに終止符を打つこととなった。

しかし、ネットでは未だに 染め派 が活動を続けている。ちなみに ウィッグ派 などの少数派は最初から相手にされなかった。

事あるごとにマスコミにネタを提供してくれる舞桜様（信者

は様付けしている)だが、もっともホットなネタは超巨大学園都市を造ってしまったことだろう。

美しかった国(過去形) 日本のアバウトに言うところ相模湾ら辺に造られた人工海上都市アトランティス(一部では魔術師たちが浮上させたとも)。

なんかの圧力で治外法権のこの島の中心部に、私設舞校学園高等部がある(天道舞校は『まお』だが、学園の名は『まおう』と読ませる)。

そして、まことにお日柄もよい今日は舞校学園の第一期入学式なのだ!

新入生の数は約五〇〇千人で、収容人数一万五千人のホールはエキストラの皆さんで埋め尽くされている。

熱気と歓声に包まれるホール。エキストラの皆さんが給料分働いている成果だ。

そんな異様な空気なせいで緊張と不安を顔に浮かべる夏希。
「(新しい学校だし、制服もかわいかったから受験したけど…

…失敗だったかも)」

入学式早々、心の中で後悔の言葉を呟く夏希だった。

栗色のセミロングヘアが似合う、良くも悪くも平凡な少女
岸夏希。

サラリーマンと専業主婦の間に生まれ、経済状況は中の下くらいだが、明るく平凡な家庭で育ち、小中の学校生活もたくさんの友人に囲まれ平凡な人生であった(一部脳内歴史改ざんシステム発動)。

しかし、この学園に入学したことを期に、平凡な人生がチョメチヨメになるとは、夏希は知るよしもなかったのだ……。

フリーに転向した女子アナの司会で入学式は進む。

「では続きまして、新入生代表挨拶。新入生代表

魅神

菊乃」

名を呼ばれた女子生徒が席から立った瞬間、異様なざわめきがさざ波となってホールに広がった。

遠くの席から見ていた夏希も眼を丸くしている。

その瞳に映ったのは黒衣の少女。学園指定の制服と形は同じだが、色が黒なのだ。しかも、着物の柄のような花や蝶がちりばめられている。

「（絶対に特注だー）」

心の中で夏希が叫んだ瞬間、壇上へ登ろうとしていた菊乃が、艶やかな黒髪を靡かせながら急に振り返った。

夏希は思わず息を呑んで、心臓を鷲掴みに潰された。

人の姿をした狐がこちらを見ている。

それは菊乃が被る狐のお面だった。彼女はその日本人形のような出で立ちに加え、狐面で顔まで隠す変質者だったのだ。

壇上に立った菊乃はマイクに向かって小さな声で話しはじめた。

「下賤な新入生たち、浮かれているのも今の内よ。貴様らは明るい未来など本当に信じているのかしら？ うふふ、馬鹿馬鹿しい」

一瞬にしてホールは『は？』という感情に包まれた。

そして、菊乃はこう続けたのだ。

「早く首を吊って逝ってしまいなさい、そうすれば楽になれるわよ。ただし、首を吊った屍体を皆さんは見たことがあるかしら……鬱血により「長い自主規制」、それだけでも無惨だといふのに、首を吊る前に食事を摂っていたり、用を足していなかったりすると「長い自主規制」。死して醜態を晒すのと、生きながらにして醜態を晒すのと、どちらがいいのかしらね、うふふ」

蒼い顔をする者や席を立つ者が続出。

何であんな「自主規制」女に代表挨拶させるんだよ といふ暴動が起きる寸前だった。

夏希も話を聞きながら口に手を当てていた。

「何あの人……どうしてあんな人が代表挨拶に選ばれたの？」
独り言のように呟くと、隣にいた女の子が小さな声で教えてくれた。

「入試でトップの人が挨拶するらしいよ。あの子、全教科満点だったんだって」

「ホントに!?(やっぱり頭の良い人って変わってるのかな)」「ビックリしながらも妙に納得してしまった夏希。納得できるレベルなのか？」

周りの空気など気にせず菊乃は話を続けている。

「わたしは大勢の前に立ちたくはなかった。怨み決して許さない、退学という暴力を突きつけ、わたしをこの場に立たせた

その女を」

狐面が振り向いた先にいたのは桜色の髪をした舞桜だった。

「君が駄々をこねるから、仕方がなく退学という言葉を持ち出したんだ。しかし、結局のところ君は屈したのだよ、その場に立っているのだから」

「復讐は近いうちにするわ。この学園の悪しき裸の王様のあなたから、権力も財産もすべて失わせてあげる。路頭に迷ったあなたを誰も助けてはくれない。人知れず汚い路上で朽ち果て、野犬に喰われ臓物を「自主規制」で死んでいくのよ」

「身ぐるみを剥がされ、地位や名誉を奪われようと私は構わない。もつとも大切なモノは君ですら奪うことはできないそれは勇氣だよ」

凜と言い放った舞桜は神々しいまでに輝いていた。スポットライトを当てる黒子が良い仕事をしているからだ。

菊乃は踵を返して舞桜に背を向けた。負けを認めただけではない。

「あなたは手強いわ。けれど、すでに弱点は見つけてあるから、楽しみにしていて頂戴」

そのまま菊乃は壇上を降りてホールの出口へと歩き出してしまった。

途中、菊乃は一度だけ足を止めた。

狐面が見つめるその方向には？

「……え？（あたし？）」

夏希は眼を丸くした。

「そう、貴女よ」

遠く離れた場所で、尚かつ小さな声だったため、菊乃の言葉が夏希に届くことはなかった。

しかし、その言霊は確かに夏希の背筋をゾツとさせた。

「寒っ！」

微妙になってしまった空気を持ち直そうと、スタッフが女子アナに司会の続行を促しているのだが、アレ、音が入らない？

誰だマイクの電源落としたヤツ！！

ハツとした人々が脳裏に浮かべたのは妖狐の少女。妖術か、妖術とか駆使したのかッ！

騒ぎを治めようと舞桜が壇上に立とうとした瞬間だった。

頭上からライト落下！

絶対に呪いだ！

落ちてくるライトを悠長に見つめる舞桜はまったく動じていない。だが、逃げるそぶりも見せなかった。

このままでは重症患者が一名緊急輸送されてしまう　と思つた刹那、どこからともなく現れたピンクの影がライトに飛び蹴りを炸裂させた。

リング大好きニユートンが唱えた　運動の三法則　に則つて、舞桜の頭上に落ちるハズだったライトは軌道を変え、強い力で蹴られたため遠くまでぶっ飛んで逝つた。

舞桜は何事もなかったようにメガホンを手に取っていた。

「このあと、ペンギン村で活躍した前総理大臣の挨拶などを予定していたが、皆もそろそろ退屈してきたころだろう」

ひとり前のアベ・ハートではないのは、やはり人気の問題だろうか。

「というか、ハプニングが続いて退屈なんてしてられませんか？」

「と言いますか、ピンクの影はノータッチ？」

「予定をすべてキャンセルして、私の権限で入学式を終わりにする」

「すでに過半数が舞桜の発言についていけてない。

「それでは、これより第一回エクストリーム生徒会選挙を開催する！」

唐突な開催宣言に一〇パーセントの生徒もついていけてないだろう。内閣だったら不信任案を出されても仕方がないパーセンテージだ。

「ルールは至って簡単だ。いち早くゴールにたどり着いた上位五名が一位から順に、会長、副会長、書記二名、会計に任命される」

何か大事な説明が欠落してませんか？

暴走して話し続ける舞桜を止める者はいなかった。だってここで一番偉いんだもん。

「すでにレースに参加する一〇一名は選抜されている。もちろん、それ以外の者も参加を認めよう。しかし、選抜された諸君らは強制参加である。正当な理由なくレースを辞退した場合は、学園中の便所掃除一年間というペナルティが待っているのだから。なお、生徒会役員になった者は三年間の学費免除、さら

に会長になった者には、私の力でどんな願いも一つだけ叶えてやろう！」

生徒会選挙ですよな？

民主主義に則って投票方式ではないのですか？

ここは独裁国家なのでしょうか？

そんなわけで第一回エクストリーム生徒会選挙が幕を開けたのだった。

てゆーか、本当にピンクの影はスルー？

入学式のあと、生徒たちは決められた教室へと移動した。ここでクラスメートと初顔合わせだ。

一年A組の教室に入った夏希はほっと胸をなで下ろした。

なんだか普通だ。

舞桜と菊乃のインパクトが強すぎて、人間不信に陥って周り全部あんなじゃないかと錯覚するところだった。

ところがどっこい、すでに教室に集まっていた生徒は少なくとも見る限りは普通。交流を持ってみないと確証は得られないが、兎にも角にも一安心だ。

夏希は中学生の入学式を思い出した。

はじめての教室。

市立の中学だったので、小学校からの顔ぶれも多かった。

今は独り。

でも、新たな環境を臆することなく、むしろ夏希は楽しみにしていた。

とにかく誰かに話しかけてみようと試みる寸前だった。

この教室から音が盗まれてしまった。

華麗な盗人は生徒たちの心も奪い、その視線を一心に浴びて教室に入ってきた。

「ご機嫌よう、我がクラスメートたちよ！」

桜色の髪の毛を靡かせ颯爽と歩く舞桜。軽やかな足取りで迷うことなく、夏希の横の席に鎮座した。

「エーッ!？」

叫ぶ夏希。

自分の横にあの天道舞桜が座った!?

すっかり他人だと思っていた要注意人物が、まさか今こうして横の席にいるなんて!?

瞳をクリクリさせる夏希と向かい合った舞桜は、キラーンと輝く歯を覗かせながら神々しいまでの笑顔を浮かべた。

「はじめまして岸夏希さん」

「どうしてあたしの……」

言いかけたそのときだった!

ぶちゅっ

唇と唇が重なったのをここにいる全生徒が目撃して白く固まった。

舞桜に抱き寄せられ、驚異の早さで夏希は唇を奪われたのだ。真っ昼間から接吻なんてけしからん!

驚きのあまり抵抗も出来なかった夏希だったが、急に我に返って舞桜の肩を突き飛ばした。

「何するの!？」

叫んだ夏希の顔は真っ赤だ。怒りではなく、恥ずかしさでいっぱいだった。

今も唇に残る感触。

嫌な感じはしなかった……むしろ……。

「(気持ちよかったなんてあたしどうかしてる!)」
すでに夏希は籠絡されていた。

「(しかも同じ女の子なのに!)」

それがシヨックを倍掛けにしていた。

性犯罪者のレッテルを貼られても可笑しくない当の本人は、平然とした態度で悪びれた様子もない。

「顔を赤らめ恥ずかしがる君も実に愛らしい」

「あたしのことからかわないで!」

涙を目頭に溜めた夏希は教室から走り去ろうとした。

その手を舞桜が握って引き留めた。

「また逃げるのかい、君は?」

何を言われているのかわからなかった。だが、その言葉で夏

希は足を止めた。

「逃げる?」

「君がどんな中学時代を送ったから調べさせてもらったよ」

急に夏希の顔に暗い影が差した(脳内歴史改ざんシステムにエラー発生!)

「(何を知ってるの? どうして、なんで……わかんないよ)」

「君のことは私が一生守ろう。なぜなら君は私の婚約者だからね！」

「……はっ？」

暗い気分そのまま呑み込まれるかと思われた夏希だったが、あまりの素っ頓狂な舞桜の発言ですべて吹き飛んでしまった。

教室中が息を吹き返したようにざわつきはじめた。

世界的大富豪の孫娘に婚約者発覚！

これはマスコミも食いつくスキャンダルだ。

天道舞桜の人気は計り知れない。特にネットではカルト的な人気を持っている（一部噂では、莫大な資金を投入した自作自演とも言われている）。

婚約者だと名指しされた夏希の人生がスツテニコロリンすることは目に見えている。

とりあえずストーカー被害からはじまり、最悪舞桜のファンに暗い夜道で刺殺のオチがつくだろう。

しかも、相手が“女”なんて、男どものシヨックも計り知れないが、ネットで『舞桜お姉様』と萌えている腐女子どもの嫉妬も計り知れない。

許容範囲を越えた出来事に夏希は挙動不審になるばかり。

「待つて待つて、あの、その、これじゃなくてそれじゃなくて、何がどうして、婚約者つて結婚を前提に……前提にいつ!? あたし女の子なのわかってですますよね、天道さんつてレズなんですか!!」

一方の舞桜は冷静そのもの。

「ピアンだとかゲイだとか、性別という概念は私にとってさほど重要なことではない。好きなモノは好き、自分の気持ちに素直なだけだよ。好きなモノには頬を重ね、キスを試みたくならないかい？」

「なりません。普通女の子同士でキスもしません。女の子同士で婚約者になったりもしませんから！」

「それは法律上の問題を言っているのかい？」

「そういうことじゃなくて、なんでわかってくれないの！」

「理解しようとしていないのは君のほうだ。人が人を好きになることを尊重し、性別における固定概念など捨てるべきだ」

「あーもー聞きたくない聞きたくない」

夏希は自分の席に逃げ帰って、耳を塞いで机に顔を向けてしまった。

ため息をついた舞桜が教室を見渡すと、一斉に生徒たちは顔を逸らして何事もなかったように自分の席についた。きつと生徒たちの気持ちは悶々してるに違いない。

次の展開が気になる。ここで来週に続くなんて言わせない。早く続きが見たいのだ！

舞桜は自分の席に鎮座して、真摯な瞳で夏希を見つめた。

「そうやってまた殻に閉じこもる気かい？」

反応はなかった。夏希は耳を塞いだまま顔を伏せたまま。それでも構わず舞桜は話し続けた。

「この学園は君の意思で来たのだろう？ 新たな世界で変わろうと君は意気込んでいたはずだ。それを初日からすでに塞ぎ込

んでしまつては、また同じことの繰り返しだ」

ゆつくり夏希は耳から手を離し、うつむいたまま口を開こうとした。

「……あなたのせいでしょ」

低く怨みのこもった声。

確かに舞桜は怨まれても当然な性犯罪者予備軍だ。キスはするわ、夏希の地雷は踏むわ、謝る気ゼロだし、親の顔が見てみたい（親も有名人です）。

そんなもつて舞桜は甘い声でこんなことを言い出す始末。

「君にそんな声は似合わないよ。君の笑顔で明るい声が私は好きだよ」

どう考えてもナンパだし、空気が読めないにもほどがある。

さらに舞桜はこう続けたのだ。

「しかし私のせいにするのもどうかと思うね。世界は今日も君や私、ここにいる一人一人を中心に廻っている。世界を変えられるかどうかは君次第だよ。その手助けになるように、私はすでに君へチャンスをお贈りしたのだけれどね」

ハンターチャ～ンス！

巡ってきたチャンスをお獲つてモノにできるかは自分次第。けれど、舞桜が夏希に贈ったチャンスとは？

ついに夏希は顔をあげた。言葉は発しない。ただ目で舞桜に訴えかけ、答えを欲している。

舞桜は深く頷いた。

「私が君をこの学園に入学させたのだよ」

「……………（入学させたってどういうこと？）」

「残念ながら君のペーパーテストの結果は見るに堪えないモノだったからね。まさかマークシートをずらして記入するなんて、本来ならば不合格とするところをだったのだが、面接や自己アピールの資料の評価は良かった……というのは建前で、私の婚約者を不合格にするわけにはいかないからね、学園長の特別推薦で合格を認めたのさ」

それって職権乱用？

知らないうちに裏口入学？

夏希シヨック！

さつきまでとは違うシヨックで夏希は落ち込んでしまった。

「頑張ったのに……テスト勉強とか面接の練習とか頑張ったのに……実力じゃなかったなんて……（あー立ち直れない）」

「運も実力のうちさ。君は合格してここにいる。それこそが大切な事実なのだよ」

何かもつともらしい発言で煙に巻こうとしている。

しかもこの話題はここで打ち切りと言わんばかりに、白衣を着た爆乳教師が教室に乗り込んできた。

「ハロオ〜エブリバディ！ アタクシはこの学園を影から支配する……じゃなかった。このクラスの担任の鈴鳴ベルすずなりよおん

ー

ブロンドの髪と日本人離れた顔とナイスボディ。爆乳もさることながら、タイトスカートから伸びる脚がエロイ。犯罪的な色香を漂わせる美人教師に男子生徒たちの眼は釘付けた！

生徒と女教師の禁断の愛を妄想した者も少なくないハズ。

「その男子、おっ立ってセルフ紹介をしなさい」

ピシッと人差し指を向けられた男子生徒は、「自主規制」がおっ勃ちそうになったのを抑えて、モゾモゾしながら席を立った。

が、しかし、口を開こうとしていた生徒は放置プレイでベルは次の話題をはじめていた。

「まずスチューデント手帳配るわよ。イエスタデイから授業はじまるけれど、教科書はちゃんとエブリバデイのホームに郵送されてるわよね。届いてない人いたらセルフでどうにかしなさい」

男子生徒はおっ立ったまま。

ベルは白衣のポケットから紙切れを取り出した。

「生徒会選挙は一時からよ。このクラスからも何名か選ばれているわ。自主的に参加したい人はセルフでどうにかしなさい。他の者は帰宅するか、特設会場で応援もできるわ。それでは可哀想な強制参加者という生贄のネームを読み上げるわよあん」

男子生徒の放置プレイは続く。

全校生徒は約五〇〇〇人の中から一〇一名が選抜される。一クラスあたりの人数は約五〇名なので、一人くらいは名前が呼ばれるハズだ。

ベルが爆乳を揺らして声を張り上げる。

「天道舞桜！」

さらにもう一人！

「岸夏希！」

「……うっそ〜っ！」

思わず夏希は机を叩いて立ち上がっていた。

完全にヤラセだ、仕組まれていたワナだ、天道舞桜の陰謀に
違いなかった。

第一回エクストリーム生徒会選挙の映像は、現場の中継車から
ビビッと電波を飛ばして特設会場及び、海上都市アトランテ
イス内のテレビが見られる場所で観覧可能だ。

レースの勝敗は至って簡単。早くゴールをしたもん勝ち。上
位五名が生徒会役員に任命されることとなる。

見事、生徒会役員になれた暁には三年間の学費免除。さらに
会長となった者は舞桜がどんなお願いでも叶えてくれるらしい。
ちなみにレースには反則が設けられていないため、一部の参
加者たちが卑劣な手段を行使することが予想されている。

それではコースの説明を　　と言いたいところだが、レース
がはじまるまでコース内容はトップシークレット扱いなのだ。

ただの徒競走かもしれないし、トライアスロンかもしれない
し、最悪の場合は生死を賭けたサバイバルレースかもしれない。
自主参加者はまだしも、強制参加者たちが不安を抱かないハ
ズがない。

何が不安を煽っちゃっているかと言うと、参加者の目の前に
広がる密林……やっぱりどう考えてもサバイバルだし！

この密林は関係者の間では、特別演習場と呼ばれる設備だ。野生の自然環境を再現し、動植物もわんさかしている。何の演習場なのかはシークレット扱いだ。

スタート地点に集められた参加者たちはざっと一〇〇名ちょい。自主参加者はあまりいなかったようだ。

強制連行された夏希は不安を覚えながら、なんだかんだ言いながら舞桜の傍にいた。この状況下で他に頼る者がないという理由だが、よくよく考えたらこの状況の元凶は舞桜である。

どこからか黒い邪気がっ！

かの有名なハウツー本にも描かれている海を割った老人パフオーマーのごとく、その黒い影は割れた人混みを通ってこちらにやってくる　魅神菊乃だ。

「天道さん、事故には気をつけることね」

その言葉だけを残して音もなく立ち去ってしまった。

夏希が小さく舞桜に耳打ちする。

「魅神さんだよ。あの人も選抜組なの？」

「ああ、彼女は私を抜いて学年首位の成績で入学したから当然だ。しかし、彼女が選ばれた理由はほかにある」

「（変わり者だからかな？）どうして？」

「彼女の血筋は凄まじい。代々オカルトに家系に生まれ、父はゴーストハンター、母はイタコというオカルト界のサラブレッドだからな（重要な戦力となることは間違いないが……）」

重要な戦力とはどういった意味だろうか？

レースの開始時刻が刻々と迫る。

スタートラインギリギリに立っている者は少ない。強制参加組のほとんどは、ちょっと下がったところに立っている。

もちろん舞桜は先頭に立っている。道連れの夏希も同じ位置。

「天道さん会長目指してる……の？」

「何を今更、学園を支配下に置くためには当然じゃないか」

「(支配下って)学園長なんだからもう十分じゃ？」

「実力で得た地位でなければ意味がないのだよ」

「(この人が何考えてるのかわかんない)」

生徒会役員をレースで決める時点で意味不明だ。けれど、はじめから“ただの生徒会役員”を選ぶためではないとしたら……。

五〇〇〇もの生徒がいれば、中にはヤル気満々の命知らずも一人か二人はいるだろう。

スタート地点で動作過剰で準備体操をする青年。

「ギヤーツ足つつた！」

そして、地面に転がって悶える青年。

どう見てもアホです。ごちそうさま、お腹いっぱいのアホでした。

AHOとは空気感染を引き起こすウイルスの一種だ。耐性のない者はすぐに感染してしまう。それ故に、アホは無視するのが一番である。

だから地面で悶えるアホに優しい言葉なんて掛けてはいけな
いのだ。

「大丈夫？」

夏希が声を掛けてしまった。

目と目が合う瞬間。

時間が止まり、まるで世界にいるのは二人だけ。

青年は静かに言葉を紡ぎ出す。

「家族以外の女に声を掛けられたのは一年と三ヶ月ぶりだ」

……キモッ！

そうと決めつけるのはまだ早い。引きこもりだったから仕方なく……それはそれで（コメントは差し控えさせてもらいます）。

変なヤツに関わってしまったと気付いても遅い。普通は関わる前に気付くものだ。これがアホウイルスの恐ろしいところである。

夏希がどうやってこの青年との関わりを断つか考えていると、いきなり！

「オレ様と結婚してくれ！」

出会って三分もしないで愛の告白！

慌てる夏希。

「え、え、えっ、そんなこと言われても困る！」

「その通りだ、私の女に手を出さないで貰おう！」

白い鞄から趨はしった輝線きせん。

刀の切っ先を青年の首に筋に突き付け、そこには舞桜が立っていた。華麗な銃刀法違反だ。

殺意のこもった瞳で舞桜は青年を睨んでいた。

「邪道ハルキ……久しぶりだな」

「邪道じゃない霸道だ。会わないうちに……オレ様より身長高くなりやがって、シヨックで立ち直れねえ！」

両手両膝を地面に付けるといふ、ネット上で有名なポーズで落ち込む霸道ハルキ。

「どうやら二人は知り合いらしい。」

落ち込んでいたかと思うと立ち直りも早いハルキ。

「だが、身長は伸びても胸はぺったんこだな！ 胸囲で勝負したらオレ様が勝てるくらいの無乳だな！ 勝った、オレ様は勝つたんだ、あの大富豪の天道一族に勝ったんだ！」

目頭から熱い心の汗を流しながら勝利を嘔みしめるハルキ。

舞桜は眼から冷凍ビームをハルキに浴びせている。

「むにゆうとは何だ、新種の軟体動物かなにかか？」

「無い乳って書いて無乳だバーカ！」

「つまり私のことを蔑む暴言と解釈するべきだな。しかし、胸がないことに私は何のコンプレックスも持ち合わせていない。

さらに言えば、狩猟民族のアマゾネスは、弓を使う際に乳房が邪魔になることから切り落としていたとも伝え聞く。つまり豊満な胸とは無駄なものなのだ」

「バーカバーカ強がつてんじゃねえよ、バーカ！」

バカつて言う方がバカを体現している素晴らしい標本だ。

ハルキの声なんか右から左に受け流す舞桜は、メガホンでしゃべる職員に耳を傾けていた。どうやらスタートまで「あと一分」というアナウンスをしているらしい。

「夏希、トップでスタートするぞ」

「あたし別に生徒会役員にならなくても……（頼まれてもやりたくないけど）」

すでに舞桜の視線は遠く、夏希の言葉が届いているかわからなかった。

スタートまで一〇秒を切った。

審判がショットガンを構えたのを見て動揺する生徒がいる間に。

「位置について！」

3、2、1。

バン！

天空に木霊する銃声の合図と共にいち早く飛び出した舞桜が

コケたツ！

「ッ！」

「お先に！」

そう言っただけでニヤッと笑ったのはハルキ。こいつが足を引っかけたのだ。

だが、舞桜は超絶的な運動神経を発揮して、地面に手を付けて倒立前転にひねりを加えて華麗な新体操を披露した。しかも、どの角度からでもパンチラしないという神業。

が、着地の瞬間に完璧は崩壊した。

ゲキッ！

これは実際に聞こえた音ではない。心象の音だ。まさにこの状況に相応しい擬音。

なんと舞桜は着地に失敗して足をひねってしまったのだ。

ズサーッ！

しかも、勢い余って顔面から地面にダイブした。

ありえない、あの天道舞桜がこんな痴態を晒すなんて明日は季節外れの雪が降る！

カエルのように地面にへばる舞桜の横を静かに通り過ぎる黒い邪気。

「まだ序の口よ、天道さん」

菊乃だった。

この瞬間、一部始終を見ていた夏希は思ったことを口に出してしまった。

「呪っ！」

物的証拠はない。でも、でも……詮索したら呪われそうだからやめておこう。

恐怖のあまり誰も動けない中、長身の男子生徒が舞桜に手を差し伸べた。

「大丈夫ですか天道さん」

何故かこの場に鋭い憎悪が駆けめぐった。

理由は顔に出やすい夏希を見ればおのずと見えてくる。

瞳をキラキラさせながら、ちょっぴり頬を赤らめる表情といったら？

「(あの人……とってもイケメン)」

夏希はイケてると思った程度だったが、中には嫉妬を渦巻かせる女子もいる。王子様に手を差し伸べられた姫が目の敵にされたのだ。

そよ風のような爽やかな風体と、決して暑苦しくない優しい笑顔。一部の非モテの男子からは大変嫌われそうな感じがする。だが、そんな王子様もフラれることもある。

舞桜は差し伸べられた一瞥しただけで、自らの力でゆっくりと立ち上がった。

「男の手は借りない。だが、気遣いには感謝しよう 鷹山たかやま

雪弥ゆきや（闇の狩人と聞いていたが、実際に会ってみると印象が違
うな）」

雪弥は静かに手を下げた。

「僕の名前を知ってるなんて驚きだな」

「（僕……か）全校生徒の顔と名前くらいは覚えて」

舞桜の言葉が突然遮られた！

「きゃ〜っ、転んじやつたあ〜！」

女子生徒がコケていた。ワザとらしくというか、絶対にワザと。抜け駆けした女子生徒の末路を考えると怖くて眠れない。

すぐに雪弥はその女子生徒に駆け寄っていた。見事にブリッ
コの術中にハマった形だ。

「きゃん、あたしも転んじやつたあ〜！」

「あたしも〜！」

「わたしも〜！」

「おいどんも〜！」

次から次へとあがる女子の声。

ちよつとした特異な状況と化したこの場だが、舞桜には興味
のないこと。

「出遅れたが行くぞ、夏希」

舞桜は夏希の手首を握った。やっぱりこうなるらしい。

「あたしは……あつ、天道さん鼻血」

舞桜の鼻から鼻血が出遅れた。転んだ衝撃が今になってやってきたのだ。

が、次の瞬間、ピンクの影が舞桜の前を通り過ぎたかと思うと、綺麗さっぱり鼻血が消えていた。

「どうした夏希？」

何事もなかったように尋ねる舞桜。

夏希は動揺しながら、眼を白黒させていた。

「えっ……ううん、なんでもない。勘違いだったみたい（絶対勘違いじゃない。なんだったんだろう、今の影？）」

結局、ピンクの影はスルーされた。

エクストリーム迷子・イン・ジャングル！

ジャンジャングル目ぐる目が回るほどの密林地帯。

まさに自然の迷宮^{ラビリンス}。

生い茂る草木が網の目のように行く手を塞ぐ。

まさに自然の猛威。

腕組みして立ち尽くす舞桜と、その場にしゃがみ込む夏希。

まさに自然な迷子。

「可笑しい……景色が同じに見える」

眩いた舞桜。

そして、つつこむ夏希。

「それは典型的な迷子だと思っただけど（天道さんって方向音痴なのかな、完璧そうに見えるのに）」

方向音痴でなくとも、この密林は人を迷わす。

ほら、耳を澄ませてごらん。今日もどこかで誰かの悲鳴が…

…。

「ぎゃあッ！」

男の絶叫だ!?

ハツとした夏希はすぐに立ち上がって辺りを見回した。

舞桜もまた声のした方向を探して、歩き出そうとしていた。

「夏希、あっちだ！」

踏み出そうとしていた舞桜の腕を夏希が掴んだ。

「ちよつと、そっちじゃなくてあっち」

夏希が指さした方角は舞桜が行こうとしていた真逆だった。

「……例え夏希が言うことでも、真実を曲げることはできない。

あっちだ！」

絶対譲らない舞桜だった。

「そんなことないって、絶対あっちだし！」

こっちも譲らない夏希。

そーこーしているうちに、また悲鳴が！

「助けるーッ！」

声は夏希が向いている方向から確かに聞こえ、さらに爆走してくる人影が!?

必至の形相で駆け寄ってきたのは霸道ハルキだった。

恐ろしいことにその後ろからは……半裸の部族チツクなお兄

さんたちが追ってくる。どこが一番恐ろしいって、チン子を隠す筒状のケースが異様にデカイことだ！

掘られる！

舞桜は冷静に、

「ふむ、知らないうちに原住民が住み着いていたらしい」

どこか言葉の間違っているような気がしなくてもないが、ジヤングルに住む原住民っぽい格好の男たちが、そこにいるという現実が大切なのだ。

逃げてきたハルキは舞桜の背中に隠れた。

「助ける、オレ様たちマイフレンドだろ！」

「お前に友達など一人もないだろう。まあいい、夏希に危害が及ぶ前に成敗してやろう」

舞桜はどこからか鞘を取り出し、刀を抜いた　ハズだった。

「竹光!？」

思わず舞桜は叫んだ。

竹光とは貧乏侍が刀を質入れした際に、腰の寂しさと見栄から竹で作った刀身を鞘に収めた偽物の刀のこと（抜かなきゃ偽物だってバレない）。現在では銀紙などで加工して、時代劇で用いられたりする。

が、別に生活苦でもない舞桜がこんな刀を所持している理由もない。

気まずそうな顔をしている野郎がひとり。

舞桜の背中に隠れていたハズのハルキは、いつの間にか夏希の背中に移動していた。

「なんつーか、オレ様がすり替えて置いたというか（舞桜を困らせてやるつもりが、失敗した）」

これこそ本当にいつの間に？

そーこーしているうちにナント力族（仮称）は、舞桜の目の前まで迫っていた。

ナント力族は手に槍（本物）を持っている。対する舞桜は刀（竹光）で応戦する。

が、一回刃を交えただけで竹光粉碎。

それでも華麗な動きで舞桜は敵を翻弄している。最中だった。急に舞桜が眉を寄せて体勢を崩した。

夏希が叫ぶ。

「まだ足が！」

そう、今となっては呪いか事故わからないスタートでコケちゃった事件。あれで痛めた足がまだ治っていないかったのだ。

でもよくよく考えてみると、全部ハルキのせいだ。

地面に手を付いた舞桜をナント力族が取り囲み、鋭い槍の切っ先がのど元や心臓に突き付けられる。

これってまさかの絶体絶命!?

夏希は思った。

「（また……ピンクの影が……お願い助けて!）」

舞桜の近辺に出没する謎のピンクシャドウ。再びあの影が姿を見せるのか!

「アア、アッ!」

どこからともなく発声の良い雄叫びが!?

アレはなんだ、ターザンだッ！

木から垂れ下がっているツル　いわゆるターザンロープを
使つて、木から木へと飛び移ってくるターザン。

ターザンキック！！

振り子の原理で破壊力抜群の跳び蹴りがナントカ族の顔面に
ヒット。

「アーアー、アッッ！」

雄叫びをあげながらターザンはナントカ族をバツサバツサと
倒していく。まさにジャングルの王者と呼ぶに相応しい。

そして、ナントカ族を倒し終えたターザンは嵐のように去っ
ていった。

「アーアー、アッッ！」

という高らかな雄叫びを残して……。

呆氣にとられる夏希。

「なに……今の？（映画の撮影所に迷い込んだんじゃないのかな、
あはは）」

舞桜は冷静な顔をしながら呟く。

「まだまだ修行が足りないな（足が痛むといえど、勝負にはは
じめから平等などありえないのだから）」

そして、ハルキはというと、

「あーははははっ、どうだ参ったかオレ様の實力にひれ伏すが
いい！」

地面で気絶するナントカ族を足で踏んづけていた。恥ずかし
げもなく自分の手柄にする性格がスゴイ。

さらにハルキは舞桜たちを置いてさっさと先を進もうとしていた。

「じゃ、お先に！」

なんて言って走り出した矢先だった。

「ぎやあ〜ッ！」

デジャブーというか、聞き覚えのある叫び声というか。

夏希が視線を向けると、なんだか知らないけど、ハルキが宙吊りになっていた。

「え……なに？（なにあの変なのっ！）」

急に眼を丸くして夏希は現実を目の当たりにした。

地面から伸びる縄のような触手が蠢いている。それも何本も何本も、意思を持ってハルキを拘束していた。

夏希は恐怖心より先立って、足が前へと駆けだしていた。

「今助けるから！」

「よせ夏希！」

舞桜が止めようとしたが、すでに遅かった。

夏希の足首に触手が巻き付いた。

「きゃっ！」

宙吊りにされる夏希。しかも逆さ吊り。慌ててスカートを押さえてパンツを隠す。

触手の皮膚からは粘液が噴出し、這うようにして夏希の体を締め上げる。

それほど夏希の胸は大きくないが、締め上げることによってバストアップ効果がもたらされた。巨乳のねーちゃんじゃない

ことが悔やまれる。嗚呼、本当に残念だ。

それでも触手と美少女の取り合わせといったらエロの殿堂。触手は夏希のふとももを這って……。

「イヤーツ！」

自主規制が入る寸前、槍を構えた舞桜が華麗に舞った。

槍の残像が次々と触手を突き刺し、斬り刻み、紫色の汁を飛ばしながら暴れ回る触手は夏希を解放した。

地面に落ちる夏希を受け止め、お姫様だっこする舞桜。

「大丈夫か夏希？」

涙目の夏希は無言のまま頷いた。

舞桜は小さく微笑んだ。

「夏希は強いな……」

ゆっくりと夏希の体を地面に下ろし、『後ろに下がっている』と目で合図してから、舞桜は再び槍を構えた。

触手は敵を剥き出しにして舞桜に襲いかかるうと蠢いている。一方、ハルキはいつの間にか緊縛されて、なんだかSMで見たことありそうな縛り方で宙吊りにされていた。

「おい、オレ様のことも助ける！」

だが無視！

舞桜の視界にハルキは入っていない。入っていたとしても、認識していない。

「おい、オレ様のことも助けるって聞いてんのかよ！」

だがシカト！

ついに触手が舞桜に襲いかかる。

舞桜も地面を蹴り上げた。

刹那、舞桜の瞳に紅い炎を飛び込んできた。
なにか起きたのか数秒を要した。

突如、触手が紅蓮の炎に包まれ燃え上がったのだ。

夏希は『あつ！』と小さく声をあげた。

一瞬、ピンクシヤドウが見えたような気がしたのだ。

「あつちい〜！」

触手から逃げ延びたハルキが尻に火をつけて走っていく。

突然の出来事にも舞桜は冷静に腕組みをして結論を出した。

「うむ、自然の猛威だな。雨露がレンズ代わりになつて火災が起こることなど多々ある」

それにしても一気に燃えすぎじゃ？

火の手が早すぎて飛び火しちゃってるようにも見えますが？

気付けば辺り一面火の海にも見えませんが？

あれ……いつの間にか火に囲まれて逃げ場失つてない？

……みたいなの。

どこからともなくボソツと声が聞こえた。

「……あ、やりすぎた」

燃えさかる音に掻き消され、さらにパニックっている夏希の耳にその呟きは届かなかった。

「天道さん！ どうしよう、逃げられないよ！」

「チャンスはいつ巡ってくるかわからない。まずは冷静になることが大切だ。そうすればチャンスを逃さずに済むものなのだよ」

「そんな悠長な！ あの、えーっと、あの男子どこ行ったの！」

「ハルキならとつくに逃げたのではないか？ 実に賢明な判断だ」

炎の壁が舞桜たちに迫ってくる。

気配はしなかった。けれど、その影はいつの間にか夏希の前に立っていた。

「女、下がっている。この事は他言無用だぞ」

「えっ、ウサギ!？」

夏希の前に背を向けて立っているピンクのウサギ　のきぐるみ!?

舞桜は驚いた様子も見せていない。それどころかピンクウサギに視線を合わせようとしていない。

ピンクウサギはゆっくりと片手を上げ、手のひらを炎に向けた。

「トルネード！」

高らかな声と共に突風が巻き起こり、炎の一部を掻き消し、海を割ったような一本の逃げ道を作った。

それを見た夏希は信じられないながらも、その言葉を口にしていた。

「魔法？」

炎の勢いはまだ治まったわけではない。

舞桜が夏希を抱きかかえた。

「奇跡が起きたようだ。行くぞ夏希！」

ぐずぐずしていると再び炎が勢を増して逃げ道を塞ぐ。

しかし、夏希はそんなことより、ピンクウサギと超自然現象の因果関係が気がかりだった。

気付けばピンクウサギは姿を消している。

「天道さん見たよね、今見たでしょ！　ピンクのウサギが炎を消したんだよね！」

「ん……何を言っているのだ？　まあいい、とにかく抜けるぞ！」

舞桜は夏希を抱えたまま全速力で炎に左右を囲まれた道を抜けた。

抜けてもまだ炎は後ろから追ってくる。気を抜かず舞桜は安全な場所まで夏希を抱えたまま走った。

しばらく走り続けていると、上空からプロペラ音が聞こえた。空を見上げると木々の隙間から飛行機が見えた。

「ふむ、消火部隊が到着したようだ。じきに火災も治まるだろう」

冷静な声音で舞桜は呟いた。さっきまで炎の中にいたとは思えない。しかも、ピンクウサギが超自然現象を起こしたというのに、まったく驚きもしていないのだ。

夏希は不思議な顔をしながら舞桜に尋ねる。

「天道さんの知り合いなの……あのピンクのウサギ？」

「さっきもそんなこと言っていたな。ピンクのウサギとは何のことだ？」

「えっ……（あたしのことからかってる？　それともとぼけて

る？）」

炎に囲まれたとき、ピンクウサギは絶対に舞桜の目にも入る場所に立っていた。そして、なんだかわかんない超自然現象を巻き起こしたのだ。

夏希は怪訝な顔をしながらも、すぐに首を横に振って取り直した。

「ううん、なんでもないの気にしないで（触れちゃいけない話題なのかな。でもあのピンクさん何者なんだろう……すごくカツコイイ声してたような気がするけど、もしかしたらすごい美少年が入ってるのかも！）」

「……何をにやけているのだ？」

「……つなにも、別に！」

夏希は顔の前で手をバタバタさせて真つ赤な頬とにやけた口元を隠そうとした。

不自然な行動をする夏希に舞桜は不思議そうな視線を向けていた。

「炎の暑さで頭が可笑しくなったのか？」

「ぜんぜん平気、ぜんぜん元気。あのおく、そろそろ下ろしてくれない？ 自分で歩けるから」

まだ夏希は舞桜にだっこされたままだった。

「いや、このほうが早い。ロスしてしまった時間を取り戻さなくてはならないからな」

そういえばエクストリーム生徒会選挙の途中だった。

舞桜の目的は一位通過で生徒会長になること。

夏希は生徒会役員なんてやりたくもない。

ここで夏希は考える。

「(ずっとだっこしてもらってるわけにもいかないし。別にあたしの体重が重いわけじゃなくて、天道さん足ケガしてるからぜんぜんそんな風に見えないくらい動いてるけど。それって無理してるのかも、本当は足痛いのに、無理してそんなそぶり見せないようにしてるのかも。だっこしてもらってなくても足手まといになるし、天道さんは一番でゴールしたいわけだし、あたしのことはここに置いて……)」

「ぎやあ〜っ！」

どこか遠くから聞こえた悲鳴。

「……………(やっぱり天道さんについて行こう)」

心に固く誓った夏希だった。

すでに脱落者や病院送りになった生徒が多数。

さすが恐怖のエクストリーム生徒会選挙！

そんなことなどつゆ知らず、とにかくゴールを目指し突き進む舞桜&夏希ペア。

大蛇との死闘や、底なし沼の恐怖、落とし穴や地雷トラップ、ゴリラとの花嫁争奪腕相撲大会などなど、数々な目白押しの困難を掻い潜り、ゴールはすぐそこだった。

ついに舞桜たちはジャングル地帯を駆け抜け、草原地帯までやってきていた。

巨大なゴールゲートが目でも確認できる。

ゴールに向かう舞桜たちを中継車が追いかけて、その勇姿がア
トランテイス全土にライブ放送される。

躍動する筋肉、煌めく汗、青春の輝きがそこに……あるかい
ッ！

もう必至も必至も必至です。

夏希は死相を浮かべ、スタート前に比べ一〇キロくらい痩せ
ちゃったんじゃないかってくらいやつれている。放送ギリギリの
顔だ。

舞桜のほうはというと、制服の所々に汚れや傷があり、表情
も少し疲労を感じさせるが、麗人オーラは崩れていない。さす
がである。

大勢の人々が左右に分かれてゴールに続く栄光の道を作って
いる。

この道を抜ければ、この道さえ越えることができれば、ゴー
ルの栄冠は……。

「舞桜様ががんばれーっ！」

「天道様ががんばってください！」

どこまでがエキストラなのかは不明だが、その声は舞桜を勇
気づけているに違いない。

ゴールはもう目の前 だったのだが。

急に舞桜の足が止った。

立ちこめる黒い邪気。

舞桜たちの進むべき前方に立っている黒い影。

「待ちくたびれたわ」

無機質な狐面が嗤ったような気がした。

ラスボス登場！

その名も魅神菊乃！

あれ……でも、だいぶ前からいるっぽいということは、すでに菊乃がゴールしちゃってるのか？

舞桜は慌てる様子もない。

「何者かがゴールしたらアナウンスがされることになっている。さらに上位五名が決定した時点で選挙は終了、コースにいる生徒は特別班によって回収させることになっている。なぜ君はまだゴールしてないのだ？」

そうなの？

「わたしはここに一位でたどり着いたわ。そして、まだ誰も決勝線に到達していない。いつでもあなたから生徒会長の座を奪うことができた。わたしに負ける筈だったあなたに情けをかけて機会をあげたの。でも、あなたはこれから屈辱を味わうことになるわ。わたしの目的はあなたを生徒会役員にすらさせないこと。それも途中棄権ではなく、目の前で他の生徒たちに抜かれていくのよ」

なかなか面倒くさいことをするもんだ。さつさとゴールしちゃって、さつさと舞桜を生徒会長にさせなきゃいいのに。たぶん舞桜は生徒会長しか興味ないんだから。

悪役つてものは回りくどい作戦を立てたり、無駄に饒舌だったりすることが多いが、まさに今の菊乃はそんな感じだ。

そんな予定調和な悪役の敗北フラグが、多くの正義の味方を

「勝利に導いてきたのだ。」

ただし、この法則が当てはまるのは、本当に菊乃の側が悪役だった場合。

舞桜と菊乃がどんなバトルを繰り広げるのか、そこところは想像も及ばないが、とにかくイケナイことが起こると夏希は察した。

「二人ともやめてよ、仲良くして。新入生挨拶を無理矢理やらされただけで、魅神さんもそこまでして天道さんにしなくても……」

「そうね確かに……」

菊乃は頷いたが、

「けれど、わたしが受けた屈辱はそれだけではないわ。よりによつてこの女は、わたしから面を取った拳げ句、接吻までしたのよ！」

ビシッとバシッと菊乃の指が舞桜に突き付けられた。

舞桜は『何が?』という顔をしている。

そんな横に立っている夏希は回想モードに突入していた。

「(あたしと同じだ。いきなりキスされて……婚約者……もしかして魅神さんも!?)」

「わたしは婚約者じゃないわよ」

嫌そうに菊乃が囁いたのを聞いて夏希はビツクリ仰天。

「えっ……! (あたし口に出してた?)」

夏希は声に出してはいなかった。偶然だろうか?

不思議な顔をして考え込む夏希の隣では、舞桜は不思議な顔

をして考え込んでいた。

「理解できない。面を取り上げたという行為を窃盗行為として見られ、君は私に敵意を向けているのか？」

「違うわ。素顔を見られ、接吻をされたことが恥辱なのよ！」

「君の言っていることは理解に苦しむ。顔を隠す女性がいれば見たいと思うのが当然、さらに美しければ愛を表現することは当たり前行為ではないのか？」

「わたしが美しいだなんて嘘。わたしは醜い、この世でもっとも醜いのよっ！」

菊乃から放たれた黒い風が叫び声をあげながら舞桜を呑み込まんとした。

それがなにか、考える間もなかった。

黒い風は一瞬にして掻き消されてしまったのだ。

菊乃は驚愕した。

「（気配がした……ここには三人しかいない筈。周りの人間どもの雑音で 声 が聴こえないの？）」

ゴール付近に集まっている聴衆。先ほどまではレースの行方を見守っていたが、菊乃が放った超自然現象を目の当たりにしてざわついている。

声 とはなにか？

菊乃は声を殺して静かに尋ねる。

「どうやってわたしの攻撃を防いだの？」

「さて、生まれたときから私はどうやら奇跡の力に守られているらしい。魔王としての潜在能力が覚醒したのだろう」

おかしなキーワードが出てきて夏希は『は？』とした。

「マオウって言ったの？ それともマオって言ったの？」

「魔王と言ったのだ。私は古の魔王の生まれ変わり。以前の記憶や力は失われてしまったが、心がそうだと言っている」

「（この人、変なだけじゃなくて、頭もおかしい人だ。きつと奇跡の力なんかじゃなくて、ピンクさんが守ってくれたんだと思うけど）」

すぐに夏希は背筋をゾツとさせた。狐面が夏希を見つめるように顔を向けていたのだ。

「ピンクさん？ やはりこの場に見えない誰かがいるのね」

菊乃の発言に夏希は度肝を抜かれた。

「……ウソ!?（間違い、あたしの心の声が聞こえてる!）」

それは確信だった。

急に恐ろしくなった夏希は舞桜の後ろに隠れた。

夏希の急な態度に舞桜が尋ねる。

「どうしたのだ夏希？」

「ううん、大丈夫（スパゲティスパゲティスパゲティスパゲテ

ィ……ナポリタン!）」

大丈夫と言いつつも頭の中では意不明な呪文を唱えていた。

いつに夏希は頭を抱えて蹲った。

「（ダメかも、ほかのこと考えちゃう。どうしよう、えっちなこととか考えたら全部知られちゃうのかな、あ、ダメ……考えないようにしてるのに!）」いやぁん 「頭によぎる!」いやぁん

「。あーもぉーダメ!」いやぁん 「!」

この場から逃走しようとして夏希はしたが、ガシツと舞桜に腕をつかまれてしまった。

「どうしたのだ？」

「あたしここにいられない！」

「なぜだ？」

「聞かないでお願い！（きつと言っちゃイケナイんだ。ヒミツをバラしたら魅神さんに殺され……ごめん、今の間違い！魅神さんはそんなことしない。ごめんなさい、魅神さんはいい人です！）」

ちよつとテンパリ過ぎだった。

急に辺りの気温が下がったような気がした。

菊乃がゆっくりと近づいてくる。

「そうやって……みんなわたしを恐れていくの……そうやって（みんな同じ、わたしを忌み嫌い遠ざける。わたしだって聞きたくて聞いている訳ではないのに）。けれど、もう貴女は逃げられない」

刹那、夏希は足首を掴まれた。だが、足にはなにも触れていない。掴まれているのは、夏希の影だった。平坦な黒い人影が夏希の影に手を伸ばしていたのだ。

「やだっ?!」

驚いて 影 を振り払おうとしたが、影 は強い力で放そうとしない。厚さも無い 影 のどこにそんな筋力があるのか 否、物理的な力でないと考えるのが自然かもしれない。

舞桜は刀を抜いて謎の 影 が映る地面に切っ先を突き刺し

た（刀が復活しているのは仕様です）。

「夏希を放せ！（……っ、刃が立たない！）」

狐面は口元を手で隠し、まるで嗤っているようだった。

「無駄よ無駄よ、刀で影は切れない。さあ、こつちへおいでなさい」

菊乃の合図で受けて、影は夏希を羽交い締めにして引きずった。まるでその光景は、夏希がパントマイムでもしているかのような、悪ふざけにしか見えない。人が動けば影が動くのではなく、完全に逆転した行動を夏希は取らされてしまった。

そのまま夏希は菊乃の傍まで来て、菊乃の抜いた短刀を頸もと突き付けられてしまった。

「動くはこの子ののど笛が血を噴き上げることになるわよ」

「あたし人質!?」

復唱するまでもなくそーゆーことです。

舞桜は刀を鞘に収め、背を丸めて地面にゆっくりと置いた。

「これでいいか？」

満足そうに菊乃は頷いた。

本当に菊乃が夏希を殺すかどうかは別として（殺しそうだけども）、そろそろ生徒会選挙の枠を越えて、止めに入ったほうがいいんじゃないかって展開だ。

夏希はじつとりと汗を掻いていた。

「（まさか本当に殺さないよね、魅神さん?）」

「殺すわよ」

即答だった。

やっぱり殺すんだ、殺しちゃうんだ。日本の刑法なんて軽くムシして、ヤっちゃうんだ！

ただ、残念なことに海上都市アトランティスは治外法権でしたあー。

さらに言ってしまうえば。

「短刀は脅しよ。刃物があると恐怖心が高まって楽しいでしょう。」

と、菊乃が囁き、夏希がほっとしたのもつかの間だった。

「殺すときはわたしの家畜にやらせるわ。刃物で切られるより苦しんで死ぬるから。」

家畜とは 影 のこと。

日本の法律では超常現象の類は『ない』ことになっているので、もしも犯人（菊乃）を引き渡して日本で裁判をしても、おそらく殺人を立証するのは非常に困難だろう。

菊乃は戦意を喪失させている舞桜に顔を向けた。

「あなたの弱点はこの女。大切なのでしょう、この雌豚が！」

「（あたし別に太ってない！）」

そこ違うし！

別にツツコミ入れるところじゃないし！

風に吹かれながら舞桜は、ただそこに立っていた。

「夏希を失うなら、私はほかのモノすべてを捨てることができ。」

「あたしのことそこまで……」

キス魔のナンパ師だった舞桜が、夏希の中で少しずつ変わり

はじめていた。

舞桜の瞳は穏やかに、どこまでも澄んだ色をしていた。

が、次の瞬間、舞桜のトンデモ発言が！

「まだ結婚初夜も迎えていないというのに、ここで夏希を失える筈がないではないか！」

下半身の問題かッ！！

夏希は怒りよりも先に妄想が駆け抜けてしまった。

「(女の子同士の初夜って「いやぁん」。わーっなに考えてんだろあたし！ ダメ、考えちゃダメ、頭ん中ピンク色だと思われるぅ)……ピンク……ピンク？ そうだ、ピンクさん、天道さんだけじゃなくてあたしも助けて！」

しかし、なにも起きなかった。

「(助けてよ！)」

……しかし、なにも起きなかった。

「助けてっば！」

……… やっぱり、なにも起きなかった。

時間だけが過ぎ去っていく。

舞桜は微動だにしない、視線の先の狐面を見つめたまま。

菊乃もまた、短刀を夏希に突き付けたまま人形のように止まっている。

いつの間にか何メートルか後ろに下がっている観客も声を押し殺している。

耳を澄ませば夏希の激しい心臓の鼓動だけが聴こえてきそうだった。

そう、耳を澄ませば……聞こえてきた叫び声？

「ぎやあ〜！」

嗚呼、デジャブー！

その叫び声を発したのは言わずと知れた霸道ハルキ、その人だった！

経緯に関しては脳内補完でどうにかするとして、目で見える現実を語るならば、ウエディングドレスを着たゴリラ（ ）に追っ掛けられてるということ。

思わず菊乃もそちらに気を取られた瞬間だった。

気配がした！

すぐに菊乃も勘づいた。

「そこ！」

菊乃が投げた短刀が何かに刺さった。

「……くっ」

歯を食い縛る音が聞こえた刹那、閃光が辺りを包んだ。

白い世界で声だけが聞こえた。

「きゃっ、なに!？」

夏希の声。

やがて白い霧が晴れて視界が開かれると、なんと夏希は舞桜の腕に抱かれていた。

「天道さんが助けてくれたの!？」

「いや、夏希が私の胸に飛び込んできたのだ。そんなに私に抱かれないなら、普段からもつと抱きついていいのだぞ」

「（……絶対この人じゃないし。もしかして、やっぱりピンク

さんが……あつ、ナイフ)」

正確にはナイフではなくて短刀だ（そんな細かい説明いりません）。

地面に落ちた血の付いた短刀。

確かに菊乃の投げた短刀は何者かに刺さり、その後その場に残されたのだ。

「ぎゃあ〜！」

あ、ハルキのこと忘れてた。

グングン後方からゴリラに追いかけて走ってくるハルキ。気付けば舞桜たちを抜いていた。

急に夏希の体を持ち上げられた。舞桜がだっこしたのだ。

「後れを取った、行くぞ夏希！」

だっこしたまま舞桜が走り出した。

それを慌てて追う菊乃。

だが、ハルキはゴールテープ目前。

「オレ様一位？」

必至すぎて今気付いたらしい。が、それもつかの間の夢。

ゴリラアタック！

上空から飛んできた巨漢のゴリラがドーンとハルキに落ちた。

「うえっ！」

ご臨終ですハルキさ〜ん！

その隙に舞桜&夏希ペアがハルキを抜いた。

しかし、菊乃がここで黒い風を放つ。

「させるかッ！」

菊乃の眼にも見えた　ピンクシャドウが！

一瞬で掻き消された黒い風。

だが、まだ菊乃はあきらめない。さらなる攻撃を仕掛けようとしたとき。

「そのくらいでいいだろ、魅神」

爽やかな男の声。

ハッとして菊乃は振り返った。

「鷹山君……」

邪気が消えた。

急に菊乃はしおらしく体を小さくしてしまった。まるでその態度は……。

鷹山雪弥　スタート地点でコケた舞桜に手を差し伸べた、あの全国のブサイクの敵だ。

二人は知り合いなのか？

そーこーしているうちに舞桜&夏希ペアがゴールテープを切るうとしていた。

ゴオオオオオオ！！

呆然と立ち尽くす菊乃の手を雪弥が引っ張る。

「さあ、オレたちもゴールしよう」

「わたしは……もう……（負けたのに）」

「ほら！」

菊乃は強く逆らうこともせず、そのまま雪弥と一緒にゴールしてしまった。

これで四人。残る生徒会役員の席に座るのは！

「うわっ放せ！」

ゴリラと戯れるハルキ。

まるでその光景は発情したゴリラに「いやぁん」されていくようだ。

「口とか勘弁しろ！ オレ様はまだ女ともしたことが……やめっ、誰か助けるっ……ぎゃっ！」

ちよつとした惨劇を繰り広げながら、ハルキとゴリラはもつれ合いながら地面をゴロゴロ。

そして、ゴオオオオル！

ぶちゅっ

初キツスはゴリラ味。

ハルキはゴールラインを越えて真っ白に燃え尽きたのだった。これでついに上位五名が決まったのだった。ついに過酷なエクストリーム選挙は終わったのだ。これでジャングルに取り残された生徒たちも、どーにか無事に救出されるだろう。

あとは生徒会役員の任命式を残すばかり……と、先走ってしまったのだが、なにやら大会本部がざわめいている。

漏れてくる声を聴くに、

『ビデオ判定が』どーとか、

『天道様が一位ではなかった場合、責任を取らされるのは』どーとか、

『しかし、天道様は正々堂々を望まれているのだから、ビデオを見せないわけには』どーとか、

『ええい、とにかくビデオを破棄してしまえ！』と言った声が漏れてきた。

なかなか順位を発表しない大会本部に、ついに舞桜本人が口を挟んだ。

「どうしたのだ、早く順位を発表して、任命式をはじめようではないか？」

声を掛けられた本部役員Aがたじろぐ。

「そ、それがですね……微妙な判定が……その……ありまして……ビデオ判定の必要があつて……ですね」

「ならば早くビデオ判定を放送すればよい」

「は、はい！」

背筋を伸ばして元気よく！

絶対者の命令に逆らえるはずもなく、仕方なくビデオ判定の映像が映し出されることになった。

映像は特設会場のビッグスクリーンや、アトランティス全土のテレビ、宇宙人が受信した電波にも映し出された。

スローモーション映像の一部始終。

夏希を抱きかかえてゴールテープを切った舞桜っぽい。

映像を見ていた舞桜の表情が曇る。

コマ送りでもう一度見てみよう。

舞桜に、抱きかかえられて、ゴールテープを、切った、夏希。

凍り付いた舞桜の横にいた夏希がボソツと呟く。

「……あつ、あたしが先にゴールしてる」

ガーン!

巨大な鉄球に脳天直撃されたように舞桜が大きく足下を崩した。

どこからか聞こえる嗤い声。

「ふふふふつ、残念だったわね……副会長の天道さん」

見事に嘲笑った菊乃。

放心状態の舞桜が地に手を付く中で順位がアナウンスされた。

《一位生徒会長、岸夏希。二位副会長、天道舞桜。三位書記、

鷹山雪弥。四位同じく書記、魅神菊乃。五位会計　ゴリ

ラ!》

「ハア~~~~ッ!」

大声をあげたのはハルキだった。

「ちょ、待てよ。五位はオレ様だろ、学費免除はオレ様だ

ろ!」

本部に殴り込みに行こうとしたハルキにゴリラが襲いかかる。

「やつ、やめつ、やめろーっ!」

「自主規制」。

ここで夏希もある重大なことに気付きハツとする。

「……っ、あたし会長なんてできない!」

再起不能の舞桜。黒い邪気を放つ菊乃。この中では唯一のま

ともさんの雪弥。そして、ゴリラ。

どーやって生徒会を運営していけばいいのかと?

アレよアレよというウチに、記者会見らしき会場に夏希は引

つ張り出され、やる気のないカメラマンと、やる気のないイン

タビュアーに囲まれていた。

「会長として、これからの意気込みを適当に言っちゃってください」

マイクを向けられた夏希が口ごもる。

「ええつと……（えええ、なんて答えればいいんだろ）」

「一位には副賞としてどんな願い事でも叶えてもらえますが、金ですか？」

「えっ（決めつけ？）、あのぉ、そのぉ（いきなりそんなこと訊かれても）、願い事は……」

誰かが夏希の耳元で美声を囁いた。

「舞桜様に会長職を譲ると願えばいい」

「そう、それにします！ 天道さんに会長を譲ります、それがあたしの願いです！」

夏希の願いは舞桜の耳に届いた。

「夏希ーっ！ さすが我が伴侶となる女だ、愛しているぞ！」

ジャンピング・キッス！

いきなり飛びかかってきた舞桜に夏希は抱きつかれて唇を奪われた。

カメラのフラッシュが次々と焚かれる。急にヤル気を出したカメラマンたち。

インタビュアーの握るマイクにも力が入る。

舞桜はテレビカメラにビシッと視線を合わせた。

「とうわけで、私がこの学園の生徒会長に就任した天道舞桜だ。これから皆と共により良い学園を創っていくとここに宣言

しよう。なお、横にいる夏希は繰下げて副会長とする」

「えっ、あたし辞任にしてよ！」

「駄目に決まってるだろう。これは生徒会長と学園長の命令だ」

「ズルイ！ こんなときに特権を使うなんてズルイ！」

カメラに次々とポーズを取る舞桜。聞こえない聞こえない、夏希の悲痛な訴えなど聞こえていない。

真ん中に威風堂々と立つ会長天道舞桜と、傍らで肩を落としたり頭を抱える副会長岸夏希。

爽やか笑顔を常に崩さないイケメン雪弥と、その影から呪いの電波を飛ばす菊乃の書記二人組。

そして、廃人Hにぶっちゅし続けている会計のゴリラ！

こうして今日ここに、第一期舞桜学園生徒会執行部が発足したのだった。

……だ、大丈夫なのか、この生徒会？

その予感近日中に現実のモノとなるのだった！

第2話 エクストリーム部活動!

「それでは生徒会執行部の会議をはじめる」

舞桜の第一声ではじまろうとした会議に、いきなり夏希からツッコミが入った。

「本当にココが生徒会室なんだよねえ? (だって……)」

「なにか問題でもあるのか? リラックスできるように中流階級の茶の間を再現したのだが」

「いやあ、畳の好い香りがするなあ。」

ほら、テレビなんかも置いてあって ブラウン管の(笑)。

お茶菓子の煎餅が美味しそう。

「しかも掘りごたつね」

という菊乃の補足。

どの辺りが中流家庭なのだろうか?

いくら地デジの認知度が100パー近いのに、対応機器の普及率は三割程度だったりするにも関わらず、家電業界はなぜか未だに高いテレビを売りつけようとしていて、貧乏人はテレビを見るなということなのかという勝手な被害妄想を抱きつつも、茶の間というか、リビングぐらいにはブラウン管じゃなくて地デジ対応のテレビくらいあ……ないかもお。

実にその点は中流家庭の現状を再現していると言ってもいいだろう、うん!

しかし！！

コタツなんて今時あまり家庭にないだろう。

それを言ってしまうとコタツ信者たちのバッシングに遭うわけだ。

でもみんなよく聴け、K県在住のPN『ししゃもにゃんをししゃもにゃんさん』って呼ばないで』さんのご家庭では、冬場になると三台ものコタツが現役で可動しているのだ！

というわけで、ここは百歩譲って中流家庭にコタツはあるとしても、掘りごたつなんてあるわけないだろう。

だがしかし！

PNししゃもにゃん（以下略）さんの家には掘りごたつがあるのだ！！

まあ、そんな感じの生徒会室。今は冬ではないので掘りごたつの掛け布団はありません。掘りごたつって移動できなから邪魔ですね！（でも、普通のテーブルとして使えるんだよ）

今さら部屋のことを言っても仕方がなさそうなので、その辺りの問題はさらりと流された。

再び舞桜が会議を進めようとする。

「では自己紹介からはじめよう。私の名は天道舞桜。古の魔王の生まれ変わりだ。座右の銘は『我が輩の辞書に不可能の文字はない』だ」

誰もあそこにツツコミを入れないのは仕様だ。

次に舞桜は夏希に目配せをした。

「あ、あたしの番？ ええっと、岸夏希って言います。一生懸

命頑張りますから、よろしく願います」

夏希は菊乃と雪弥に視線を送った。先に口を開いたのは雪弥だった。

「僕の名前は鷹山雪弥。みんなと仕事できて楽しく思ってるよ。魅神とは同じ中学だったんだ、三年連続で同じクラスで……」

「……な、魅神？」

「……………」

狐面は目を伏せるよう下に向けられた。

いつこうにしゃべろうとしない菊乃に変わって雪弥が話し出す。

「彼女の名前は魅神菊乃。実は僕の……」

ドン！

急に菊乃がテーブルに両手を叩きつけた。

明らかに怒りが見えた。

鷹山は口をつぐんで、しばらく間を置いてから横に視線を向けた。

「次はゴリラさんの番だよね？」

茶の間にゴリラ。バナナを美味しそうに食べていた。

夢中でバナナを頬張るゴリラに変わって舞桜が説明する。

「彼女はゴリラさんだ。歳は定かではないのだが、群れの中では一番の美人だっ……」

「ちよつと待てーッ！」

部屋のふすまを開けて飛び込んできた謎の人影。

あっ、ゴリラに初キッスを奪われ、童貞まで喪失しそうにな

ったハルキ君だ（棒読み）。

「ゴリラなんか生徒会できるわけないだろ、オレ様が正式な生徒会役員だろバーカ！」

ハルキが集まっていた視線が一気に伏せられた。

舞桜が一つ咳払いをした。

「コホン、さて、それでは今日の議題を発表する」

「ためえらムシすんなよ！」

喚くハルキを完全無視。

舞桜は話を進める。

「学園に必要不可欠なモノがこの学園にはまだない。そう、部活だ！」

「おい、ムシすんなって言ってんだろ、バーカバーカバーカ！」

「有名校には優秀な部活がある。本校も部活動に力を入れ、世界征服の礎にしたいと思ってる」

「バーカバーカ、世界征服なんて子供っぽいこと言ってんじゃねーよ。男のロマンは正義のヒーローだろ！」

「まずは生徒諸君に新設したい部活のアンケートを取ろうと思う、意義がある者は？」

「ハイハイハイ、ハイイ！ オレ様の意義を聞けえ〜ッ！」

「では、ないようなので細かい仕事は事務任せよう」

「いい加減にしるよ舞桜！」

ついにプツンしたハルキが舞桜に飛びかかろうとしたのだが、眉間に切っ先。刀を握っているのはもちろん舞桜。しか

もハルキと目線を合わせない徹底したシカト。

凍り付くハルキ。

「……………（落ち着けオレ様、動かなければ死なない。ゆっくりゆっくり後ろに下がれば…………）」

ツーツと眉間から一筋の血が垂れた。

顔面蒼白になったハルキは焦って飛び退いた。

「いでーっ、てめえ殺す気かつ、覚えてろよバーカバーカばか！」

赤い液体をびゅーっとしながら、心の汗を流すハルキは部屋を逃げ出していった。

ハルキが出て行ったあと、雪弥が仕方なさそうに、

「出て行っちゃったね、ハルキ」

「うむ、ゴリ子さんにフラれたくらいで情けない」

事務的に舞桜が答えた。

そう言えばあんなにもハルキにご執心だったゴリ子さん、今はバナナが恋人らしい。

バナナのほうが立派そうだもんね！（何が？）

舞桜の『部費はいくらでも出してやる』発言を受けて、生徒たちは部活の新設に躍起になっていた。

どんな部活動でも舞桜は認める方針だが、ただし帰宅部に関しては部費の支給をするべきか論議の最中だ。

そんなわけだから、ありとあらゆる部活動が展開されることとなった。

今日はそんな数々の部活を視察することになっていく。

二手くらいに分かれて、山のようにある部活を回ろうとなつたのだが、ゴリ子さんはバナナに夢中で言うことを聞いてくれないし、菊乃は雪弥と回ることを拒否して、三手に分かれることになった。

もちろん夏希は半強制的に舞桜と回ることになってしまった。学園生活がはじまって数日、夏希の近くにはいつも舞桜がいる。いくら夏希が逃げても追ってくるし見つかる。疲れ切つてそろそろ逃げる気力もなくなつてきた。

しかし、夏希はどーしても舞桜から離れたかつた。

なぜつて、そりゃゝ命の危険を感じるからに決まつてるじゃありませんか！

今のところ直接的な暴力や嫌がらせは受けていない。が、舞桜と一緒にいると、いつもどこからか殺意の眼差しで見られてしまうのだ。きつと舞桜の熱狂的なファンに違いない。

そう、夏希は嫉妬の嵐に晒されているのだ。

舞桜と一緒にいなければそんなことにならないで済むだろうか？

いや、たぶん無理だろう。

舞桜が夏希のことを想っている限り、いくら距離を置いていても嫉妬される。むしろ舞桜から離れた瞬間に刺されかねない。なんだかんだ言つて、舞桜の近くにいたほうがファンは抑制されるので安全なのだ。

舞桜は部活のリストを開いた。

「ふむ、まずはどの部活から視察をするか？」

横からリストを覗き込む夏希。

「うーんっと（何コレ、まともな部活がない）」

剣術部はまだマシなほうとして、魔術部や超能力部、科学捜査部や爆弾処理部という方向性なアレな部活まである。

ちなみに舞桜の持つてるリストにはないが、デブ、小デブ、おデブ、株などの投資系、ラブなどの恋愛系まであるらしい。

その中に、ただ一つまともな名前があった。

「ミステリーサークルだ……でも名前が重複してるよ？」

夏希が尋ねると舞桜は首を横に振った。

「ミステリーサークルは三つあるのだ。一つは興味がなかったのでリストにないが、一つは地上に巨大な魔法陣を描く部活、もう一つは部員もミステリー、活動場所もミステリー、活動実体もミステリーで実に興味をそそられる」

「は？」

てつきりミステリー小説とかの研究部かと思っていた。

それにしてもまともな部活がない。

これでは熱い青春を学生諸君が送れないではないか！

「ねえサッカー部とか野球部とか普通のはないの？」

不安になった夏希が尋ねると、

「私が興味のない部活はほかの者が回っている筈だ」

あるにはあるということがわかった。ちよっとほっとした。

リストの中には文字からでは内容のわからない部活もいくつかあった。

夏希はその部活の名前を指さした。

「ねえ、このテンモン部ってなに？」

文字の音だけを聞いたなら『天文部』だと思いが、リストには『天門部』と書いてあった。

「うむ、その部活は古に封印された天の門を探しだし、その扉を開けることを目的としているらしい」

「……う、うん（意味わかんない）」

なんとなく返事はしたが理解不能。

いくらどんな部活でも認めると舞桜が言ったものの、あまりにもよくわからん部活が多い。

「なんでもかんでも部活って認めちゃうんじゃないかって、まともなヤツだけ残したほうがあゝ……（いいんじゃないかなあって思うんだけど）」

控えめな感じで夏希は提案した。

そして、いきなり拒否。

「それはできない」

「なんで？」

「どの部活からどんな優秀な人材が生まれるとも限らん。ありきたりのモノからでは、なかなか秀でた才能とは生まれないモノだよ。私は一人でも多くのAHOの一員となる者が生まれることを願っているのだよ」

「アホ？」

「アンチ・ヒーロー・オーガニゼーション 反勇者組織の略に決まっているではないか」

ここは触れるべきか流すべきか、なんだか触れると大やけどしそうだ。

夏希は舞桜と付き合うようになってわかったことがある。

天道舞桜は誇大妄想に取り憑かれているのだ。

例えば、昨日の昼休みのこと、学園施設内にはいろいろなレストラン街があるのだが、そこで夏希が舞桜と食事をとっていたときのこと。

殺し屋がいる！

と舞桜が突然叫んだのだ。

当然のごとく店内は騒然となったわけだが、実際は殺し屋なんて存在してなかった。舞桜の脳内を除いて。

よくよく話を聞いてみると、殺し屋の正体はナプキンだったらしい。そこだけ聞くと意味不明だが、もっと掘り下げて訊くところということらしい。

レース付きのナプキンを眺める。レースがメイド服に見えるくる。そのメイドは銃器やナイフを携帯している。どうやらお屋敷にメイドとして潜入している。職業は殺し屋。

そして、『殺し屋がいる！』ということになってしまったらしい。

そんなわけだからイチイチ舞桜の発言を掘り下げないことに夏希はした。

たしかにちょっと……というか、だいぶ舞桜は変わり者である。けれど、自称魔王の生まれ変わりの割りには、悪者ではない（いきなりキスをしてくるという悪癖はあるが）。だから

夏希は今も舞桜の近くにいるのかもしれない。

校内を歩いていると、廊下の向こうから女子生徒が走ってきた。

「助けてー！」

そして、叫びながら通り過ぎた。

夏希が『へ？』という顔をしていると、すぐに頭に角を生やした鬼が女子生徒を追って、

「悪い子はいねえーか！」

と、叫びながら目の前を過ぎ去っていった。

思わず夏希は呟く。

「なに今の？」

返事は思わぬ人から返ってきた。

「エクストリーム鬼ごっこ部だよ」

夏希は驚いて声の主を見た。

いつの間にか夏希の真横には、長身の男子生徒の胸板が
ちよつと顔を見上げると雪弥だった。

「鬼の扮装をした生徒が無作為に生徒たちを追い回すという部
活らしいよ。さっきこれに似たエクストリームストーキング部
を見てきたけど、恐怖度指数はあちらが上だったね」

そんな部活まであるのか……大丈夫かこの学園。

夏希は舞桜が意味不明なことを言ったら極力絡まないが、雪
弥だったら大丈夫だろうと質問したのが間違いの幕開けだった。

「ところでエクストリームってなに？」

「エクストリームスポーツを知らないのかい!？」

「知らないから訊いてるんだけど（そんなに驚くことなの？）」

「エクストリームスポーツというのは、極限の状況下で行われる究極のスポーツのことだよ。人生誰もが一度は競技に参加していると思っただけだけれど、まさか未経験者かい!？」

眼を丸くして驚く雪弥の横では舞桜まで驚きの表情をしていた。

「夏希は地球外生命体だったのか！」
はっ？

「まただ、また舞桜の意味不明発言だ。」

あきらかに自分に振られた話題なのでスルーできない。仕方なく夏希は尋ねた。

「どういうこと？」

「この星に最近やって来たから未経験者なのだろう？」

「はい？」

「地球のエクストリームスポーツはやったことがなくとも、君の星ではやったことがあるだろう？」

「だから、あたしは生まれも育ちも地球なんだけど」

ダメだ……舞桜と話をしているラチがあかない。

夏希は雪弥に助け船の要請を出した。

「エクストリームスポーツってどんな内容なの？」

「そうだね、身近なところでは、駆け込み乗車、満員電車、不倫、ピンポンダッシュ、信号無視、最近ではアイロニングが有名だね」

エクストリームアイロニング（アイロン掛け）とは、どんな場所でも、どんな状況下でも、とにかくカッコ良くアイロン掛けをするエクストリームスポーツである。

例：自転車に乗りながらアイロン掛け。

「……………」

思わず夏希は無言になった。思考もちよつと停止した。

最後の砦、生徒会の良識、メンバーの中で自分以外で普通だと思っていた雪弥に夏希は裏切られて……シヨック！

よくよく考えるまでもなく、あんな生徒会選挙を勝ち抜いた人物が普通のハズないじゃないか。ただのイケメンが爽やかな顔をしたままジャンルを抜かれるわけじゃないか。やっぱり雪弥も可笑しい人なんだ！

さらに雪弥のこんな発言。

「実は僕も日本エクストリームスポーツ委員会のメンバーなんだ」

そこに乗っかる舞桜。

「そう言えば私の父上もメンバーだったな」

「違うよ、君の父上は日本の委員会じゃなくて世界のほうだよ」

「ふむ、そうだったか。別に私にはどちらでもいいことだが」

世界規模の委員会なのか……。

雪弥はなにかを感じたのか、廊下の向こうに眼をやった。

「彼もエクストリームスポーツの達人だよ」

まだ廊下には誰の影も見えない。

彼とはいったい誰のことなのだろうか。
そのときだった！

「見つけたぞ舞桜！ オレ様も部活作ったから覚悟しろよ！」
廊下の向こうからバカが……じゃなくて、バカデカイ声で叫んだハルキ。

夏希は不思議な顔をした。

「邪道くんがエクストリームスポーツの達人？（なんの？）」
邪道じゃなくて霸道です。

雪弥が説明してくれた。

「彼はエクストリーム借金、リアル鬼ごっこ、リアルかくれんぼ、そしてエクストリーム貧乏の達人だよ」

どれもあまり楽しそうじゃない競技だ。むしろ好んでやりたくない。

「貧乏で悪かったなこのブルジョワどもめ！」

ハルキは怒った様子で近づいてきた。

「お前らに貧乏の苦しさがわかってたまるか。誕生日プレゼントにもらった一〇円ガムを、大事に一週間かみつけてたのに、ある日起きたら髪の毛にくっついてた苦しみがお前らにわかるのか！」

わかんねーよ。ガムなんて一日ですら噛んでらんねーよ。K
県在住のししゃもにゃんは同じガムを六時間くらいなら噛んで
られるらしいがなっ！

勝手に雪弥はハルキ家の借金事情を話しはじめた。

「彼の一族は膨大な借金を抱えていてね。噂では小さな国からの国家予算は超えるとかで、返す目処なんてないらしいよ。彼も相当な達人だけど、もつとすごいの本家の長男に生まれた彼のいとこさ」

ハルキとは昔からの知り合いらしい舞桜だが、初耳だったことがあった。

「ほう、お前にいとこがいたとは初耳だ」

「いちゃ悪いかよ。本家に関わると厄介だから最近はお会ってねえけど、あいつはオレ様のライバルだから会いたくもねーよ」
「ふむ、ライバルとはなんだ？」

「オレ様の夢は勇者になること、あいつの夢は魔王になることなんだと」

舞桜は微笑んだ。

「なかなか面白い、魔王とな。そいつの名前は？」

「霸道ヒイロだよ」

「覚えておこう（ヒーローなのに魔王を目指しているのか。真物ほんものならいつか会うことがあるかもしれないな）」

勇者とか魔王とか魔王とか、なんですか人気職業なんですか？

あまりにも目指している者の数が高くありません？

そうそう、そう言えは新しい部活がどうかって話はどこ行っただんですかハルキさん？

「おっ、忘れるとこだったぜ。オレ様新しい部活作ったからな、名付けてアンチ舞桜部だ！」

敵対象を名指しですか（笑）

舞桜はクルツと背を向けて歩き出した。

「さて、部活の視察をせねばな」

「おいコラッ、逃げんのかバカ野郎！」

ハルキの罵声に舞桜は微かだが眉をピクツと動かした。

「逃げるだと……私がか？」

振り返った舞桜。その表情はいつもと変わらない。しかし、どこか違う。

舞桜はどこからか出した刀を抜いた。

「決闘の申し込みと受け取って良いのか、邪道？」

「おう、決闘でもなんでもしてやるよ！」

威勢よく声を張ったが、ハルキの腰は完全に引けていた。

なんでこんな展開になっちゃったのか理解に苦しむ。だが、ケンカが起こっているという事は確からしい。

夏希は不安そうな顔をして、助けを雪弥に求めた。

「とめないと……」

「大丈夫だよ、天道は強いから手加減もできるから（さて、霸道の一族がどこまでやるか、お手並み拝見といこうかな）」

微かだが雪弥は不適に嗤った。だが、それを見た者はいない。ハルキは握った拳に汗を掻いている。その表情を舞桜は見とった。

「大胆は勇気を、臆病は恐怖を……それで私に勝つつもりか邪道？」

「うっせえ！（正面からいったら絶対オレ様が負ける……わけ

ねーけど、万が一っていう可能性もあるからな）オレ様からケ
ンカ売ったんだから、勝負の方法も決めていいよな？」

「好きにしろ」

「エクストリーム貧乏話で勝負だ！」

なんだそれーッ！

「その勝負受けた」

受けるのかーッ！

どう考えても読んで字のごとくの競技だ。ちよ〜〜〜っお
金持ちの舞桜に勝ち目などあるのか？

雪弥はなぜかため息を落とした。

「ふう。僕は視察の続きがあるから行くよ（とんだ見込み違い
だったな）」

歩き去ろうとする雪弥に困った顔で手を伸ばす夏希。

「ちよつと鷹山くん！（……残されたあたしにどうしろと）」

さあ？

どうしましょう？

ハッキリ言って夏希にはどうすることもできなだろう。ここ
はあまり巻き添えを食わないように、そーっと見守るのが得策
っぽい。

ハルキがビシッとバシッと先制攻撃を仕掛けた。

「オレ様から行くぞ！」

「掛かってこい」

「自分の髪と雑草を一緒に炒めて喰おうとしたことがためえに
あるか！ 異臭で死にそうになるんだぞ！」

あー、髪の毛を燃やすと臭いよね……って、オイ！（ノリツツコミ）

衝撃発言に固まっていた夏希だったが、どうにか口を開いてクエスチョン。

「なんで髪の毛？」

「オレ様はオレ様は……ビーフンってヤツを一度でいいから食べてみたかったんだ。世界三大珍味と呼ばれるビーフンだな！」

三つのどれと勘違いしてるんだよ……。

しかもなんか舞桜も勘違い。

「ビーフン……そんな珍味があつたとは初耳だな。私も食したことのない食材だ」

舞桜はきつとハルキとは違う意味で食べたことがないのだが、勘違いの連鎖は続く。

「けつ、てめえも食ったことねーのかよ。金持ちのクセしてたいしたことねえーんだな（舞桜も食ったことねえってどんだけ高級なんだよ、チクシヨ）」

だから違うから。

金持ちと貧乏の間に挟まれた中流家庭の夏希。

「ビーフンだったらいつとも食べさせてあげるけどお」

「本当かつ！」（舞桜）&「マジかつ！」（ハルキ）

二人の驚きの声が重なった。

あまりの衝撃だったのか、ハルキは打ち震えながら眼をギョッとさせながら、汗をだらんだらん滝のように流している。

「て、てめえいつたい何もんだ！（舞桜ですら食ったことねえ
ピーフンを……）」

「えっ……別に……（何者とか言われても困るんだけど）」
口ごもる夏希の体が突然舞桜に抱き寄せられた。

「私の婚約者だ！」

そーゆーことを聞いてんじゃありませんよーっ。

ハルキはハツとした。

「そうか……てめえらグルだな。二人してハメる気だな！」

その解答に達した解答式を公開して欲しいのですが？

グルだと思われるのは舞桜の態度がアレなので仕方がないと
して、ハメるって何を？

舞桜が怪訝な顔をする。

「グルとは失敬な。勝負は私とお前的一对一だ」

話が若干噛み合っていないように思えますよー、っと。

ハルキは再びハツとした。

「しまった、それが作戦だったんだな汚い野郎め。貧乏話でオ
レ様に勝てないと踏んだてめえは、話をそらしてうやむやにす
るつもりだったんだろ！」

「この私が決闘を放棄するわけがなからう。それにいつ私が負
けると決まったのだ？」

財力の差で圧倒的不利かと（一般的には勝ち組みですが）。
舞桜は鼻で笑う。

「ふっ、いいだろう。私の話を聞くがよい！」
ハルキと夏希は息を呑んだ。どんな貧乏トークが繰り出され

るんだらうか、この舞桜の口から？

「これを見よ！」

と、言つて取り出したのは五円玉……じゃないなあ。

「これは寛永通宝という江戸時代に流通していたコインだ。一文銭の“銭”とはつまり円の100分の1である。円よりも安い、これこそ貧乏に相応しいではないかっ！」

はっ？

が、思いのほかハルキはダメージを受けたようだ。

「なぬーっ!? くっ……一円よりも安い通貨があること知らなかったオレ様は、セレブだったのかッ!!」

違うから安心して

あまりの、ある意味壮絶な戦いを前にして、夏希は啞然としてしまっていた。

「(……この人たちっていったい)」

BA・KA!

舞桜の常識知らずは今にはじまったことではないが、常識と違ってレベルじゃないぞ。

敗北感たつぷりで床に手と膝をつけてうなだれるハルキ。

敗者に手を差し伸べる舞桜。

「挫折とは成功への茨の道だ。勇気を捨てず信じて歩み続けることが大切なのだよ、さあ立ちたまえ」

差し伸ばされた手をバチーン!

っと、叩いてハルキは立ち上がった。

「チクショー覚えてるよバーカ！」

今日も心の汗を流してランナウェイ。

負けるなハルキ！

頑張れハルキ！

そんなわけで、どうやら勝負は舞桜が勝ったようだ。

さーつてと、そろそろ本題に戻らなきゃね。

えっ、みんな本題を忘れちゃったの？

やだなあ、本題ってというのは……。

「探したわ、天道さん」

ゾツとするようなダークボイス。その場にいつの間にか立っ

ていた菊乃。まるで怨霊ですね！

菊乃は言葉を続ける。

「屋上で化け物が暴れているわよ」

……はい？

現場に急行してみたの感想。

「わっつ、すごいCG」

以上、現実逃避した一年A組岸夏希さん（一五歳）の生前の言葉でした。

つて、まだ死んでなくいい！

が、死ぬのも早々遅くはないかもしれない。

すぐ近くにいた菊乃がざつと説明する。

「召喚部が見事、召喚に成功したらしいわ（こんなに可愛らしい子と呼んじゃって、うふふ）」

夏希は壊れた笑いを発する。

「あはは、成功って言うかこれって失敗じゃ？」

それに同意する舞桜。

「ふむ、確かに失敗だな。どうみてもチワワが混ざっている」

「そこ!？」

思わず夏希ちゃんツッコミ。

さて、それでは今週のゲストに登場してもらいましょう!

ガールルルルルウツ!

野犬に似た威嚇。いや、野犬よりも遙かに恐ろしく、猛威に満ちた唸り声だった。

人間の身長を越えるほどの体躯。

それはまるで黒狗のような形をした化け物。

三つ首を備えたキメラ。

嗚呼、まさにギリシア神話に描かれる地獄の番犬ケルベロス。でも首が一本チワワだけどなッ!

何の手違いか一本だけ混ざっちゃったチワワは、クリクリの瞳を潤ませながらプルプル震えている。それだけ見たら、かわいい……けど、全体像を見るとグロだけどね

まだ三本とも同じ狗のほうがマシだ。

筋骨隆々の黒いボディと、いかにも凶暴そうなフェイス。そこにチワワが混ざっていたら、逆に異様で気持ち悪い。

でも、そんな異形が菊乃はお気に召したようで。

「素敵だわ、うふふ。毛と肉を引き剥がして片方の目玉を抉つたらもつと素敵なのに」

ヤル気か? 実行する気か? 殺っちゃう気かっ!

菊乃の殺気を感じたのかチワワはブルブルしている。

くうくん。

可愛らしい声で鳴きやがる。でも首から下がミスマッチだけどな!

だが、菊乃は戦闘の意思を示そうとしなかった。

「わたしは視察の続きがあるから、せいぜい頑張ることね天道さん」

……押し付けられた!?

音もなく立ち去ってしまった菊乃。今回出番これだけ!?

舞桜は、

「ふむ」

とだけ呟いた。

こんな悠長に構えている場合ではない。なぜつてすでに召喚部員は病院送りにされちゃっているのだ。

屋上に残っているのはケルちゃん一匹と、舞桜と夏希だけ。

さて、先にケルちゃんの餌食になるのはどつちかな

ケルちゃんは喉を鳴らしていつでも喉を噛み切り準備万端である。一方の舞桜は夏希を背中に隠し、腕組みをしながら悠長に考え事していた。

「まずは犬小屋の建設とトイレのしつけが必要だな。エサはやはりドックフードか……」

飼う気ですか?

うん、食費がいっぱい掛かりそうだね

じゃないだろーっ!

モンスターを仲間にしたたり、悪魔を使役しちやたりするゲームとかあるけど、普通は化け物の類を飼わんだろ。

そう言ったゲームの場合、モンスターを弱らせてみたり、トクでどうにかするのだが、話し合いは無理そうだ。

だってケルちゃんヤル気満々！

鋭い牙の覗く口から涎を垂らしながらケルベロスが飛びかかってきた。

舞桜は白鞘から刀を抜いた。

「夏希、私より前に出るな。魔王とザコモンスターの格の違いを見せてやろう！」

地面を蹴り上げて舞桜が刀を振るう。

狙うはもちろんチワワ！

だが、チワワの前に現れる別の首が舞桜に食いかかろうと迫る。

柳のようにしなやかに身を躲し、舞桜は一刀をケルAの首に強打させた。

「峰打ちだ」

言葉のとおり、ケルAの首は落とされることなく、ぐったりとうなだれて気絶した。

一本の首が気を失っても残る二つがあれば体を動かせるのだろ。ケルベロスは唸り声をあげなら後退する。

怪物を前にしてまったく動じず立ち向かう舞桜を見て夏希が、

「(変態だー)」

あまりにも普通のことをして処理する姿勢が、もはや変態と

しか思えない。

しかもペットにしようとしているところが変態度アップだ。舞桜は刀を構え直した。

「あまりおいたが過ぎるようならしつけが必要だな」

ケルBは威嚇するように血の多い眼で舞桜を睨んでいる。チワワは怯えるように丸い瞳をうるうるさせて今にも泣きそ
うだ。

舞桜が駆ける。

ケルベロスも全速力で走り舞桜と激突するかに思われた。

「なっ！」

小さく声を漏らした舞桜。その頭上を飛び越えたケルベロス。狙いは舞桜の後ろだ！

「そうはさせるかっ！」

すぐに舞桜は身を翻して夏希に元に走ったが間に合わない。闇に続く大口を前にして恐怖した夏希は体が固まったように動けない。

「(死ぬー)」

声にも出せずそう思った瞬間だった。

ドーン！

突如起こった爆発で辺りは爆煙に包まれた。

煙に映った爆乳のシルエツト。

「ハ〜イ、エブリバディ。ちょうどいい実験体が暴れてるって言うから来てやったわよぉん！」

セクシーボイスの持ち主は……誰？

マジで誰ですか？

新キャラの登場ですか？

煙が徐々に晴れ、その白衣のナイスバディを確認して夏希が叫ぶ。

「鈴鳴先生！」

「オーイエス！ 学園のマドンナ可学教師にして、あんたらの担任の鈴鳴ベルティーチャーよぉん！」

新キャラじゃなくて二度目の登場ですね。

爆乳を揺らしながらベルは肩にバズーカ砲を担いでいた。これをぶつ放しやがったのだ。一步間違えば夏希も巻き込まれていた。

砲撃を受けたケルベロスは舌をペロリンしながら地面の上で痙攣している。

ベルはハイヒールの踵でケルベロスをグリグリする。

「なかなかキュートなゲテモノねえん」

夏希以外全員の美的センスが可笑しいです。この珍獣のどこがいいんですか、チワワだからですか！

とりあえずこれでお約束の召喚失敗騒動も解決したわけだ。

と思ったのもつかの間、なんとチワワが起き上がり、仲間になりましたそうにこちらを見ている！

くうくん。

潤んだ瞳のチワワに見つめられ、ぼわくんとした空気ですの場が和やかになった刹那！

一変して凶暴な形相になったチワワがベルに牙を剥いた。

「アタクシに牙向けてるんじゃないわよ」

スカートから伸びるベルの長い脚がチワワのアゴを蹴り上げた。

一発KO！

きつと、チワワの顔は敵を欺く擬態だったのだろう。敵が油断したところで、本性を現して真の力を発揮する予定が、あっけなくベルの蹴りで泡を吹いて気絶してしまった。哀れだ。

舞桜が『うむ』と声を漏らした。

「首輪が必要なようだな」

まだ飼う気なのか……。

もうなんだか夏希はどつと疲れてしまった。

「（みんなのノリについてけない）」

仕方ない。周りがみんな変態変人なんだもの。

何かを思い出したようにベルがポンと手を叩いた。

「ああん、そうだったわあん。これからアタクシのインポータントな話があるから、臨時生徒会会議やるわよ。生徒会室にハリーアップなさあい！」

勝手に話を進めるベルに夏希は素朴な疑問が湧いた。

「どうして鈴鳴先生が生徒会の仕事に関わってくるんですか？」

「だってアタクシ生徒会の顧問ですもの！」

「えっ？（顧問なんていたんだ）」

知らなかったよ〜ん！

生徒会が発足してから、そんな話一度も出ていなかったのだ。

とうか、顧問とかいなくても舞桜がどんどん話を進めていた。
そんなわけで、ホントかウソか、次回話は急展開を迎えるの
だった！（というテキストな前振り）

第3話 エクストリーム脱出!

生徒会室　　と言っても茶の間で開かれる臨時会議。

ベルは胸の谷間から取り出した一本のタバコを口に咥えた（どこにタバコ入れてんだよ!）。火を点けた動作もしていないのに、煙がいつの間にか出るのはベル仕様だ。

「この部屋灰皿ないのおん?　灰皿くらい常備しときなさいよ」

と、言つて近くにあつた紙コップを自分の元に引き寄せて、それを灰皿代わりにポトンと灰を落とす。

「……それ、あたしの（まだ飲みかけだったのに）」

小声で夏希がボソツと。聞こえていないのかベルは気にも留めない。

いつもは舞桜が仕切る生徒会だが、今日は（どうやら顧問らしい）ベルペースだ。

「生徒会つて何人だったかしらあん?　ワン、トウ、スリー、フォー……あらあん、一人足らなくなあい?」

すぐに雪弥が説明してくれた。

「ゴリ子さんは家庭の事情とかで野生に帰りましたよ」

ここは深く追求するべき?

それともサラツと流すべき?

夏希は訊かずにはいられなかった。

「家庭の事情って？」

「うん、なんでも地元でいい人が見つかったら結婚するとか。だから生徒会も辞任すると言っていたよ」

言っていたよって雪弥君、あんたゴリラの言葉がわかるんですか？

とにかく短い間だったけどお疲れ様でしたゴリ子さん。結婚して幸せになってね！

そんなわけで話を戻そう。

ベルは胸の谷間から一升瓶を出して、ラツパ飲みして『ぷはあ〜』。あんたの胸は四次元ポケットか。

「エブリバディをここに集めたのは他でもないわ。ナウ、ワールドは未曾有のクライシスに直面しているのよおん！」

はい？

話の内容も意味不明だが、そんなことより夏希は常々思っていることがあった。

「会話の中に英語が混ざってわかりづらいんですけど……ワザとですか？」

「ハーフって設定を忠実に演じているだけよおん」

「設定……本当はハーフじゃないんですか？」

「それは、ヒ・ミ・ツ」

ヒミツってなんだよ、気になるじゃないかつ！

日本人離れたベルの顔立ちとナイスバディは外国産の気がするが、どこまでホントでウソなのか、その判断は難しい。だって本人が“設定”発言を今したばかりだし。

というか、なに人とかそんなこと以前に、生徒の前でタバコは吸うわ酒は飲むわ（しかも一升瓶のラッパ飲み）、教員としてあきらかに不適合者だ。

だが、すぐ近くにいる学園長こと舞桜はなにと言わない。気にも留めてない感じた。

まさか舞桜はベルに弱みを握られているのか!?

だから強く言えないし、解雇することもできないのかッ!

きつと「自主規制」とか「自主規制」みたいな弱みを握られ、ネットでバラまかれたくなかつたらとか言って、現金まで脅し取られちゃったしているに違いない！（妄想）

「酒なんて飲んでいないで早く話を進めるベル」

という舞桜の命令口調。

あれ？ 想定（妄想）していた関係じゃないのか？

今の場面を見ると、主従関係は舞桜のほうが上に見て取れた。ベルは酒とタバコをやめることなく、

「うっさいわねえ〜。酒くらい自由に飲ませなさいよあ〜」

この悪態の付き方は、どうやら舞桜のほうが上というわけでもなさそうだ。

こんなやり取りに業を煮やした菊乃が立ち上がった。

何も言わず部屋を出て行くこうとする菊乃の背中に夏希が声をかける。

「魅神さん、どこ行くの？」

「帰るに決まっているでしょう。飲んだくれの婆おばあに付き合っているほどわたしは暇ではないの」

これに聞き捨てならないのがもちろんベル。

「ワンスモアプリーズ！ アタクシの聞き違いじゃなかったらババアって言ったわよね、このメス豚！」

「豚は貴女のほうでしょう、糞婆おんば」

さらなる菊乃の挑発についてベルが爆乳を揺らして立ち上がった。手に持つ一升瓶はどう見ても鈍器です。

「クソって何よ、アタクシが便秘だからってバカにしてんのアタタ？」

誰も便秘なんて言ってますん。

「貴女には糞がお似合いよ。それに年寄りに婆はあと言って何がいけないのかしら？」

「アタクシのどこがババアだって言うのよ、このナイスバディを見なさあい！」

「若作りしているだけでしよう。わたし、貴女の本当の姿知っているのよ？」

「えっ!？」

予想もしていなかった言葉だったのか、なぜかベルが固まった。

険悪な二人に間に救世主雪弥が割って入った。

「まあまあ二人とも、ケンカはよくないよ。ね、魅神？」

見つめられた菊乃はすぐに顔を伏せ、こう呟いた。

「……みんな嫌い」

そして、そのまま部屋を出て行ってしまったのだ。

部屋にびみよーな空気が漂う。

と思ったのは夏希だけだったようだ。

目の前で起きたことを見ていなかったように、舞桜は淡々と話を進めようとしていた。

「では、話をしてくれないかベル？」

「それじゃあ、耳の穴をかつぽじってリスニングしなさあゝい！」

すっかりベルもいつもの調子。

雪弥も何事もなかったような顔をしてベルの話の話を聞いている。この中で夏希は疎外感を抱いていた。

「(なんでみんなこんなに……冷たいんだろう) えっと、ちょっとトイレ行ってくるね。話進めてていいよ」

夏希は立ち上がって部屋を飛び出した。

「(追いつけるかなあ)」

夏希は菊乃を探していた。

トイレに行くというのは嘘八百で、会議をすっぽかしたのだ。あくまで会議が嫌だったのではなく、あくまで菊乃を探すためだ。

すぐに廊下の先を歩いている菊乃を見つげられた。

舞桜が足を速めると、菊乃も速めた。

「待って魅神さん！」

「……………」

華麗にシカト。

「待ってってば！」

「……………」

「菊りん待って！」

ピタツと菊乃は足を止めて、嫌そうな顔をしながら振り返った。

「菊りんってなに？」

「気に入らなかつた？　じゃあ（菊びよんとか、シンプルに菊ちゃん？）」

「どれも嫌よ、気安く呼ばないで頂戴」

「（あ、心読まれた）でもでも、だってあたし魅神さんと仲良くしたいから」

「嘘ばっかり」

吐き捨てる菊乃を見つめる夏希の瞳は澄んでいた。

「ウソじゃないよ。だって魅神さんあたしの心が読めるんですよ？　だったらあたしがウソついてないってわかるじゃん！」

「……………わたしだって全てが聞こえるわけではないの。もう構わないで」

立ち去ろうとする菊乃の腕を掴もうと夏希はした。

「待って！」

「触れないで！」

声を荒げて菊乃は夏希の手を強烈に叩き落とした。

ヒリヒリと痛む手を押さえながら夏希はとても悲しい顔をしていた。

「ごめんなさい（怒らせるつもりはなかったのに…………）」

「次に触ったらその手を切り落とすわよ」

そう言つて背を向けて歩き出した菊乃。

影が少しずつ遠ざかつていく。

三メートルほど離れたところで夏希が囁いた。

「どうしてそんなに人を遠ざけるの？」

菊乃は背を向けたまま答えた。

「貴女に何がわかると言うの？」

「わからないから聞いたのに……（だって魅神さんのこと知りたいから、もつと仲良くなりたいたいから）」

「わたしは普通じゃないの。耳を塞いでも人の声が聞こえてくる。偽善者ばかり、この世は悪意に満ちているわ。貴女も偽善差よ」

「あたしは違う！」

「うふふふっ、口で言うのは簡単よ。貴女にそれが証明できて？ 貴女はほかの人間どもよりも単純でお馬鹿ちゃんだから、手に取るように心の声が聞こえるわ。貴女がわたしに少しでも悪意を抱けば、すぐにわかってしまうのよ。こんな気持ちの悪いわたしと一緒にいたいと思う？」

「思う！（勘違いしないでね気持ち悪いっていうところじゃなく、仲良くしたいって意味だから、本当に勘違いしないでね？）」

「……馬鹿な子」

菊乃の影が去っていく。もう足を止めることは決してなかった。その場に立ち尽くす夏希は、悲しさで胸がいっぱいだった。

動けずにいる夏希の肩を誰かが叩いた。

「大丈夫、岸？」

「えっ？」

振り向くと雪弥が立っていた。

「こんなところではーっとして、トイレじゃなかったのかい？」

「え、あ、うん、もう大丈夫。でもあの、鷹山くんがどうして？」

「僕もトイレ……っっていうのは嘘で、岸の様子が変だったから。トイレじゃなかったんだろ？」

「あたしを追いかけたきたの？」

「まあね」

「うん、ありがと（魅神さんじゃないんだ）」

なぜか夏希の心は痛んだ。

菊乃と雪弥の関係。

「（あたしじゃなくて鷹山くんが魅神さんを追いかけてきたら……）ねえ、鷹山くんって魅神さんのことどう思ってるの？」

「変わった子だよね」

「それだけ？」

「どうしたの急に？」

「ううん、忘れて何でもないから（鷹山くんは何も思っていないんだ）」

また夏希の心は痛くなった。

雪弥がニツコリと笑う。

「戻ろうか？」

「うん」

夏希は元気なく小さく答えて頷いた。

しゃべるだけで爆乳が揺れるベル。

「そんなわけだから、アナタたち明日は休日返上で細菌テロと戦うのよおん！」

というところで部屋に帰ってきた夏希と雪弥。

最後のベルのセリフだけ聞いてもなんのこっちゃわからない。たぶん最初から最後まで聞いてもわからないような気がすると思う。

しかし、順応性の高い雪弥はすかさず答えた。

「明日はどうしても外せない用事がありますので、申し訳ありませんが参加できません」

「うむ、用事があるのなら仕方あるまい」

と、すぐに舞桜が承諾。

夏希も変なことに巻き込まれるのが嫌だったので、早めに断ろうと思ったのだが舞桜のほうが早い。

「では仕方ない。私と夏希で任務に当たろう、良いな夏希？」

「ちよ、あたしも用事が……（ないけど）」

だって舞桜にベツタリされてるせいでまだ友達が……。

「夏希のスケジュールはすべて把握している。明日は誰とも約束がない筈だが？」

「一人で買い物お〜（も行かないけど）」

だって買い物行くほど仲のイイ友達いないもんね！

「買い物ならば私が手配して誰かに行かせよう」

「シヨツピングって見るのも楽しいんだけど」

「その感覚は私にはわからんな」

「……わかりました、行きます、頑張ります、好きにしてください！」

大丈夫、これまでだってたくさんのお難を乗り越えてきたんだもん。

会議はこれで終わりのようなので、このあとすぐに雪弥が帰宅の路についた。

夏希は途中の説明を聞いていなかったたので居残り。てゆか、まともな説明聞いたのは三人でも途中で退席したせいで、舞桜しか聞いていなかったりする。

新しいタバコを口に啜えながらベルはめんどくさそ〜にした。

「じゃ、はじめから説明するわよ」

「お、お願いします（もしかして怒ってるのかな？）」

ちよつと気まずい夏希ちゃん。

「国家の転覆を狙う細菌兵器の名をアナタは知っているかしら？」

「知りませんが」

「アナタも一度くらい耳にしたことがあるはずよ。その名も

NEETウイルスよぉん！」

「は？（NEETってウイルスとかぜんぜん関係ない気が）」

ごく一般的に言われているNEETの解釈は、親のスネをかじって生きているプーのことだ。漫画家だろうと小説家を目指してようと、それは職業訓練じゃないからプーなのだ！

そのNEETとは違うの？

舞桜は神妙な顔をした。

「夏希、私たちと同じクラスにいるタローくんを知っているか？」

「誰タローくんって？（下の名前とかでだと余計にわからないんだけど）」

「夏希が知らないのも無理がない。なぜなら彼はNEETウィルスに感染して、まだ一度も学校に登校していないのだ！」

「それって単なる登校拒否じゃ？」

もしくはヒツキ！。

そして、突然思わぬ事態が三人の身に降りかかるのだった！

停電。

暗闇で誰かが叫ぶ。

「ついに来たか光の勇者ども！」

あえてノータツチ。

部屋の中には窓がなかったために、電気が消えてしまうと完全にまっくらだ。

「夏希大丈夫か！」

「きゃっ、騒ぎに便乗して抱きつかないで、あっ、そこは」あ

あッ 「」

「私は触っていないぞ？」

「えっ……また「あぁん」「触らないでってば！」

「もつと幼児体型かと思っただけど、なかなかイイ体してるのねえん」

「つて、お前か触つとんたんは！」

暗闇の中での出来事はご想像にお任せします。

部屋に淡いロウソクの火が灯った。

テーブル上に乗った赤いロウソクを中心に、かろうじて部屋の中が見渡せるようになった。

ただこのロウソクって……。

「SM道具をいつも持ち歩いていて助かったわぁん」

ベルの私物だった。

舞桜は腕組みをして思索したあと、深く頷いて見せた。

「これはテロだな。光の勇者がついに我がアトランティス要塞に攻めてきたに違いない」

二度目もスルーしたほうがいいのだろうか？

構わずベルはスルーした。

「プロブレムは停電の範囲だわね。アトランティス全域なのか、それとも学園だけなのか、何よりプロブレムなのは補助電源にチェンジしてくれないことだわ（こんなことなら、サボらないでさっさと魔導システムを完成させておけばよかったわぁん）」

「もしも停電がしばらく直りそうもないなら、こんな場所ですっとしていても仕方がない。」

夏希は席を立った。

「あのお、あたし家に帰ります」

「ムリ。インポッシブル 不可能よおん」

と明るくベル断言。

なぜかと言うと、今からベルが説明してくれます。

「停電になると学園のドアというドアはロックされちゃうのよね。さらにこの生徒会室は学園の本丸、最後の砦、パニックルーム、とにかくこの中にさえいれば外敵からの攻撃をパーフェクトにディフェンスすることができるわ……停電になっちゃうとアタクシたちも外にも出られないけれどお」

外からも入れない。

中からも出られない。

……終わった。

でも大丈夫、この生徒会室は万が一の事態を想定して食料が備蓄してある。お菓子だつて盛りだくさんだぞ！

ただ問題は明かりがいつまで持つかと言うことだ。

こんな状況だが、不安そうにしているのは夏希だけ。

「夕飯までには帰れるかな？」

「ムリね」

ベル即答。

「日付が変わるくらいまでには？」

「さあ？」

「今晚、ここに泊まりつてことないですよね？」

「生徒会室つてシャワー完備じゃなかったかしらあん？ お湯でないけど」

ベルはこんな調子だし、なんだかいつも気の張っている舞桜だが、今はとても安らかな表情をしていた。

「まあ良いではないか、たまにはゆっくりと骨を休めるのも」
「そうそう、今日はパーツと飲んで盛り上がりましょう！」

胸の谷間から取り出された一升瓶。すでに空の瓶が畳の上に転がっている。いったいアンタ何本胸に挟んでるんだよ。

そんなわけではじまったお泊まりパーティ。

時間は楽しく過ぎていき、執拗なまでの「いやぁん」「トクや」「自主規制」トークでベルが夏希を責める。

そして、ついに夏希がキレた。

「あたし帰ります！」

どうやら楽しかったのは酔っぱらいのベルだけだったらしい。夏希はドアをこじ開けようとすがビクともしない。

蹴る蹴る蹴る！

足が痛くなっただけだった。

「だからインポツシブルって言ってるじゃなァい」

「あたし絶対に帰りますから！」

意地になる夏希。

でも開かないドア。

瞑想していた舞桜がすつと立ち上がって刀を抜いた。

「夏希がそこまで出たいというのなら仕方がない。斬るから下がっていきなれ」

一刀が輝線を描いた。

刹那、斜め十文字に入った線からドアが崩れ落ちたのだった。

驚いたのはベルだ。

「絶対斬れないと思ったのに（やっぱり侮れないわね、魔王ちゃん）」

「我が刀に斬れぬ物なし……こんなにやく以外は」

諸事情によりスルーします。

ベルは白衣から筒状の何かを取り出して、夏希に向かって軽く投げた。

「受け取りなさい、懐中電灯よおん」

ロウソクのほかにもまともなアイテム持ってたのか……。

「あ、ありがとうございます（あの人なんでも持ってるんだなあ）」

こうしてやっと生徒会室を脱出できたのだが、本当の難問はこのあとに待ち受けていた。

廊下が暗い。

すでに時間も夜だから、外が暗いのは当然だろう。窓から見える景色も月明かり……窓がねえ！

舞桜は一人で納得。

「事態は思いのほか悪かったらしい」

「どういうこと？」

「停電の拍子に防御システムが誤作動して、窓がすべて塞がれてしまったらしい。もちろん野外に出ることができない扉もすべてだ」

つまり早い話が閉じこめられたって話ですね。

さっきまでと状況変らねえ！！

「外に出る方法ないの？」

尋ねる夏希に、

「知らん」

即答。

舞桜は言葉を続ける。

「この城の主は私だが、設計したのはベルだ」

「じゃあ鈴鳴先生に聞けばわかるってこと？」

「少なくとも、なんらかの情報は持っているだろう」

そんなわけで部屋に戻った二人。

ぐうがあゝツ！

化け物の唸り声かツ！

いや、ベルのいびきだった。

下着丸出しの半裸状態で寝ているベル。どう見ても爆睡。

夏希は畳に膝を付いてベルの体を揺さぶった。爆乳が揺れる

のは仕様だ。

「起きてください！」

「……っさい……があゝぐうゝ！」

「この酔っぱらい！」

「ぐがあゝツ！」

怪獣のようないびきを掻いて起きる様子なし。揺さぶっても胸が揺れるだけである。

どつと肩を落とした夏希。

「……ダメだ、起きない」

「彼女も疲れているのだ、寝かせてやるが良い」

「でもお（なにこのダメ教師）」

起きないものは仕方がない。あきらめて夏希は立ち上がった。舞桜が夏希の手を握った。

「ではゆくぞ夏希！」

「……は〜い」

こうしてついにエクストリーム脱出が幕を開けたのだった！

エクストリーム脱出・イン・舞桜学園！

ルールは簡単、とにかく外に出る。途中で同じように閉じこめられた生徒がいるかもしれません。協力するかどうかはあなただ次第、そこが戦略の分かれ目です！

窓も塞がれてしまっているので月明かりすら入ってこない。明かりがなければ本当に真っ暗な状況だ。

廊下を歩きながら夏希は思いつき舞桜の手を握っていた。

「舞桜ちゃん怖くないの？」

「恐怖とは計り知れないからこそ恐ろしい。敵を知れば恐れることはなにもない。まずは勇気を持って立ち向かうことが大切なのだよ」

「でも幽霊とか出たら怖いよね？」

「幽霊は歴とした存在だ。夏希は猫や犬を恐れるのかい？」

「恐れないけど（話がなんか違うんじゃない？）」

「幽霊も知ることによって恐れの対象ではなくなる。それにまだこの学園は新設されたばかり、怪談の一つもまだ聞いたことがない。実に寂しいことだ」

学校で起こる怪奇現象とか期待しちゃってるんですか？
懐中電灯を握りしめていた夏希がピタッと止まった。

「聞こえた？」

「なにがだ？」

「聞こえなかったなら別に　　ッ!?」

ウォーン!

今度はたしかに聞こえた。犬の遠吠えだ。

舞桜は夏希の首を握って懐中電灯の明かりを廊下の先に誘導させた。

「ふむ、奴だな」

明かりに照らされた動物の影。

四つ足の獣。

首の数は三つ、チワワが混ざっている……ケルちゃんだ!

冷静に舞桜は言う。

「犬小屋を逃げ出したらしいな」

『生徒会長天道舞桜VS地獄の番犬ケルベロス』召喚成功しちゃったよ』事件のあと、学園で飼われることになったケルちゃん。急ピッチで犬小屋が建設され、そこにぶち込まれたらしいのだが、目の前にいるって現実を見るに逃亡したらしい。

とりあえず出会い頭から脳天まで血が昇っちゃってるケルちゃん。いつもは可愛いチワワの頭も今は恐ろしいくらいに怪物フェイス。

しかも暗闇だと怖さ倍増!

飛びかかってくるケルちゃん。狙いは懐中電灯＝夏希。

「来ないで！」

レッツ逃走！

逃げる夏希、追うケルちゃん、独り残された舞桜。

「……明かりがなければ何も見えん（まだまだ私の修行が足りんな）」

舞桜を置き去りにしたことに気付かず夏希は逃げる逃げるとりあえず逃げる。

そしてまた逃げる！

ケルちゃんは明かりを頼りに追っかけてくる。

ここで一か八か懐中電灯を消した。

息を潜めてそーっとそーっと。

ブふおっ！

強烈な鼻息が夏希の顔に掛かって髪を靡かせた。

恐る恐る明かりを点けると　いきなり大きな口！

「きゃーッ！」

夏希ダツシュ！

牙が噛み合わされる音が廊下に木霊した。

明かりを消したくらいじゃ嗅覚や聴覚でバレるっばい。

「助けて舞桜ちゃんって……いないし！」

今気付いたらしい。

突然、夏希はグイツと腕を引っ張られて教室の中に引きずり

込まれた。

「えっ!？」

何が起きたのかわからない。

素早く閉められたドアに突進するケルちゃん。

世界が揺れたような衝撃が走った。

そつと誰かが夏希を抱き寄せた。

「大丈夫、中には入ってこれないから」

「あつ……雪弥くん、何で？」

とつくに帰ったと思われた雪弥がそこにはいた。

閉められたドアに突進を続けるケルちゃん。だが、ビクともしない。

学園の教室のドアにはカギがあり、頑丈なドアは外からの侵入を防ぎ、立てこもれる仕様になっていた。はじめから舞桜は何かと戦うためにこの学園を設計させたのは明らかだった。

廊下からは唸り声が聞こえる。

やがてその声も聞こえなくなった。

「もう出て大丈夫かな？」

夏希が尋ねると雪弥は首を横に振った。

「まだすぐそこにいるよ」

「どうしてわかるの？」

「僕には 視 えるからだよ」

雪弥は静かに微笑んだ。

「（暗闇でもよく目が見える人なんだ）」

程度にしか夏希は考えなかった。

外にはまだしつこくケルちゃんがいるのだろうか？

はぐれてしまった舞桜も心配だ。だって懐中電灯持ってるの

夏希だし。

ほかにも心配はいくつもある。

「ねえ、どうして鷹山くん学校にいるの、もう帰ったと思ってたのに？」

「大事なモノを忘れちゃって取りに来ただけで、見ての通り閉じこめられちゃって、あはは」

「ほかにも閉じこめられた人いるのかな？」

「ほかのみんなは体育館に非難したよ。僕はほかには誰かいないか見回りしてたんだ」

「そうなんだ」

急に雪弥の目つきが鋭くなった。

「いた！」

『何が？』とは聞けなかった。今まで見たことのなかった雪弥の表情に、胸を鷲づかみにされる恐怖を抱いたからだ。

しばらくして廊下に轟々という風が吹き荒れた。窓は閉じられているのに。

グギャグイイイゲツ！

何とも形容しがたい生々しい音が聞こえた。

自分の体を抱きしめて恐怖する夏希を置いて雪弥が廊下に飛び出した。

雪弥は自分の持っていた懐中電灯を“それ”に当てた。

赤黒い海に沈む毛の生えた黒い残骸。肉が千切れ骨まで見ている箇所がある。痙攣をしているようだった。

「まだ微かに息があるか……（一瞬でこの有様とは、まさに悪魔の仕業だな）」

恐る恐る教室を出てこようとした夏希の視線を雪弥は自らの手で隠した。

「見ない方がいいよ。手を引いてあげるから行こう」

「……うん」

なるべく見ないようにした。

しかし、血生臭さは夏希の鼻を犯した。

足早にその場をあとにして、それからしばらく歩き続けていると、雪弥がある物を発見してライトで照らした。

「なんだろう？」

「あれは……（ピンクさんの頭）」

首手ヨンパではない。着ぐるみの頭部だけがそこに転がっていたのだ。

夏希は嫌な予感がした。

「（舞桜ちゃんとピンクさんに何かあったんじゃない?）」

そう考えるのが普通だろう。

ピンクシャドウは常に舞桜のことを守るために近くにいると考えられる。そのピンクシャドウに何かがあったということは、舞桜を守るために行動したと考えるのが妥当だろう。

しかも、頭を置いていくとはよほどのことがあったに違いない。

夏希はうさぎの頭を拾ってワキに抱えた。

「舞桜ちゃんが危ない、早く見つけなきゃ！」

「彼女が危ない?（おそらく“アレ”に出遭ったのだろう）その被り物は？」

答えようとしたが夏希はあることを思い出した。

「(どうしよう、前に他言無用って言われたような)。とにかく舞桜ちゃんが危ないの一緒に探して！」

「大丈夫、心配しないで。彼女の居場所はわかってるから」

「なんで？」

「僕を信じて」

走り出した雪弥に夏希は信じて着いていくことにした。

向かったのは階段。そこから階段を駆け上がった。

途中の踊り場で人影が壁にもたれかかって座っているのを発見した。

ライトを当てようとすると夏希に、

「顔に光を当てるな！」

大きなきぐるみの手でその人物は自らの顔を隠していた。

間違いない。

「ピンクさん！」

声をあげた夏希の横では雪弥が怪訝そうな顔をしていた。

「(なぜだ……なぜ 視 えない？ こいつはそこに存在しているのに、なぜ俺の 千里眼 では 視 ることができない？) 怪我をなさっているようですが大丈夫ですか？」

近づこうとした雪弥をピンクシャドウは制止させた。

「近づくと殺すぞ。たしかに私は重傷でここを動けないが、貴様を殺すくらいのことではできる(くそっ、不意打ちさえ喰らわなければ)。私のことよりも舞桜様を助けて欲しい、お願いだ。舞桜様は怪物と共に屋上にいるはずだ」

重傷と聞いて夏希が放っておけるはずがなかった。

「でも、ピンクさんが……（動けないほどの重傷なんて、死んじゃうかも）」

「私のことなら案ずるな。ここでは絶対に死なない。しかし、舞桜様の命は危険に晒され一刻の猶予もない、早く行つてくれ！」

夏希は口を真一文字に結んで、うさぎの被り物をここに置いてから、階段を駆け上がり出した。すぐに雪弥も夏希のあとを追う。

屋上と目と鼻の先。防護シャッターが下りていたが、何十センチもある金属製のそれには、まるで突き破ったような穴が開いていた。人の力では決してありえない“何か”。

先に穴に飛び込もうとした雪弥が何かの力によって弾き飛ばされた。

「くっ！（バリアか……それにしてはエネルギーを感じない。何が俺の邪魔をする？）」

夏希は雪弥が飛ばされたその部分に手を触れた。

目には見えない何かを押し戻そうとする。まるで拒否されているかのように。

《来ないで！》

夏希の頭に声が響いた。

「（なに今の声？）」

再び夏希は見えない壁に手を触れた。

《来たら殺すわよ！》

また声が響いた。

「誰なの!？」

夏希の問いに雪弥は眉を寄せた。

「何かを感じるのかい？」

「声が聞こえたの」

「声？（俺には聞こえないのか）」

もう一度、夏希は見えない壁に触れた。

《来ないでって言ってるでしょ!》

「魅神さん!？」

それは菊乃の声だった。

なぜ菊乃の声が聞こえるのか？

この先に何が……怪物？

夏希は見えない壁に手を押し込めた。反発される。それでも負けずと手を入れ、ねじ込むように体を入れた。

見えない壁を抜けた途端、余った力の反動で夏希は床に倒れたしまった。

「いったい」

床に両手を付いて立ち上がりとした瞬間、

「イタツ！」

激痛が足首に走った。

「右足ひねっちゃった」

それでも夏希はどうにか立ち上がって、片足を引きずり歩いた。

屋上に続くドアを抜けた途端、凍える強風とむせ返るような

異臭に襲われた。

《来たたら本当に殺すわよ!》

「どこなの魅神さん?」

《お願いだから……来ないで……》

震える声。まるでそれは泣いているようだった。

学園の屋上は敷地面積が非常に広い。運動スペースや緑化スペースなど、さまざまなスペースが設けられている。まるでそこが屋上であることを忘れてしまいそうな場所だ。

《来ないで……来ないで……見られたくない……》

夏希の頭に響く声。言葉の意味とは裏腹に、まるでそれは助けを求めるかの声だった。だからこそ夏希は探さなければ行けないと思った。

菊乃がこの屋上にいる。そして、おそらく舞桜も。

異臭を強くなる。まるで物が腐ったような臭い。肌を刺す風も強くなっていた。

夏希は足下に目をやった。何か落ちている。

拾い上げたそれは狐面だった。

菊乃がいつもつけていたそれ。触られることさえ拒み、決して外そうとしなかった面。顔を隠し続けた偽物の顔。

しかも、その面は真つ二つに割れていた。

公園スペースにたどり着いた。

この異臭のせいか、眼まで開けられなくなってきた。それでも夏希が眼を開き辺りを見回すと、噴水がなんと汚泥を噴き上げていた。

よく見ると足下の芝も黒く溶けているようだった。

「舞桜ちゃん！」

夏希は目に飛び込んで舞桜に駆け寄った。

芝生の上で横たわり、意識があるのかなのか、苦しそうな表情で眼を瞑っていた。よく見ると、皮膚にいくつもの黒い斑点が浮き上がっている。

「舞桜ちゃんだいじょぶ！」

「……うつつ……うつつ……」

うなされながら苦しい声をあげているだけ、おそらく夏希の声も届いていない。

夏希は辺りを見回した。

「魅神さん近くにいるの？」

《その女を早く連れて逃げるのよ。ここにただで死ぬわよ！》

「魅神さんを置いていけない！」

《偽善者めツ！ 行かないのならわたしが殺すわよ！》

「どうしてそんなこと言うの！（あたしはただ……なんでもいからできることをしたい。友達になりたいと思ってるから、あたしのできることをしてあげたい！）」

《わたしのことを想うなら来ないで！》

「できないよ……だって魅神さんの声、苦しくて、悲しそうなんだもん。今行くから！」

叫び声にも似た音を鳴らしながら突風が吹き狂った。

思わずバランスを崩した夏希は腕で顔を覆う。

《来ないでって……言ったのに……殺してやる!》

木の陰から巨大な何かが飛び出してきた。

まるでそれは蜘蛛に似ていた。皮と骨だけの赤黒い躰から伸びる異様に長い手足。四つん這いで歩き、異臭を放ちながら夏希に向かって近づいてくる。

「(気持ち悪い)」

夏希は心の中で呟いてしまった。

《そう、わたしは気持ち悪いの》

半分以上飛び出した眼球をギョロツとさせながらその物の怪は夏希を睨んだ。

《気持ち悪いでしょう、恐ろしいでしょう、吐き気がするでしょう? これがわたしのよ》

夏希は深呼吸をしてからその物の怪を見据えた。決して眼を背けることなく、その物の怪の顔を見続けた。

「ごめんね、気持ち悪いと思ったのは本当。でも、それは見た目の問題で、中身は菊乃ちゃんは菊乃ちゃんだから、だからあたし本当に仲良くしたくて……」

《でも気持ちが悪いのでしょうか? 気持ち悪いわたしの傍に近づけるの? わたしの躰に触れることができるの?》

「できる!」

夏希は臆することなく物の怪に近づこうとした。

しかし、それを拒んだのは菊乃だった。

《来ないで! どうして来るの!》

「だって本当は傍にいて欲しいってあたしには聞こえるから。」

大丈夫だよ、傍にいてあげるから」

《来ないで!》

物の怪の長い腕がなぎ払われ、鋭い爪が夏希の腕を抉り、破れた裾から真つ赤な血が滲んだ。

「痛いけど大丈夫……だって菊乃ちゃんのほうが苦しそうなんだもん」

《やめて同情なんて、この偽善者!》

物の怪は怯えるように後ずさりをした。

ゆつくりと一歩一歩、地面を踏みしめながら夏希は近づいた。

《来ないで……来ないでよ……わたしに触ると毒に犯されて死ぬわよ!》

「大丈夫だから」

大きく両手を広げた夏希は包み込むように物の怪の長い手にしがみついた。

「ね、だいじょぶだったでしょ?」

汚泥に手をつ突つ込んでいるような触感。

鼻を麻痺させ頭痛と眩暈を引き起こす異臭。

毒なのだろうか、皮膚が燃えるように熱く、痺れるような痛みが全身に走る。

しかし、それらは徐々に薄まって逝こうとしていた。

《あなたは言葉も態度も心も、馬鹿みたいに嘘のつけない人。

貴女の心はとて聞こえやすかった。だから気付いていたのに、信じることができなかつた……だって人は裏切るものだから、

ごめんなさい》

「うん」

《これはわたしの身に降りかかった呪なの。わたしは生まれて間もなく物の怪に躰を奪われた。お父様とお母様はわたしを助けようとしてくれた……そんなことしなくてよかったのに。物の怪は死んだわ、けれど引き替えにお父様も死に、お母様は未だに臍腑に重い後遺症が出ているの。そして、わたしはと言うと、物の怪の意識は死んでも怨念だけが残ってしまった。故に満月の晩や霊力や魔力の類を多く孕んだ場所にいると、こんな醜くて気持ちの悪い物の怪になってしまう》

空には満月が浮かび、優しい月明かりは二人の少女を照らしていた。

夏希の膝の上で眠る菊乃の姿。

気高く上品で華やかな少女の素顔。それを見て夏希は息を呑んだ。

「(ちょー美人)」

「嘘付かないで」

「ウソじゃないよ、なんでこんな美人なのに顔隠すの！」

「美人じゃないわよ、わたしは不細工なの」

「顔じゃなくて性格がブスなんですよ！」

「……っ」

思わず瞳を丸くして言葉を詰まらせる菊乃。

互いに見つめ合い。

急に可笑しくなって夏希が笑った。

「あははは、なんかわかんないけどおかしいー！」

釣られて菊乃も口から空気を漏らした。

「ふふ、あはは……」

「あーっ菊乃ちゃんが笑った！ いつもみたいのじゃなくて、菊乃ちゃんその笑顔スゴイ素敵！」

「うるさい」

ブスツとした表情をしても、口元だけは微笑みを浮かべていた。

夏希はずっと放さず持っていた狐面を菊乃に返した。

「はい、大事な物なんだよね？」

「……早く返して頂戴（ありがとう、岸さん）」

菊乃は狐面を奪い取って顔に被せた。割れてしまっているため、常に手で押さえていなければならない。

面を被った途端、なんだかいつもの菊乃に戻ったような気がして、ちよっぴり夏希は残念な気分だった。

「被らないほうが素敵なのに」

「でも被らないわけにはいかないの」

「どうして？」

「わたし人と顔を合わせるのが死ぬほど嫌いだから。そして、もつと重要なのは、この面がわたしの霊力を抑え、さらに人の声のある程度遮断してくれているのよ。だからわたしを守ってくれるこの面は絶対に外せない」

ゆっくりと自分の膝から立ち上がる菊乃を見て夏希がハツとした。

「菊乃ちゃん裸！」

「そうね、変身したときに服は破れてしまったわ。仕方のない事よ」

「つて、冷静すぎだから！ 早く着替えなきゃ、とりあえずあたしの制服着て！」

そして、夏希は自分の制服を脱いで菊乃に着せたのだが……。

「あーっ、あたしが下着になっちゃった！」

「…… やっぱり馬鹿ね貴女」

「水着だつて思えば恥ずかしくないもん……きゃーっ！」

夏希が叫んだ。

「ごめん岸！」

この場に駆けつけた雪弥は慌てて手で顔を覆った。

「すぐに着替え持ってくるから」

そう言つて慌てて雪弥はこの場を去つて行つてしまった。

思わず夏希は笑つてしまった。

「今の見たー？ ちよつとおかしかったよね？」

「そうね」

その狐面は少し微笑んでいるように見えた。

第4話 エクストリーム強盗！

目の下にクマさんを飼ってる夏希はどよんとしていた。

「完全に寝不足だ（まさか本当に学校で一晩過ごすことになるなんて）」

舞桜学園はじまって以来の重大事件エクストリーム停電。家に帰れたのは早朝を少し過ぎたくらいだった。それまでの間、酔っぱらい教師に付き合わされるといふ悲劇。

つまり一睡もできなかった。

しかも、やっと家に帰ってシャワーを浴びて、さてとこれから寝ようかなあと思つたら、自宅マンションまでリムジンのお出迎え 舞桜だった。

すっかり忘れていたのだが、細菌兵器の撲滅運動がどーとか、NEET撲滅運動がどーとか、とにかくどーとかこーとか。

そんなわけでリムジンに乗り込んだのだが、いきなり舞桜に抱きつかれてノックダウン。逃げる気力もなかった。

「（どうしてこの人、こんなに元気いっぱいなんだろう）」
理由はちゃんと寝たから。

あの一件で邪気に当たった舞桜は、保健室にある集中治療室で朝までぐっすりだったのだ。

リムジンに乗って三〇秒。隣のマンションに着いた。

ツッコミどころ満載の出来事だが、もはや思考を停止させた

いくらい夏希はゾンビー状態だった。

リムジンを降りると、白い悪夢がそこに立っていた。

爆乳と白衣。

「グツモーニング！ 夏希ちゃん元気ないけどどうしたのかしらあん？」

「誰のせいですか誰の……。てゆか先生なんでそんなにムダに元気なんですか？」

「ベリィヤングだからに決まってるじゃなあ〜い」

「あー頭に来る……。じゃなくって、先生の声が頭に響くう〜、意識がもーろーとするるー」

だんだんと生死の境が近くなってきたぞ。

ベルが何やら舞桜に耳打ちしている。

聞き終えた舞桜が『ふむ』と納得した。

で、次の瞬間。

舞桜は夏希の体を抱き寄せて熱烈なキッス！

モーニングキッス！

お早うの接吻！

目覚めの一発！

ちゅ〜っ

夏希はお目々ぱっちり。

「ちよ、朝からやめてよ！」

「朝だからするのだろう？」
なるほど。

さてと、すっかり夏希ちゃんも目も覚めたところで、突撃オ

タク訪問と行ってみましょー！

ベルがベルを鳴らす　ピンポーン！

返事がない。

ベルがベルをまた鳴らす　ピンポーン！

やっぱり返事がない。

ベルがドアの前に立つて　。

「出てこないとぶっコロスわよぉん、いるのわかってんだからね！」

ドアに殴る蹴るの暴行を加えた。

絶対に返事がない。

普通、あんな脅され方したら、出て行けるものも出たくない。

「NEETウイルスの合併症、居留守ね。仕方がないわぁん」

ベルは白衣のポケットからアイテムを取り出した。

ちゃちゃちゃちゃくん、合い鍵

って、最初から使えよ。少なくともドアを蹴る前に力ギだろ。

ドアを開けてベルと舞桜が雪崩のように乗り込んだ。

舞桜が片っ端のドアをノックする。

「早く出てきたほうが身のためだぞ！」

ベルが片っ端のドアを殴る蹴る。

「さっさと出てこないとドアにバズー力撃ち込むわよぉん」

そして、夏希は丁重に玄関でクツを揃えてから上がった。

「おじゃましま〜す」

力ギの掛かったドアの前に舞桜が立った。

「おそらく感染者はこの中だ。ドアを斬るぞ！」

なんていうかやり過ぎです。

刀の軌跡は幾重にも趨り、瞬く間にドアは細切りにされてしまった。

一気に中に乗り込む舞桜とベル。遅れて気まずそうに夏希が入る。

ベッドの上で掛け布団を被って身を守る少年。

「な、なんだよお前ら！」

明らかに怯えた声だ。

舞桜は刀の切っ先を少年の眼前に向けた。

「風タローだな？」

「そ、そうだけど……」

「私は舞桜学園の学園長兼生徒会長の天道舞桜、お前のクラスメートでもある。そして、彼女は担任の鈴鳴ベル、後ろにいるのが生徒会副会長でお前のクラスメートでもある岸夏希だ」

夏希はペコリと頭を下げる。

「あ、はじめまして」

頭を上げる前にベルが夏希を押し込んで前へ出た。

「アナタはNEETウイルスに感染しているわ。すでに引きこもりの症状が出ているから、確実に将来NEETになるわよおん！」

続いて舞桜がしゃべる。

「NEETウイルスとは国家の転覆を狙うテロリスト集団が開発した細菌兵器なのだ。その感染力は凄まじく、電波によって感染する。特にネットによる感染例が多く報告されている」

「ほっといてくれよ」

タローは掛け布団の中に引きこもった。

舞桜が驚愕の表情を浮かべる。

「立てこもり事件発生だ！ 感染者が自分の殻に立てこもってしまった。人質として自分を盾にするとはい卑怯な！」

部屋のガサ入れをしていたベルがあるものを発見した。

「これをルックしなさい舞桜！」

ベルが手に持っていたのはテレビゲームのパッケージ。

「そ、それは勇者育成ゲーム！ またの名をRPGではないか！? クソっ、こんなところにまで光の勇者の魔の手が伸びていたとは……」

この展開に置いてけぼりを食って独りポカーンとしてしまっている夏希。

「(やっぱりあたしこの人たちのノリについていけない)」

仕方がないので夏希は独り寂しく電源の入っていたパソコンを操作してみる。

どうやらブログをやっているらしく、記事を執筆中だったらしい。

【執筆中の記事】

タイトル：そういうやつらっているよな〜

話題になってないときに散々バカにしたたクセにさ、

なんか話題になったらファンみたいにしやべりだすやつウザイ

な。

【数日前の記事】

タイトル：オッパピー

そんなの関係ねえ！

そんなの関係ねえ！

【もっと数日前の記事】

「自主規制」って誰？

なんかみんな記事にしてるから気になったんだけど？

【さらにその記事のコメント】

「本人」

んで、そいつがどうしたのさ

そこまで騒ぐくらいなら 何かあるんだろ
うね？

「HN自主規制」

最近「自主規制」って番組に出てて売れてるらしいですよ。

「本人」

そんなゴミ番組見ない。

記事を流し読みした夏希の感想、

「(この人イタイ)」

ベルも近づいてきてほかの日の記事を読みはじめた。

「なんだかヘアワックスのトークが多いわね。この部屋の住人が？」

言われて夏希も部屋を見回した。

ファッションに気を使うような住人の部屋とは思えない。マンガやフィギュアにアニメのポスターが点在している。ほかに置いてある家具や小物は地味な物ばかり。

さらに驚いたのがなぜか置いてある香水。

ベルがツツコミを入れる。

「ヒッキーなのにな？」

ヘアワックスもそうだが、いったいどこにつけていくのだろうか……引きこもりなのに。

さらに別の日の記事では精神論を語ってみたり、哲学を語ってみたり、宇宙のことを語ってみたり、思想家ぶってる印象も受けた。

ベルは深く頷いた。

「この患者は中二病にも感染しているわね」

中二病とはジャパンの中学二年生くらいの青少年によく見られる症状で、子供と大人の狭間で揺れ動く心情が隔たったり歪んだ形で現れるものである。

例えば、幼稚なことを否定して大人ぶるも、汚い大人や政治や社会を批判してみたり、生死観や宇宙について、自分と他人の哲学的思想、身近な物体の存在を問うてみたりすることが多いらしいが、しっかりした大人から見ると幼稚で滑稽に見えてしまう。

現在では実際に思春期まったただ中にいる青少年を示すと言うより、定義は曖昧でそういった人々を包括する言葉になっている。

舞桜は掛け布団を引っ張り剥がした。

「いつまでもこの生活が続けられると思うなよ。君は将来どうするつもりなのだ！」

「フリーターになるからほっといてくれよ」

「な、なんだとフリーターだど!? ジョブシステムを活用して“すっぴん”になるつもりだな! 最初はどうしようもないブーだが、最終的には最強のジョブというか無職なのにラスボスを倒してしまうというアレかつ!(くっ、光の勇者たちの思想が着々と世界を浸食している)」

妄想しすぎ。

ベルは白衣のポケットから拘束具を取り出した SM の。

「荒療治が必用なようだわねえん。学園に監禁するしかないわ、そうすれば少なくとも登校拒否は改善されるわよおん！」

そういう問題なのか?

不適な笑みを浮かべたベルがタローに飛びかかった。

「覚悟なさい！」

「ぎゃあああっ！」

その後、「あぁん」「な恐怖がタロウくんを襲うこととなつたのだった。

とにかく一件落着？

ベルに後処理を任せて舞桜と夏希は部屋の外に出た。すると、マンションの廊下がなにやら騒がしい。

夏希はすぐに慌ててるオバサンに声をかけた。

「あの、なにかあつたんですか？」

「屋上から飛び降りようしてる人がいるのよ！」

「ええっ！」

舞桜は深く頷いた。

「うむ、連続引きこもり殺人事件だな」

「は？」

と思わず夏希は声を漏らしてしまった。

意味不明なのはいつものことだが、聞かずにはいられない。

「どういう意味？」

「屋上に引きこもって自分を殺そうとしているのだろうか？ 立

派な殺人事件ではないか？」

じゃあ『連続』って言葉はどこから来たの？

なんて訊く前に舞桜は屋上に向かって走り出していた。慌てて夏希が追う。

屋上に続く階段の近くには人だかりができていた。その先の様子はわからない。どうやら何らかの方法で扉が固定され、誰

も屋上に入れない状況らしいことはわかった。

舞桜が刀を抜いた。

一斉に人々が怯えながら道を開けた。

「下がっている、扉をぶった斬る！」

格子状の扉が輪切りにされた。

刀を鞘に収めて舞桜は屋上に急いだ。

強風の吹く屋上。

男がフェンスを乗り越えて、屋上の縁に立っていた。あと一歩踏み出せば落下と引力の法則を体感できる。

男は舞桜に気付いたらしい。

「おい来るな、飛ぶぞ！」

「飛ぶのではない。落ちるのだよ」

「どっちでもいいだろそんなこと！」

結果が同じならどっちでもいい話だ。

遅れて夏希もやってきた。

「死ぬのはよくないと思います！」

「お前らになにがわかんんだよ！」

「だからお話だけ聞きますから飛ぶのちょっと待ってください！」

舞桜がボソツと。

「だから飛ぶのではなく、落ちるのだ」

こだわる舞桜様。

夏希はゆっくりゆっくり男に近づこうとする。

「ねっ、落ち着いて話し合いませんか？」

「ふむ、ならば茶と菓子を用意させよう」

「そうだね、長期戦になるならあったほうがいいよね、って何言ってるの舞桜様！」

この状況下で夏希は舞桜のことスルー。

「どうして死のうと思っただんですか？」

「将来に希望が持てなくなっただよ、だから死ぬしかないと思っただ」

その言葉をいつの間にか用意されたちゃぶ台でお茶を飲みながら聞いた舞桜。

「私が見たところ君はまだ二〇代だろう。将来を悲観するには早いと思うが？」

「俺には将来の夢があつたんだ。でも一向に芽が出ないし、このまま夢を追っていてもお金もないし、今は親に頼って生活してるけど、いつかは自立しなきゃいけないし、そろそろ将来のことも考えて就職しなきゃいけないと思うけど、やっぱり夢が捨てられなかった。もしも、これからもずっと芽が出なくて、仕方なく別の道に進もうと思っただけなんだ。俺は夢に人生を賭けてたんだ、努力も時間も無駄になって、俺よりも早く就職したやつらはどんどん出世していく。就職だつてなかなか決まらないう、バイトだつてしたことがない俺が生きていけるわけじゃないじゃないか！」

彼の追っていた夢とはなんだろう。

夏希は尋ねる。

「バンドマンですか？（それにしても芽えなないけど）」

「小説家志望だよ！」

そつちか！

男の感じから漫画か小説だと思つたんだよね。

舞桜がビシツと男を指さした。

「この世を動かす力は希望にほかならない。君に足りない物は勇氣だ。起こつてもいない未来に悩み、君は今を無駄にしている。将来の失敗を恐れることは大変に馬鹿げたことだとは思わんかね？ なぜならまだそれは起きてもない出来事なのだよ。もしも本当に勇氣のある人間ならば、どんな苦境にありながらも、やるべき行動を取ることができる」

「うるさいな！ 俺はもう駄目なんだよ！」

「失敗の苦痛を恐れるあまり、失敗する前から苦痛を味わう。無用の苦痛を味わい、無用の浪費ばかり増すのならば、早々の立ち向かえばよいものを。それでは巡つて来たチャンスも掴めぬというもの」

「俺にチャンスなんかもうないんだよ！」

「チャンスとはいつ巡つてくるともわからない。だからこそ、常日頃からの精進が必用なのだ。失敗することばかり考えて、君はなぜ成功することを考えないのか私には理解できんね。どちらもまだ起きてない未来なのだから、同じことだろうに」

「お前だって言つてんじゃないか、チャンスはいつ巡つてくるかわかんないって！ 俺はもう耐えられないんだよ、そういうのに。どうせ努力なんて無駄なんだよ、芽が出るかどうかなんて運で決まるんだよどうせ」

「うむ、たしかにその手の職種でデビューできるかどうかは、運が七割、努力が三割と言ったところだろう。運は偶然に巡ってくる奇跡の要素が強いだろう。しかし、運というのは自分でも引き寄せることができるのだよ？」

ついに舞桜がちゃぶ台から立ち上がった。

澄み渡る青空の下で両手をいっぱい広げ、ゆっくりと体を回転しはじめた。

「世界は今日も廻っている。私を中心に、夏希を中心に、そして君を中心に。世界は一人一人の心を映す鏡だ。見る者によって、心の持ちようによって、世界はいくらでも変貌する。しかし、世界は一人のために存在するものではない。人々は個であり全であり、見えない糸で結ばれている。自分が他人にしたこととはいつか巡り巡って戻ってくるもの。運も同じ、運とは廻るもの、人から人へ廻すもの。すなわち、運を引き寄せる要素とは徳、中でも人徳が大事なのだよ！」

発言がまるで中二病患者のようだ。

話を聞き終えた男は急に肩を落とした。

「やっぱ死のう」

うわっなんか舞桜の話逆効果！

ふわっと落ちそうな男を見て、夏希は慌てて駆け寄ってフェンス越しに相手の腕を掴んだ。

「ダメ死んじや！」

「放してくれ、俺はもう死ぬしかないんだ……」

「どうして！」

「俺に人徳なんてあるわけないだろ。学生時代はうつ病で、暗くてキモくて友達もいない俺にとっての黒歴史なんだ。そりゃ少しくらい友達もいたけど、学校卒業したら疎遠になるし、友達なんかと遊ぶより俺は小説を書くことでいつぱいだったんだ。青春時代の楽しいことを我慢して、とにかく小説を書くことに一所懸命で、人との関わりをどんどん切っていったんだ。そんな俺に人徳なんてあるわけないだろ」

バイトもせず、友達とも遊ばず、家に引きこもって小説ばかり書いている。たしかに人徳なんて微塵も感じられないね

しかし、代九一代内閣総理大臣のフン康夫は学生時代友達いなかっただけで、日本のトップになったぞ？

まあ、フン康夫は親も総理だし、元サラリーマンと言え工リートだったからな！

男はさらに肩を落とした。

「俺には人徳もない。才能もない。金もない。もうダメなんだ……」

舞桜はため息を吐いた。

「わからん奴だな。死ぬ覚悟があるなら死ぬまで夢を追っても同じ事だろう。君はどうせ死ぬ気がないのだ。本当に死にたいならこっさり死ねば済むこと、止めて欲しかったのだろう。君の人生にはまだ甘えがあるのだよ」

「俺の何がわかるっていうんだよ！」

「少なくとも君をもっとも苦しめ傷つけているのは君自身だということのはわかるさ。君は自分の生死に関わることが起きたと

きにも目移りするのかい？ 本当に死ぬ覚悟があるなら、常に生死が関わっていると思い行動したまえ」

「おうおう飛べばいんだる飛んでやるよ！」

もうヤケクソですね。

屋上に冷たい風が吹き込んだ。

「死にたいのなら勝手に死ねばいいわ。ただし、死んだからと言つて楽になれると思わない事ね」

夏希はその黒い影を見て歓喜の声をあげる。

「菊乃ちゃん、来てくれたんだ！」

「気安くちゃん付けで呼ばないで頂戴。生徒会の仕事だから仕方なく来たのよ」

「（昨日の今日なのにもういつもの菊乃ちゃんに戻ってる、ちよつと悲しいけど、来てくれたのは嬉しい！）」

が、冷静に考えてみると邪悪な菊乃が来たら状況が悪化するんじゃない？

黒い風を纏いながら菊乃が男に近づく。

「早く飛びなさい。なんならわたしの手伝つてあげましょうか？」

やっぱり自殺推奨してるし！

男のほうも意地になる。

「飛ぶよ！ 飛ぶから邪魔すんなよ！」

「ええ、邪魔なんてしないわ。ただ、少し助言をしてあげる」
無機質な狐面に影が差し、嗤っているように見えた。

狐面は言葉を続けた。

「決して自殺者に冥福なんて訪れないのよ。死んだ人間は時間が止まる。死んだそのときの感情、恐怖、苦しみ、憎しみをそのままに魂となるのよ。わたしに言っている意味が理解できて？」

「死後の世界なんて信じてねえーよ！」

「信じる信じないの問題ではないのよ。少しだけ見せてあげましょうか、うふふふ……」

ゾツとした。

晴天だった空が急にどんよりと曇りはじめた。

湿気を含んだ風が吹く。

急に怖くなつた夏希は男の腕を爪が食い込むくらい握つた。

男のほうも脂汗を掻いてフェンスを強く握っている。

遠くの空に雷鳴が響いた。

次いで耳を澄ますと女の悲鳴が聞こえた。

男の怒鳴り声、子供が泣く声、老人が不気味に嗤う声。

耳を塞いでも頭の中で響き渡り木霊する。

「まだまだ序の口よ」

低音で囁かれた菊乃の声を聞いて夏希は限界だった。

「ごめんなさいあたしが悪かったです、もうやめて、それ以上は無理です、ごめんなさい……」

何も悪いことしてないが、ついつい謝ってしまう。

突然、舞桜が叫んだ。

「わっ！」

驚いた夏希は男から手を放し、男も驚いて足を踏み外しそう

になつてフェンスに抱きついた。

「死んだらどうすんだよ！」

叫んだ男。

舞桜は頷いた。

「うむ、やはり死にたくないのではないか。ならばこんなことで時間を費やしている暇は君にはない筈だ。人がもつとも無駄に浪費してしまうモノは時間だ。そして、もつとも大事なモノも時間だ。挫折は決して不名誉なことではない。そこで立ち上がろうとしないことが不名誉なのだよ。心に素直になり、君は君の道を歩めばいい」

夏希も笑顔で男にエールを送った。

「そうですね、頑張ってください！」

菊乃がボソツと。

「その頑張れという言葉が彼の重圧となるのだけだね……うふふ」

男はうつむいたまま無言だった。

きつと今、彼の中でいろいろな想いが巡っているのだろう。

と、そのとき、誰かのケータイの着信が鳴った。

男のケータイだった。

「……おおっ、俺のケータイか。鳴ったの久しぶりだったからわからなかった　あ、もしもし？」

だって友達いないだもんね！

あんまり寂しいなら出会い系とか登録するといいいよ、サクラメールいっぱい来るから

男は驚いた表情をした。そして、見る見るうちに明るくなつていく。

「えっ、本当ですか!? デビューできるんですか? あ、それは気が早いですが、賞もらったわけじゃないですもんね。でもこれから頑張ればデビューできるんですよ、本当にありがとうございます、やったーっ!」

と、男が飛び跳ねた瞬間。

「……あっ」

足を踏み外した。

屋上から消えた男の影。

ひゅん、ドン!

あ、落ちた。

「さて、次の感染者のところに行くとするか」

何事もなかったような舞桜の発言。

驚く夏希。

「えっ、だって今落ちたんだよ? もう遅い……って言っちゃけなかった、ほら救急車呼ばなきゃ!」

「彼に対する私の興味は尽きた」

「舞桜ちゃんそれでも血の通った人間?」

「生物学的に見ても私は歴とした人間だが?」

「人が死んだんだよ! ねえ、菊乃ちゃんも何か言っておいてよ!」

と、話を振ってから失敗したと思った。

「別に誰が死のうと私には関係ないわ」
アウエイだ。

ちよつと倫理的に可笑しいのが二人いる。民主主義に則って多数決したら夏希のほう可笑しいことになってしまふ。

夏希は悲しそうな顔をして舞桜を見つめた。

「舞桜ちゃんってたまに思うことだったけど、どうして人の気持ちかわからないの？」

「残念ながら霊視能力は持ち合わせていない」

「そういうことを言ってるんじゃない、気持ちの問題を言ってるの！」

「気持ち？」

「人の気持ちを考えて行動したりしないの？」

「人の意見に左右されて行動することはよくないことだ」

「意見じゃなくて気持ち！」

夏希はいつの間にか涙目になっていた。

困った顔をする舞桜。

「どうしたのだ、なぜ涙を流している？」

「それもわからないの？」

「涙を流す理由はいくか考えられる。あくびをしたとき、悲しいとき、嬉しいとき、悔しいとき、花粉症のとき……」

「もういい！」

感情が抑えきれず、居たたまれなくなった夏希はこの場を飛び出した。

風に靡いた小さな雫。

ぼつ、ぼつ……と地面を濡らす染み。

空を見上げると、灰色の空から急に大粒の雨が降りはじめた。

「ふむ、夏希に傘を届けねばならんな」

その動機で夏希を追いかけるため走り出した舞桜。

階段を下りて廊下を眺めたが夏希の姿はない。

さらに急いで舞桜はマンションの外に出た。そこにも夏希の姿はなかった。

少し辺りが騒がしい気がした。

近くにあるコンビニの前に人が集まっている。

気になった舞桜はコンビニの前にいた通行人Aに話を聞いた。

「なにがあつたのだ？」

「強盗犯が人質を取って立てこもっているらしいよ」

「ふむ、連続引きこもり事件か（住人の誘致を大々的にやっているせいか、この都市の治安も悪くなってきたな）」

和傘を差した菊乃が遅れてやってきた（傘とかいつの間にか用意してたの？）。

「人質になっているのあなたの婚約者よ。助けてって叫んでいるもの」

「なにっ夏希が!？」

次の瞬間には舞桜は人混みを掻き分けてコンビニの中に飛び込もうとした。

だが、入り口からすぐ入ったところで犯人は夏希を人質にしていた。

「近づくんじゃねえ!」

犯人の男は目を血走らせ、夏希の首に包丁を突き付けている。
「助けて舞桜ちゃん！」

涙目で叫んだ夏希。

雷がどこかに落ちた。

大雨の中で全身を濡らしながら舞桜は犯人を睨み付ける。

「彼女を放せ。ほかに要求はしない」

犯人は怒ったようすで包丁を振り回した。

「要求だと？　なんでてめえが俺に要求してるんだよ！」

「ならば貴様の要求も聞こう。これならば不服あるまい？」

「お前なんか話して何になるんだよ、早く話のわかる奴連れて来い！」

犯人は舞桜のことを知らないと見える。もしくは気付いていないのだろうか？

舞桜は雨に濡れた前髪を掻き上げた。

「話ならばこの私で十分だ」

「なにい、小娘の分際で俺のことバカにしてんのかッ!？」

「話ならばこの天道舞桜が聞いてやると言っているのだ」

「……なっ（天道って……まさか）」

顔は知らなくても名前は知っていたらしい。

雨に濡れた桜色の髪。その髪は一目見れば忘れない。見たことのない者でも、その得意な髪のことには聞いたことがあるだろう。

舞桜の正体を理解した犯人は大声をあげる。

「こ、この都市を造ったっつー天道舞桜か！」

「そうだ、だからこそこの都市で起きた事件は見過ごせぬ。私の婚約者が人質となっていていれば尚のこと許せぬ」

「婚約者だど!？」

犯人は度肝を抜かれた。

けど、夏希はボソツと、

「向こうが勝手に言ってるだけですから（女の子同士なのに）」

一方的な舞桜の求婚であっても、舞桜の大事な人ということには変わりないだろう。

犯人は思う。

「（よりによって……でも待てよ、逆にツイてるんじゃないか。人質を上手く使えばここから上手く逃げるのが……大金も手に入れられるんじゃない?）」

雨だというのに、コンビニの周りには次々と人が集まってくる。そして、ようやく巡回中だった市営警官のパトカーが到着した。

二人一組の警官の一方が現場の立ち入れ規制をして、もう一方は犯人の様子を窺おうとして舞桜に気付いた。

「うおっ天道!」

驚きのあまり思わず呼び捨て。

慌てて警官は取り直した。

「天道さん、危ないですから犯人から離れてあとは我々に任せてください!」

「断る!」

即答。

舞桜の性格から考えて想定内の解答だ。

これから警官が続々と集まってくるだろうが、舞桜には関係のないことだ。今は目の前にいる犯人と夏希以外のことは無いに等しい。

舞桜は改めて尋ねる。

「要求はなんだ？」

犯人はツバを飲み込んだ。

「……金を用意しろ」

「いくらでもくれてやる」

「じゃあ一〇〇万用意しろ！」

「たったの一〇〇万ドルでいいのか？」

「ドルじゃねえよ円だよ！」

舞桜シヨック！

あまりの驚きに舞桜はやつと思いで声を絞り出す。

「ま、まさか一束でいいとは信じられん。夏希の命は金には換えられんが、その額は安すぎて交渉にもならんな！」

「はっ、はっ」

加害者と被害者が同時に『は？』つとなった。

思わず夏希も素に戻ってしまった。

「安すぎるとかさこういう問題じゃなくて、助けてもらえるならあたし別に構わないんだけどお？」

「夏希はそれでいいのか？ 安く買ったたかれて不満ではないのか！ 安い女だと思われていいのかっ！」

「安い女って意味が違うと思うんだけど」

「とにかくその額では交渉もはじめられん」

「なんだか犯人と舞桜の立場が逆転。」

「犯人は慌てて金額の提示をする。」

「一〇〇万ドルっていくらだよ……一億くらいか、じゃあ一億でどうだ！」

「先ほどよりはマシだが、それでも決して多いとは言えん。お前の思う大金とはその程度か？」

「じゃあ一兆！（なんて出せるわけないだろうな）」

「仕方あるまい、貴様の基準がその程度ならば、最低取引価格は一兆からはじめなければならんな」

「へ？（まさか出せるとは思わなかった）」

「世界的大グループの孫娘を少し見くびっていたようだ。」

「さらに舞桜は、」

「ではさっそく商談の準備をはじめよう。場所は近くの料亭で良いな？」

「なんか別の交渉をする雰囲気なんですけど？」

「すっかり犯人は舞桜のペースに呑み込まれそうになっていたが、ここでハツとして我に返った。」

「俺のことおちよくってんのか！ 料亭ってなんだバカか！」

「ならばホテルにするか？」

「そーゆー問題じゃねえよバカ女！ 俺は犯人なんだぞ、人質を取ってんだぞ？」

「だから金は出すと言っているだろう。ほかにも要求があるの

か？」

「俺は犯人なんだから警察の手が届かない場所に逃亡したいんだよ、料亭なんか行つてどうすんだよ！」

「ふむ、ならば乗り物を用意しよう」

「そうだ、なんか用意しろよ」

「戦闘ヘリなどオススメだぞ、追ってくる者は撃破できる。そうだな、逃亡先は国外にある無人島を提供しよう」

「……………」

ここまで来ると嘩然としてしまって犯人は何も言えなくなりました。

言葉の詰まる犯人を放置プレイして、舞桜は勝手に話を進めようとしていた。

「交渉するにしても何にしても、そこに引きこもって困る。ここは庶民感覚に合わせてファミレスで話し合おうではないか？」

「引きこもりじゃねえよ、立てこもってんだよ！ 犯人がのんきにファミレスなんて行くかバカ！」

「引きこもりも立てこもりもどちらも同じだろう。人の話も口々に聞かず、塞ぎ込んでいるのだから」

「違げえーよ！」

このときすでに人質であるハズの夏希は蚊帳の外。

「（なんか舞桜ちゃんすこい……ここまで話が噛み合わないなんて天才的）」

犯人は髪の毛を掻き乱した。

「チクシヨ、こうなったら人質と一緒に死んでやる。付いてくるなよ！」

違った意味で追い詰められた犯人は夏希を連れて店の奥へと引きこもってしまった。

舞桜は声を荒げる。

「しまった、連続引きこもり殺人事件に発展してしまった！」「すぐに舞桜は店内に乗り込んだ。

犯人は夏希を人質に取ったまま後ろ歩きでじりじりと後退していく。

「近づくなよ、人質を殺すぞ！」

舞桜は冷静に、

「本当に人質を殺してしまつては逃げられんぞ？ 貴様が人質を殺す可能性があるのは、逃げられないと思つて自暴自棄になつたときだろう。したがつて、ここは殺すではなく、人質の爪を剥ぐぞくらいにしておくべきだと提案する」

すかさず夏希が、

「ヤダし！ なに提案とか言つてるの！ あたしのこと助ける気があるの!？」

「あるに決まってるだろう。死人と結婚する気など毛頭ないぞ？」

「もうわけわかんない！」

わけわかんないのは犯人も同じだ。

「てめえら黙れよ！ ちよつとでいいから俺に考える時間をくれよ！」

「三分やろう」

完全に主導権は舞桜様。

コンビ二周りにはすでに何台ものパトカーが到着し、カラーテープによって立ち入り制限がされていた。現場よりも大変なのは署にある対策本部だろう。だって外から見たら舞桜も人質のようなものだ。

そんなことなどつゆ知らず。知っていてもお構いなしだろうが、舞桜は三分が経ったことを告げる。

「時間だ、交渉を再開しよう」

「もうお前となんか交渉しねえよ、俺の要求はほかの奴と交渉することだよ！」

「それはできん」

「お前に断る権利なんかねえーんだよ。こつちには人質がいるんだぞ！」

「だが断る」

休憩タイム入れても結局同じ。

夏希はため息を吐いた。

「もういいよ、誰でもいいからあたしのこと助けてよ。お腹空いたし、疲れたし、眠いし（あ、そう言えばピンクさんどうしたんだろ。今もいるのかな、ケガとか平気だったのかな？）いろいろな考えているうちに夏希はあることを思い立った。

「（なんか自力で逃げられるような気がしてきた。犯人さんも舞桜ちゃんにばかり気を取られてるみたいだし。せーっので行こう、せーっのー！）」

ガブツ！

夏希は自分の首に回されていた犯人の腕を噛んだ。

「イタツ！」

犯人がひるんだところで一気に逃げ出した！

が、すぐに犯人の手が伸びる！

「待て殺すぞ！」

テンパっている犯人は包丁を持っていて手を夏希に伸ばした。

「うっ！」

犯人の小さなうめき声。

包丁が音とを立てて床に落ちた。

犯人は腹を押さえて少しよろめいたかと思うと、泡を口から

吐いて気絶してしまった。

舞桜の一言。

「ふむ、食中毒だな」

それにしても突然過ぎるし気を失うなんて？

夏希はわかっていた。

「(たぶんピンクさんが助けてくれたんだ) ありがとうござい
ます」

とても小さな声で夏希は囁いた。

夏希の耳元で微かな声が聞こえるような気がする。

「舞桜様は人の心を理解しようとしていないわけではない。人の心が理解できない不自由な人なのだ。それをわかってあげて欲しい」

少し夏希は瞳を丸くした。

「(いつも傍にいるから全部見られてるんだ。あたしのほうから舞桜ちゃんと仲直りしてあげてってことかな)」

深呼吸をして夏希が気を休めた瞬間、お腹が『ぐう』と鳴いた。

「あ、お腹空いたかも」

「ではなにか食べに行こう」

「ポテト食べたい」

「ではさっそく北海道からジャガイモを空輸して」

舞桜の言葉を遮る夏希。

「じゃなくて、ツク行きたい」

「夏希の好きなどころならどこでも行くぞ。すぐに貸し切りの手配を」

「しなくていいから！ これからもっと舞桜ちゃんと仲良くなりたいから、あたし舞桜ちゃんの生活にも合わせる努力するから、舞桜ちゃんもあたしの生活に合わせてよね？」

「つまりそれは結婚生活におけるルール作りの話だな？」

「……もういいや(あたしが頑張ろう)」

夏希はため息を吐きながら歩き出した。

気付くと舞桜が横を歩いている。

また夏希のお腹が『ぐう』と鳴いた。

「あ、やっぱりドーナツ食べたいかもしれない。そう言えばこの町にミ ドってないよね？」

「スドとはなんだ？」

「ドーナツを売ってるチェーン店」

「ふむ、では今週中には誘致しよう」

夏希は『別にそんなことしなくてもいいから』とも思ったが、

「ま、別にそれはいつか、ねっ？」

笑顔を投げかける夏希を見て舞桜は不思議そうな顔をしたが、すぐに笑顔を返したのだった。

第5話 エクストリーム魔王転生！

「では、今日の会議をはじめる」

舞桜の言葉からはじえまる生徒会の会議。

メンバーは夏希、菊乃、雪弥、会計は欠員扱いのままだ。ちなみに顧問のベルは自分が話したいことがあるときだけやって来ては酒を飲む。

そんな会議の場へ乱入してくるバカデカイ声。

「ちよつと待ったーッ！」

それを見た夏希が声をあげる。

「ミイラ男！」

部屋に入ってきたのは全身を包帯でグルグルしちゃって、松葉杖を付いているたぶん男。コスプレにしては痛々しいが、ケガにしてはウケ狙いと思えない。

きよとんする一同に男は名乗りをあげた。

「オレ様だよ、霸道ハルキに決まってるだろ！」

決まってるとか言われても困る。

見た目についての話題は触れたらケガすると思う？

しかし、ここは夏希が果敢にも質問を投げかける。

「どうしたの……そのケガ？（コス？）」

「聞いて驚くな、空から振ってきたバカに当たったんだよ、バカ！」

「空から？」

「そうだよ悪いかよ。オレ様がバイトでケルちゃん散歩してたら、いきなりマンションの上から男が降ってきてオレ様にぶつかつたんだよ。あれは絶対にオレ様の命を狙つた人間爆撃テロだ。なぜってオレ様は生死を彷徨う重傷を負つたつてのによ、あいつは無傷だつたんだぜ、ありえるか？」

雪弥がボンと手を叩いた。

「そう言えばニユースでやっていたね。あれ覇道のことだつたんだ。なんでも自殺しようとした男がマンションから飛び降りて、下を歩いていた学生に衝突して、男のほうは奇跡的に無傷だつたんだけど、学生のほうは重体で、命が助かつても病院での生活を長らく送ることに……なるはずだつたんだけど、なんでここに？」

「調理実習があるのに休むバカがどこにいったよ」

そんな理由で？

まあ、ハルキにとっては死活問題なのだろう。

しかし、もっと大事な用事がハルキにはあつたのだ。

「つーか、ゴリ子がいなくなつたつて本当かよ？　なんで教えてくれなかつたんだよ！」

「教える必用もあるまい」

と、バツサリ舞桜様。

「あるだろ！　オレ様に教えないで誰に教えるんだよ。ゴリ子がいなくなつたら、繰り上げでオレ様が生徒会だろうが。三年間学費タダを逃してたまるかーッ！」

ミイラ男は見た目の割りにハイテンションだが、舞桜のほうは冷め切った態度で応じる。

「我が学園の授業料は公立より安いぞ。この場所は海に浮かんでいるため、多くの者は居住しなくては学園に通えんだろう。だから学生にいる家庭には住居手当を出しているぞ？」

「そんなこと知ってるわボケ！ だからこの学園に必至で入学したんだよ。でも生活苦しいから学費タダにして欲しいだよばか！」

ほかにも理由として、海に浮かぶこの場所が借金取りから逃げて隠れるにはちょうどいいというものもあった。

菊乃がボソツと、

「こんな貧乏に会計なんて任せられないわ」

すかさずハルキの反論。

「貧乏だから金の大切さがわかるんだろうが！」

雪弥は首を横に振った。

「霸道には任せられないよ。きっと横領するからさ」

再びハルキの反論。

「……ギクツ、し、しねーよ！」

思いつきり『ギクツ』って言っちゃってるし、動揺しすぎ。

だが、ここで引き下がるわけにはいかない。ハルキが舞桜に詰め寄ろうとしたとき、どこかでケータイが鳴った。

すばやくケータイに出た舞桜。

「私だが？ ふむ……ロケツト花火か……ベルには連絡したのか？ そうか、ならば仕方あるまい、私が直に会って話してこ

よう」

舞桜が席を立った。

「すまんが私用で席を外させてもらう。代理は夏希に任せる」

「えっ、あたし無理だし」

「ならば今日の会議は延期だ。それでよかろう？」

「だったらあたし頑張る（集まってくれたみんなに悪いし）
颯爽と部屋を出て行ってしまった舞桜。

残された夏希はとりあえずジュースを一口飲んでから、
「え〜っと、なにすればいいの？」

この生徒会は完全に舞桜主導で動いているので、舞桜がいな
いとぶつちゃけ何していいのかわからないのだ。

そこへハルキが口を挟んでくる。

「おいおい、オレ様を生徒会に入れるって話はどうなんだ
よ？」

夏希は菊乃と雪弥の顔を見た。

「どうしたらいいと思う？」

「岸さんが決めればいいわ」

「僕もそれでいいよ。岸が決めたなら天道も文句ないだろ
う？」

なんだか責任を押し付けられた気が……。

夏希を包帯の奥からじーっと見つめるハルキ。無言のプレッ
シャーがヒシヒシと伝わってくる。

悩む夏希。

「（だってもともとゴリ子さんがいなければ入れてたわけだし。

はじめっからゴリ子さんを入れるのはおかしい話だったし、ゴリ子さんが入っちゃって、霸道くんかわいそうだなあと思ったのは事実だけど……よし、決めた。これからよろしくね、霸道くん」

「マジかつ、やつぐわっ！」

急に動いたもんだからケガが悪化。奇声を発した。ご臨終です霸道ハルキ。

「自業自得ね」

と菊乃が呟いた。

生徒会会議も特にやることなく解散。

夏希は下校しようと廊下を歩いていたのだが、急にトイレに行きたくなってしまった。

放課後のトイレはシーンとしていた。

学園のトイレは清潔感に溢れ、高級店のリッチなトイレを思わせる作りになっているが、あんまり夏希は独りで来たいとは思わなかった。

なぜなら、まだ開校間もないというのに、学園七不思議『トイレ編』が噂になっているのだ。ちなみにまだ七つ全部があるわけではないらしい。

とりあえず、生徒たちの間では、トイレで起こる怪奇現象が噂になっているのだ。

「(こんな綺麗なトイレにオバケなんか出るわけないよね)」
自分自身に言い聞かせる夏希だったが……。

「ううっ、ううっ……うっ……うう……」

うめき声が聞こえてきた。

恐怖で身を強張らせた夏希はその場から動けなくなった。

「うう……今日も……ない……」

苦しそうな女の声だ。

なにが『ない』のだろうか？

ここで夏希はとある怖い話を思い出してしまった。

それはこんな話である。

とある学校で、とある生徒が、とあるトイレに入った。

ぶりぶりしてお尻を拭こうとすると、

「オーマイガット！」

紙がない。

すると、とある声が聞こえてきた。

「赤い紙が欲しいか？ 青い紙が欲しいか？」

なんかよくわかんないからテキトーに「赤」とか言っちゃっ

たのが最期。

大量出血で生徒死亡。

後日、ほかのとある生徒がトイレに入った。

すると同じ声が聞こえてきた。

「赤が欲しいか？ 青が欲しいか？」

先人の教訓からこの生徒は「青」と答えたわけだが 残

念！

次の瞬間、体から血を全部抜かれちゃって死亡。

つまり、この話の教訓とは、うんちしてお尻拭くのは動物の

中で人間くらいなもんだよ、っと。尻なんて拭かなくても生きていけるんだ。ということなのである。

夏希が固まっていると、しばらくして『ジャ〜ツ』という水の流れる音がした。

それを聞いた夏希はさらに凍り付いた。

音が聞こえたトイレには『故障中』の張り紙が貼ってあったのだ。つまり開かずのトイレということになる。

人間というのは怖いモノを目の当たりにすると、目が離せなくなったりするものだ。

「(逃げようとして後ろを向いた瞬間、殺されるってことも…怖ひい〜)」

そうだ、森でクマに出遭ったときの対処法も同じで、相手から目を離さずに後退るのが正しい。基本的に猛獣と『こんにちわ』してしまったら、眼を離さないのが一番なのだ。

まあ、相手が一匹じゃなくて、何匹もいたら眼なんて見えないから死^{アウト}だけどねっ

何を思ったのか夏希は果敢にも恐怖と立ち向かった。

そろりそろりと張り紙のある個室に近づく。

一番目の個室、二番目の個室を通り越し、三番目の個室の前で止まる。

ノックをしようとして、やっぱり手を止めた。

「(バレたら殺されるかも)」

なのでそーっと息を潜めながら、しゃがんでドアの下にある隙間から中を覗いた。

……足がない。

しかしまだトイレのタンクに水を溜める音がしている。

トイレは洋室である。便器に足を乗せている可能性だって捨てきれない。

夏希は意を決してドアをノックした　瞬間！

「開いちゃった」

ノックの反動でスーツとドアが開いてしまった。

しかも中には誰もいない。

謎の女のうめき声。流れたトイレの水。誰もいない個室。

まさにイリュージョンだ！

謎の女、トイレからの救急脱出スペシャル！

一気に血の気の引いた夏希。

だったら最初から見なきゃいいのに……。

夏希はトイレから爆走しようとしたが思いとどまった。なぜ

ならここで逃げ出したら、超常現象を認めることになってしま
うからだ！

「トリックがあるに決まってる！」

目の前でどんなモノを見ても『トリックだ！』と言い張れば
心強い。精神状態も保たれてパニックにならずに済む。すばら
しい魔法の言葉なのだ！

こうなったら徹底的にやるしかない。絶対にタネと仕掛けを
見つけ出さねばならない。なぜならこれはトリックなのだから、
トリックでなければならいのだから。

意地なつた夏希は個室をくまなく探し回る。

便器の中、タンクの中、女の子のトイレには必ず置いてある
ブラックボックス。

「ただ何も見つからない！
いや、そんなハズはないのだ……なぜならトリックなのだか
ら。」

どこかに、どこかに必ずやトリックがあるのだ！
夏希はとりあえずトイレの水を流してみた。

大量の水が渦を巻いて便器の中に飲み込まれていく。
やっぱりなにも起きない！

でもここでめげる夏希ではないのだ！

まだ万策が尽きたわけではない。今流した水は『大』だ。ま
だ『小』が残っているではないか！

というわけで、水を流そうとしたのだが 水がでない。

「あれえ？」

不思議に思いながら、なんとなく便器に腰をかけた瞬間、
床に穴が開いて便器ごと落ちた。

落ちたというのは正しくない。

それはまるでジェットコースターであった。

真っ暗な空間を便器に乗ってレールの上を爆走する。

右へ左へ激しく体が動く。

シートベルトなんてありません！

ガクン！

急停車して夏希の体が前へ放り出された。

「いったい、いいし、スカートが……（トイレの水で濡れた）」

ヤナ感じだ。

夏希の目の前には扉があった。プレートが付いていて『ヒミツ』と書かれている。いかにも怪しい。

ほかに進む道もないのでとりあえず扉を開けてみた。

「なにここ？」

どこにでもありそうなマンションの一室。今立っているのが玄関。廊下が奥の部屋まで伸びている。

とりあえずクツを脱いで上がってみる。

なにやら奥の部屋から話し声が聞こえる。

そつと部屋の中を覗いてみると。

「あ、舞桜ちゃんと鈴鳴先生」
だった。

リビングで寛ぐ二人の姿。美味しそうなケーキまである。

舞桜は特に驚いたよ様子もなく、

「どうしたのだこんなどころにまで？」

「どうしたって言われても……」

困る。

ベルはというと、少し困った表情をしていた。

「あらあん、バレちゃったのねえん、アタクシのシークレットハウス。トイレのトリックのよくわかったわね」

ということとは、トイレで聞こえたあの女の声も？

「あのうめき声って鈴鳴先生だったんですか？」

「うめき声？」

「トイレの中から聞こえたんですけど」

「ああ、トウデイも出なかったのよね、ウンチちゃん。便秘でお腹がパンパンに腫れちゃって、アタクシのナイスバディが台無しだわぁ〜ん」

「そうですねか……。別にあの場所のトイレじゃなくてここですれば？（変なウワサとかにならないのに）」

「おほほほ、設計ミスでトイレ作るの忘れちゃったのよおん」

話を聞いて夏希はドツと疲れた。なんだかいろいろ怖い思いして損した気分だ。

ソファを進められた夏希もちょことんと座る。気付けば目の前のローテーブルに紅茶とケーキが出されていた。いつも思うのだが、舞桜の刀にしても、ベルが出すアイテムしても、どうやって持ち歩いているのだろうか？

そう言えば、舞桜はベルに用事があるとかって話だったような気がする。大切な話のようだったのだが……。どう見ても困らんです。

しかし、あえて夏希はここで尋ねてみる。

「ここでなにしてたんですか？」

ベルは舞桜と顔を見合わせ、頷いた舞桜が口を開いた。

「私が開発を命じた月面探査用のロケットが打ち上げ直後に爆破されたのだ。実に見事なロケット花火として晴天の空に輝いたらしい。そして、乗員一名の命が失われてしまったのだ」

事故ではなく爆破とは穏やかではない。しかも死傷者まで出してしまうとは。

さらに舞桜が補足。

「加えて言うならば、死亡した乗員というのは夏希を人質にしたコンビニ引きこもり犯だ。遠くに逃がしてくれとの約束だったのでな、望みを叶えてやるうと思っただが、残念だ」

逃がすというかスケールの大きな島流し。

さらに夏希は質問を投げかける。

「爆破つてことは犯人がいるんだよね？（舞桜ちゃんのいつもの妄想じゃなければ）」

「うむ、私は光の勇者説を押ししているのだが、ベルは違う見解を持っていてらしい」

今日はワインのベルに視線が注がれる。

「アタクシはUSAか宇宙人の仕業だと思ってるのよねえん」

「USAつてアメ」

「それ以上言っちゃダメよおん、ライフを狙われたくないでしよう？」

仕切り直して夏希は尋ねる。

「どうしてUSAの仕業だと思ってるんですか？」

「だって月面にほかの国が着陸なんてされたら、チヨコレート計画がウソだったってバレルじゃないの」

「宇宙人っていうのは？」

「ムーンにはウサ耳宇宙人の前線基地があるのよおん。ロケットがよく花火になるのはほとんど彼らの仕業ねえん」

ふん。なんかリアクションに困る話だ。

落ち着こうと思って夏希が紅茶を噴くんだ瞬間、けたたまし

いサイレンが響いた。いきなりの出来事に夏希の口からプフォ
ーツした紅茶。

「な、なにっ!？」

どっかに仕掛けられたスピーカーから合成音の女性アナウン
スが流れる。

《アトランティス上空に謎の飛行物体が接近中。繰り返し、
アトランティス上空に》

すぐにベルがりモコンでテレビの電源を入れた。

画面に映し出されるバラエティ番組。

それを見て大笑いするベル。

「きゃははは、お腹がお腹がよじれる……ウンチちゃん出る
かも」

そう言つてベルが立ち上がるうとした瞬間、建物ごと体が大
きく揺れた。

《警報モード発令、警報モード発令》

床に手をついて倒れたベルがりモコンに手を伸ばした。

「お笑い番組なんて観てる場合じゃなかったわ」

チャンネルがすぐに切り替わった。

真っ白な 球体 の形をした飛行物体が空に浮かんでいた。

球の中に小さな球面のパーツがあり、それはまるで一つ目の怪
物のようにも見える。

謎の飛行物体の中心にいくつもの稲妻が走ったように見えた
瞬間、テレビ画面が真っ白になった。

遅れて建物が再び大きく揺れた。

《バリアシステムの出力を四〇パーセントまで上昇させます。アトランティス全域の電力供給が一〇パーセント低下します》

夏希はなにがなんだかわからなかった。

「なにが起きたの!？」

「ふむ、敵襲だな」

いつも通り淡々と冷静な舞桜様。

テレビが光りベルが叫ぶ。

「次が来るわよ！」

これまでより大きな揺れが襲った。

《バリアシステムの出力を五〇パーセントまで上昇させます。

アトランティス全域の》

とりあえず夏希は舞桜の腕に抱きついた。

「ねえ、これって攻撃受けてるんだよね。大丈夫なの？（てゆか、どういう状況なの!?!）」

「さてな、どう思うベル？」

舞桜は夏希の質問をそのままベルに渡した。

「アトランティス全体はアタクシの開発した時空間弾性反射バリアで守られているわ。出力八〇パーセントを越えるとほかのシステムがダウンしてしまうのだけれど、この調子なら大丈夫じゃないかしら？（ああー、やっぱり魔導システムの開発を急ぐべきだったわ。電気なんかじゃすぐにエネルギー不足になっちゃう）」

《敵の飛行体から超高エネルギーを検出。バリアシステムの出力を七五パーセントまで上昇させます》

「あ、やっぱりダメかもあん」
ベルがおちやらけて言った瞬間、部屋は閃光に包まれて激しい揺れが襲った。

「それでは臨時会議をはじめる」

舞桜の声ではじまった生徒会臨時会議。

「皆も知つての通り、謎の飛翔体によってアトランティスは攻撃を受けた。現在は敵の攻撃も収まり小康状態であるが、臨戦態勢であること変わりない。今後、夜間の敵襲に備えて防衛態勢の強化をしようと思う」

『はい』と夏希が手をあげた。

「これって生徒会の会議だよねえ？ あたしたち学生なのに、なんで敵をどうするかみたいな話をしなきゃいけないの？」

「私がなぜこの学園を作ったと思っっているのだ。世界の敵と戦うためではないか！」

「えっ？（またよくわかんないこと言い出した）」

「私は近い将来、この世界に君臨する魔王だ。それまでの間、世界の治安を守り、征服者からの侵略行為を防がねばならん。

この学園はそれらの敵と戦う素質のある者を見だし、育成し、魔王軍の戦力とするのが目的なのだ」

へえ、そーなんだー。

ここは雪弥が冷静に対処する。

「天道はこの都市の実権をすべて握っているけれど、君を除いた僕らはただの学生でしかないんだよ。君は僕らとではなく、

ほかのもつと適切な人たちと会議をするべきじゃないかな？」

「君は生徒会というものをわかっておらんようだな。我ら生徒会とはこの都市の最高機関であり、すべての実権を握っているのだよ。ここで決められた内容を下の機関に通達し、私営軍を動かすこともできる」

普通では負わないような重責をこの生徒会は担われているようだ。

つまりここにいる五人のメンバーは、この都市で五本の指に入るエライ人ということになる。

「(あたしいつの間にそんな立場になってたんだろ) あたしそんな仕事できないんだけどお」

弱気というか、普通の反応を見せる夏希に舞桜がビシツと。

「そんなことはない。ここにいる全員はエクストリーム生徒会選挙を勝ち抜いた猛者なのだ。選ばれし戦士なのだよ！ ハルキを除いてはな」

「オレ様を除くなよ！」

ハルキは怒濤の勢いで立ち上がった。驚異の回復能力なのか、いつの間にか包帯がなくなっている(きつとコメディの住人仕様なのだ)。

そんなハルキに冷たい視線を向ける舞桜。

「君は補欠だ。それにほかの者とは違い、なんの取り柄もないだろう？」

「取り柄ぐらいあるに決まってるだろ。ハングリー精神でオレ様の右に出る者はいねえ。水だけで一週間生き延びたことだっ

てあるんだぞ！」

「そんなものただのサバイバルに過ぎん」

「じゃあ、こいつらにどんな取り柄があるっつーんだよ！」

ハルキに視線を向けられた三人の中で、夏希だけが慌てて手をパタパタさせて否定した。

「あたし普通だからなにもないから！」

すかさず舞桜がフォロー。

「夏希は私の婚約者だから傍にいればいいのだ」

すかさずハルキのツツコミ。

「そんなのズルイだろ、実力もねえ奴がなんで実権なんて握ってんだよ！」

なんだか夏希ちゃん気まずい感じ。

次にハルキは矛先を菊乃に向けようと……したのをやめて、雪弥をビシツと指さした。

「こいつだたのイケメンだろ！」

「そうだね、僕は取り柄と言えるモノは持っていないかもしれないね」

あつさりと言った雪弥に舞桜は静かに視線を向けた。

「彼は強いぞハルキ。お前が○○人束になっても勝てんだろ」

それを聞いて雪弥が笑う。

「あはは、やだなあ、買いかぶりすぎだよ。僕はただの一般人さ」

「ふむ、能ある鷹は爪を隠すとはよく言ったものだな」

それ以上、舞桜はなにも言わず。それ以上、雪弥は口を開かなかった。

微妙な空気が二人の間に流れたのを感じたのか、ハルキもブスツとしながら黙ってしまった。

夏希がとりあえず口を開く。

「で、舞桜ちゃんは結局なにがしたいの？」

「うむ、未だ敵の正体や目的がわかっておらん。これでは詳細な作戦は立てられん。そこで敵地に潜入して情報収集をしようと思う」

「オレ様に任せる！」

張り切ってハルキが手をあげた。

「オレ様以外に適任はいない。なぜならオレ様は正義の味方、勇者だからな。敵地に乗り込んで一気に一網打尽してやるぜ！」

菊乃がボソツと。

「袋叩きにされたあと、海に投げ捨てられて鮫の餌になるのが落ちね」

「オレ様じゃ不満なのかよ！」

「いいえ、不満というより無謀なことをする馬鹿だと思っているだけよ、そうね、死ねば治るかも知れないわね、馬鹿」

「ばかじゃねえよバーカ！」

あきらかにバカです、ごちそうさま。

舞桜はずっと雪弥に視線を向けていた。それを感じ取ったのか雪弥は、

「じゃあ、僕が行こうか？　それが僕の本業のようなものだし」

その横で少し瞳を丸くする夏希。

「(本業？) だいじょぶなの鷹山くん？」

「さあ、敵の正体がわからないからなんとも」

言葉だけ聞けば頼りないが、その表情は不敵に笑っているようにも見えた。

突然、菊乃が、

「わたしも行くわ」

名乗り出た。

しかし、雪弥は首を横に振った。

「僕一人で十分だよ。仕事は一人の方が楽なんだ」

ますます夏希は雪弥のことがわからなかった。

「(いったい鷹山くんって何者なんだろう?)」

本業とはいったいなにで、学生以外になにをしている人なのだろうか？

少なくとも断片的な言葉から普通のことではないことはわかる。

作戦や会議の最終的な決定権は舞桜にある。

「うむ、では潜入作戦は鷹山に一任しよう。残る我々は市民の安全確保、敵襲の備え、そして出撃の準備をする」

最後の言葉に驚いた夏希が声を荒げる。

「出撃って!？」

「敵を攻撃するために出動することに決まっております」

辞書的な言葉の意味を訊いているのではなくって。

「あたしも行くの？」

「案ずるな、私が守ってやる」

守るくらいなら最初から連れてくなくなって話である。

狐面の菊乃は表情が読み取れない。

ハルキは張り切っていた。

「よっしゃーついにオレ様が英雄となる日がやってきたぜ！」

このノリについていけない夏希はドツとため息を吐いた。

生徒会室のドアが開いて爆乳　もとい、ベルが飛び込んできた。

「グッドイブニング、エブリバディ！　そろそろアタクシの出

番かと思つて来てやったわよぉん！」

とりあえず呼んではいません。

ベルは白衣のポケットから割引券を……出すのをやめて、

馬券……でもなくて、

「あつたわ、コレコレ」

まずは小型通信機（発信器付き）、次に拳銃と実弾、手榴弾、プラスチック爆弾。

最後に胸の谷間から栄養ドリンクを出した。

「敵地に殴り込みするなら全部持って行きなさい、頑張るのユッキー！」

とは言われたものの、雪弥が手を伸ばしたのは通信機だけ。

「これだけで大丈夫です」

「そんなこと言わないでコレだけでも持って行きなさい」

と、雪弥の手に握らせたのはバナナ。

「おやつですか？」

思わず雪弥は尋ねてしまった。

「違うわよおん、お夜食に決まってるじゃないかい」

あんたがバナナ握って『夜食』とかいうと別の意味に聞こえます。

口元から垂れそうになったヨダレを拭きながら、ハルキがうらやましそうな顔をしていた。

「遠足にバナナ持たせてもらえるなんててめえ幸せもんだな！
(チクシヨール様もバナナ食べてえ)」

遠足じゃありません。

ベルは突然雪弥の腕に抱きついた。

「じゃ、アタクシと一緒に行きましょう」

どこにですか？

怪しい場所に連れ込まれるんですか？

さすがに雪弥もちよつと苦笑いをしている。

「あの……」

「とつくにユツキーが乗る戦闘ヘリと護衛の戦闘機は待機済みよおん。敵地はスカイの上だし、バレるの覚悟で近づくしかないわね。気休め程度に空間歪曲システムを搭載しただけ」

夏希が首を傾げた。

「空間歪曲システム？」

「まあシヨートに言えば、姿をルッキングできなくなるシステムね」

敵はいきなり攻撃を仕掛けてきたような相手。多大な危険が予想される。戦闘機で護衛なんて話を聞いて夏希は不安でいっぱいだった。

「だいじよぶだよね鷹山くん？」

「心配しなくて大丈夫だよ。それじゃ、僕はいろいろ準備もあるし、またねみんな」

爽やかな笑顔を残して雪弥はこの場を去った。ベルの爆乳を腕に押し付けられながら。

もうそこにはない彼の背中を見続ける狐面の少女。

長い夜がはじまる。

そんなわけで生徒会室にある大型ハイビジョンテレビ（地デジ対応にいつの間にか替えられた）で、雪弥のエクストリーム潜入作戦を見守ることになった。

テーブルにはお菓子が用意され、すでに酔っぱらっているベル。この人、あきらかに空気が読めてない。

ここぞとばかりにお菓子を口いっぱいに頬張り、ポケットにまで詰め込んでいるハルキ。こっちも空気が読めてない。

冷静な眼差しで画面を見る舞桜の横では夏希が不安げな表情をしている。

夏希はふと菊乃に目を配った。

微動だにせずじつと画面を見ているようだが、狐面の上からではその表情は見て取れない。何を考えているかもわからなかった。

「(……菊乃ちゃん)」

夏希の心配そうな心の声も、今は菊乃に届いていないのかも知れない。何の反応もせずただ菊乃は画面に顔を向けていた。

ベルが一升瓶を掲げた。

「そろそろスタートするみたいよおん！」

カメラの映像が滑走路に切り替わる。

飛び立っていく戦闘機部隊。

すでに空間歪曲システムを作動されているへりは画面に映らなかつた。

別の画面にカメラが切り替わる。

空に浮かぶ 球体 が長い眠りから覚めたように、何かが駆動する重低音をうならせた。その音は遠くカメラに設置してあるマイクまで届いた。

戦闘機が近づくとつれ、球体 の大きさが測り知れる。その大きさは、戦闘機を指先程度とするならば、球体 はバレーボールほど。あんなモノが空に浮かんでいるなど、到底信じられない巨大さであった。

球体 の正面にはあの凄まじい攻撃を放つ発射装置がある。戦闘機は迂回しながら 球体 に近づき、ミサイルを撃ち込んだ。

爆発音と共に 球体 から煙が上がった。だが、それはミサイルの硝煙に過ぎず、球体 はまったくの無傷に見えた。

「でしようねえん」

とベルが呟いた。

アトランティス全体を揺らすほどの威力を持つ兵器を装備した飛行体が、ミサイルごとときで落とせるわけがない。

空を駆ける戦闘機からの一斉攻撃がはじまった。

音は画面からは聞こえない。

機関砲から乱れ撃ちされる銃弾。

夜風に流れる煙。

球体 は黙したまま。

画面を通して観た映像は音もなく淡泊で、まるでどこか遠いところで行われている“嘘”のようであった。

本当に今、戦いは行われているのだろうか？

あの画面の向こうに人はいるのだろうか？

戦闘機に人は乗っているのだろうか？

画面からキーンという耳鳴りのような音がした。

「音……頭が痛い」

と夏希が呟いた次の瞬間だった。

画面が眼を開けられないほどの輝きを放った。

それはなんの前触れもなかった。

画面が正常に戻ったとき、映し出された映像は次々と戦闘機が墜落する場面であった。それはまるで急にエンジンが停止したかのような、煙も上げず爆発もせず、ただ海面に引きずり込まれるように墜ちていく。

舞桜が眉をひそめる。

「なにが起きた？」

誰も答える者はいない。

戦闘機が墜ちた。それだけが事実だった。

夏希が叫ぶ。

「鷹山くんは！」

次々と夏希はここにいた全員の顔を一人一人見ていった。

最後に見つめられたベルが口をゆっくりと開けた。

「あのへりはレーダーでは捉えられないし、通信がない限りこちらから探し出すことは不可能よ」

舞桜はスタンドマイクに向かって戦闘本部に命令を出す。

「すぐに救助艇を向かわせる。乗組員の救出及び戦闘機のサルベージ、生存者の確認を急げ。ただし、危険と判断したらすぐにその場を退却することを命じる」

それは生存者がいたとしても、危険と判断したら見捨てるということを意味していた。

急に菊乃が立ち上がり無言で足早に部屋を出て行った。

「菊乃ちゃん！」

夏希が手を伸ばしたときにはもういない。

敵を侮っていたわけではないが、一瞬にして戦闘機を墜落させる理不尽とも言える謎の攻撃は想定外であった。どんな攻撃であったのかわからぬ以上、不要に近づくことさえもできない。開けたばかりの一升瓶をベルは一滴も残らず飲み干した。

「おゝほほほほっ、やってくれるじゃなあゝい。超天才可学者のアタクシに喧嘩売ろうなんざ一〇〇万年早いつてことを思い知らせてやるわ。近づけないなら遠くから撃ち落とすのみ！」

ベルは舞桜からマイクを奪い取った。

「アンタアから聞いてるう？ アルティメットウェポンの準備すんのよ、この豚どもがッ、あーッ！」

結構酔ってます。

スピーカーから慌てた声が返ってくる。

《舞桜様の許可がなければ使用不可能です！》

舞桜はベルからマイクを奪い返した。

「許可する。最大出力で撃ち込んでやれ」

《イエッサー！》

ハルキはちよつと眼を輝かせていた。

「アルティメットウェポンって響きがカッコイイな！」

爆乳を揺らして仁王立ちするベルが自信満々に鼻息を荒くした。

「カッコイイだけじゃないわおん、太くて絶倫なのよおおおん

……うっぷ」

突然、背を向けたベルは白衣のポケットからバケツを取り出して、

「うげえええええっ……」

吐きやがった。

ゆらゆらしながらベルはバケツを持って部屋の外に。バケツ持ったままコケないように気をつけてねっ

芳しいかほりが残る部屋で平気でお菓子を頬張るハルキ。

「このチーズせんべえ上手いなあ。これも妹のために持つて帰るか」

チーズ臭……。

しばらくして何事もなかったようにベルが帰ってきた。

「お〜ほほほほっ、ビューティフルにアタクシ参上！」

酔いも覚めたのかお目々ぱっちり、手には火のついたタバコを持っている。

爆乳を揺らしながら歩き、マイクを手に取る。

「そろそろ準備できたわよね？」

《イエッサー！》

「カウントダウンしちやいなさあい！」

スピーカーから合成音が聞こえてきた。

《主要施設の電力が予備電源に切り替わります。アトランティス全域への電力供給の一時停止まで3、2、1》

この瞬間、アトランティス全域で大規模な停電が起きた。テレビ録画やお風呂に入っていた人は悲惨だ。

《魔電粒子包発射まで10秒前 5秒前、3、2、1、発射》

海上都市全体が激しく揺れた。

「きゃっ！」

夏希は舞桜にしがみついた。

テレビ画面に映し出された映像。

薄闇の夜を駆け抜ける巨大な光線。

それは流星のような輝きを放ちながら 球体 に衝突した。

画面は白に染まり、スピーカーから流れる耳を塞ぎたくなる

ほどのノイズ。

轟々という音が部屋中に木霊した。

突然鳴り響くサイレン。

《ザザザ……電力不足……ザザ……バリアシステム……10
パーセント……回避不能》

これまでにない激震がアトランティスを襲った。

ベルがパンツ丸出してズッコケた。

「なんなのよ！」

《敵はこちらの攻撃を反射。跳ね返された魔電粒子包発射が、
開発中工事中のアトランティス南南西を掠めました》

ベルは嬉しそうに笑った。

「掠っただけでこの威力。さすがアタクシが開発したウエポン
だわぁん！」

って、跳ね返されたら意味ないだろ。

テレビ画面を見ていた夏希が眼を丸くして“それ”を指さし
た。

「見て……あれ！」

それはあまりにも衝撃的だった。

球体 の全身にひび割れが走り、剥がれ落ちた殻が次々と
海へ落下する。中から現れた黒い皮膚。そして、金色の眼球が
ぎよろつと露わになった。

「あらぁん、カワイイ！ 一つ目怪獣だったのえん」
爆乳を揺らしてベルははしゃいだ。

ついでにこいつも。

「カッケー、怪獣だぜ怪獣!? うぉ〜燃えてきたぜ！」

勝手に闘志を燃やすハルキ。

怪物を見ても舞桜は冷静な表情を崩さなかった。

「生物だったのか……すると今目覚めたと言うことか？」

合成音のアナウンスが流れる。

《謎の飛行物体から生体反応を検出。生き物であることが確認されました。さらにこの生物から分離する生体反応を確認。画面拡大します》

黒いミミズが蠢くような怪物の皮膚から何かが次々と産み落とされている。

思わず夏希は、

「グロツ！（イカスミスパゲティ食べられなくなりそう）」

産み落とされたそれは球体で、生肉のような色をしており、中心には眼球が一つあった。まるで親を小さくした2Pカラーキャラだ。

突然、舞桜がこめかみを押さえて眼を瞑った。

「（なんだこの痛みは……？）」

頭の中でキーンと響く音。

何者かが夏希の耳元で囁く。

「間違いない、マガデスタの黒い眼だ」

ハルキが辺りを見渡す。

「誰かしゃべったか？」

慌てて夏希は取り繕う。

「えっ、気のせいじゃない？（今のきつとピンクさんだ……ピンクさんは何を知ってるんだろう）」

そんなことを考えていると、また声がした。

「部屋の外に出る」

言われたとおり、

「ちよつとトイレ」

夏希は部屋の外に飛び出した。すると、夏希の体がふつと持ち上げられた。

「え、ちよつと……」

「人の来ない場所まで移動する」

夏希はピンクシャドウに抱きかかえられて廊下を走っていた。人気のない教室に入り、夏希は下ろされた。

ピンクシャドウは窓辺に立ち、遠く空を眺めて重い口を静かに開いた。

「あれは マガデスタの黒い眼 という怪物だ」

「なんでそんな怪物が？ どうしてピンクさんがあれを知っているんですか？ わたしたち助かりますよね？ ピンクさんっていったい何者なんですか？」

怒濤の質問攻め炸裂！

「あれは暗黒集団マガデスタの魔術師たちが召喚した怪物だ。

それを私が封印した」

「封印したって、だってあそこにいるのは？」

「召喚が行われたのも、それを封印したのも、こことは違う世界の出来事。時間も空間も違う、君たちにとって物語の中に存在するような世界」

「違う世界って？（舞桜ちゃんの近くにいただけあって、言う

ことが似てる)」

《大量の敵が接近。バリアモード に切り替えます》
突然のアナウンス。

アトランティスの周りを覆うバリアに群がる怪物ども。

バリアにぶつかった怪物が次々と破裂していく。

ピンクシャドウが呟く。

「雑魚は防ぐことはできだろう。あれでいてベルフェゴールは天才だからな」

「(ベルフェゴール?)」

「しかし、黒い眼 が本気を出せば一夜でこの都市は壊滅する。ベルラーナの最期 を思い出すな……」

「どうすればいいんですか？ 前にも封印したんですよね？」

「まだ目覚めて間もない奴なら…… 舞桜様のことを頼んだぞ！」

「えっ!？」

ピンクシャドウは窓を開け外に飛び出した。

夏希は瞳を丸くする。

「あっ、飛んだ……」

なんとピンクシャドウは空中を浮遊して星のように高速で飛び去ってしまった。

なんだかよくわからなかったが、とにかく夏希は生徒会室に急いだ。

生徒会室に戻ると、なにやら様子がおかしかった。

畳の上で横になり苦しそうな顔をしている舞桜。

「どうしたの舞桜ちゃん!」

夏希はすぐに駆け寄って傍らに膝を付いた。

大量の汗を掻きながら舞桜はうなされていた。夏希の声にも反応せず、おそらくそこに夏希がいることさえもわかっていないだろう。

夏希はハルキ……には訊かずにベルに訊く。

「なにがあつたんですか?」

「アタクシの頭脳を持つてしても不明よ(可笑しいわねえん、いなつちの匂いがしない。なつちゃんとしてから帰つてきてない?)」

ベルも気付いているのか 存在に?

《緊急事態発生! バリアの一部が破壊された模様》

ついに敵に侵入を許したか!?

いや、違う。

《バリアは内部からの力によつて破壊された模様》

予想していなかつた事態にベルは啞然とした。

「中から……そんなカバな……(敵がすでに中に侵入していて手引き……そんなわけは……まさか!)」

《高エネルギーを感知しました。画面に映します》

テレビ画面に謎の飛行物体が映し出された。

まばゆく輝くそれは 黒い眼 に向かつて飛翔する。

夏希はすぐにわかつた。

「(ピンクさんだ)」

ベルもまた、

「(いっなっち……まさか舞桜を置いていくなんで)」

独りだけ仲間はずれ、

「なんだよアレ!? 新手の敵か味方か?」

ハルキは画面に釘付け。

黒い眼の眼にエネルギーが集中する。

夜が一瞬にして昼に転じる閃光。

黒い眼から放たれた光線を迎え撃つピンクシャドウの前に、巨大な魔法陣が盾として出現した。

テレビ画面がストロボを焚いたように光り、何度も何度も激しく点滅した。

あの「観覧規制」事件以降、アニメでは絶対にやってはいけない手法だ。

今ではすっかりとしたガイドラインに基づき、すっかりとしたアニメ製作が行われているのだ。

画面に釘付けだったハルキが急に吐き気と頭痛に襲われた。
「うええっ!」

テレビを見るときは部屋を明るくして離れて見よう

《緊急事態発生! 何者かがメインコンピュータに……きゃっ、ちよつと……ザザザザ》

夏希は「えっ?」という表情でベルを見た。

「人がしゃべってたんですか? てっきりあたしはコンピューターの声だよ」

「コンピューターの合成音よ。人工頭脳を搭載しているスーパーコンピューターだから疑似感情を持っているの なっ!」

突然の揺れでベルがバランスを崩して爆乳から夏希の顔にダイブ！

「ぼよよん

さらにそのまま揺れは続き、ベルは夏希の頭をぎゅっと抱きしめたもんだから、パイ圧で窒息死させられる寸前だった。

「ぐるぐー！」

「あらあんごめんなさい」

「ぼよよんとさせながらベルは後ろに下がった。

今の揺れも敵の攻撃だったのだろうか？

アナウンスが流れる。しかし、その声は今までとは似ても似つかぬ邪悪な男性ボイスだった。

《浮遊システム起動。これより学園はアトランティスから切り離され浮上する》

「はい？」

と夏希はベルを見つめた。

「あらあん、そのシステムはまだ開発中だったはずなのだけけど……誰かが完成させてくれたのね、ラッキー」

「浮遊ってどういうことですか、もしかして今空飛んでるんですかあーっ!？」

「オーイエス。この都市の電力を確保するために電気だけじゃ足りないから、魔導発電を取り入れる予定だったのよね。その副産物で浮遊システムの開発をしていたのだけけど……いったい誰が動かしたのかしらね！（笑）」

「なんだか雰囲気的に乗っ取られた気がするんですけどお」

「この学園は最強の要塞と言ってもいいものね。目を付けて乗っ取るなんてお目が高いわぁん」

「どうやら敵はすでに内部に侵入していたらしい。」

学園の外ではピンクシャドウと 黒い眼 が戦い続けている。

舞桜は未だ意識を朦朧とさせている。

ハルキは部屋の隅で気持ち悪そうにしている。

夏希が大声で叫ぶ。

「どうすればいいんですかぁっっ！」

「どうするもこうするも、誰かが学園の中枢に行つて、メインコンピューターをいじつてる誰かをどーにかこーにかしなきゃだわね」

「誰かつて誰ですか？」

「アタクシかアナタ。最初はグー、ジャンケンポン！」

突然のじゃんけんに思わず乗ってしまったグーを出した夏希ももちろんベルはパー。

「アタクシの勝ちね」

「だって最初はグーって言った！」

「つべこべ行つてないでさっさと行きなさいよ。場所はアタクシの部屋に入って、寢室のクローゼットの先に隠し通路があるから。舞桜のことならアタクシが責任を持って看ててあげるわよぉん」

「なんだか強引だが、夏希は仕方なく行くことにした。」

「部屋を出る前に夏希が振り返った。」

「ところで鈴鳴先生？」

「なあに？」

「さつきから変な英語混じりのしゃべり方あんまりしてませんよね？」

「そんなことナッシングよおん、おほほ」

「やつぱり演技なんですね。めんどくさいならやらなきゃいいのに……」

夏希はベルに反論させる前にさっさと部屋を出た。

ベルに言われたとおり、三番目のトイレ ジェットコースター
ベルの隠し部屋 クローゼットの先に隠し通路があった。

「なんであたしが……」（コンピュータってあたしよりも先生のほうが詳しいんじゃない？）

長い通路を抜けると、何も無い四角い部屋に出た。部屋の先には扉。その前には一人の少女。

「ここは誰も通さないわ」

狐面の少女はそう言った。

舞桜はパニックに陥ってしまった。

「どうして菊乃ちゃんが!？」

「……………」

「なんで、ねえ、どうして？」

「……………帰りなさい。そうすれば何も危害は加えない」

夏希は前にも後ろにも動けなかった。

なぜ菊乃がここにいるのか？

メインコンピュータが乗っ取られたのではないのか？

だとすれば……。

菊乃は腕を薙ぎ払った。するとカマイタチが巻き起こり、夏希の袖を掠めた。

「次は皮膚を切り裂くわよ。帰りなさい、死にたくなければ」

「なんで、わからないよ！」

「人は裏切る者なのよ」

「どうして……（菊乃ちゃんがここにいてるってことは）」

思考はすべて菊乃に読まれる。

「わたしの口からはつきり言つてあげる。わたしが学園の情報処理機構を乗っ取ったのよ。これで満足かしら？」

「満足じゃない！ だって、だったらどうしてそんなことしたの!？」

「どうでもいいじゃない、そんなこと……」

「よくないよ！」

夏希の視界が涙え滲む。

止らない涙を腕で拭いながら、夏希は一步一步前へ進んだ。

菊乃が後ずさりをする。

「来ないで！」

「……前と同じだね」

「来ないでって言ってるでしょう！」

邪悪な黒い風が吹き荒れ、夏希の制服を切り裂いた。破れていく制服。頬を掠めた風の刃が、一筋の紅い線を走らせた。

夏希の頬を滴り落ちる血の軌跡。

一瞬、凍り付いたように動かなくなった菊乃だったが、

「お願いだから死んで！」

叫びながら邪悪な黒い風を巻き起こした。

猛烈な風の中を夏希は全速力で走り菊乃に飛びかかった。

伸ばされた夏希の手。

傷だらけになっってしまった手は狐面を掴みながら菊乃の体を押し倒した。

狐面が虚しい音を立てて床に転がった。

二人して床に倒れ、上に乗った夏希に見つめられた菊乃は顔を横に逸らした。

夏希の涙が菊乃の頬に落ちた。

「泣いてるの……菊乃ちゃん？」

菊乃もまた泣いていた。

「だってこうするしかなかったのよ……貴女と彼の間には挟まれなかったしは……道を失った」

「どうして？」

「貴女は扉の先に進みなさい。わたしはここで待つ……次に出てくる人を待つ……だってわたしには選べないから」

「……わかった」

ゆっくりと夏希は立ち上がって、扉の前まで移動した。

そして、振り返る。

「あたしたち今でも友達だよね？」

「……貴女がそう思ってくれるなら」

「うん」

所々傷む体で夏希は重い扉を力一杯に開いたのだった。

部屋の中央で輝きを放つクリスタルの光。

蒼い海の中のような光に包まれるその場所で、目元だけを隠すマスカレードマスクの男が独りで佇んでいた。

「入ってこられるとは思ってなかったよ。魅神も変わってしまったものだよ、君のせいで」

顔は隠してもいともその声には聞き覚えがあった。

「鷹山くん!?（どうして、どういことなの……だって鷹山くんは……）」

「顔を隠していてもすぐにバレてしまったね。別にこれは正体を隠す物ではないからいいけどね。そう、俺は君の知っている鷹山雪弥　でも今は秘密結社C クリムソングロニクル の首領として、ホークアイと呼んで貰えると嬉しいな」

「なにがどうなってるかわからないよ!」

ホークアイはため息をも漏らした。

「理解力のない女だなあ。はじめからこの学園を乗っ取る気だつたんだよ。活動の拠点とするために要塞も欲しかったし、なによりこれが欲しかったんだ」

親指を立てて、自分の後ろにあるクリスタルを示した。その大きさはホークアイの身長よりもある巨大な物だった。

クリスタルの入った透明な筒にホークアイは手を触れた。

「これはね、マナクリスタルと言って純粋なエネルギー結晶なんだ。上手く使えれば世界だって滅ぼせると思うよ」

「いったい何をしようとしているの?」

「今言っただじゃないか、滅ぼすってさ」

邪悪な口元。

何を信じていいのかわからなくなる。

何が起きているのかさえわからなくなる。

「菊乃ちゃんもあなたの仲間だったの？」

「知りたいの？」

嫌な言い方だった。まるであざけるような物言い。

「教えて」

凜として夏希は答えた。

「違うよ、彼女は俺の正体もずっと知らなかった。ほんの少し前に全部打ち明けた、そして簡単に協力してくれたんだ」

夏希はほっとした反面、怒りがこみ上げてきた。

「酷い」

「酷い？」

同じ言葉を雪弥は聞き返した。

拳を強く握った夏希。

「人の心を弄ぶなんて酷いよ」

「それは酷い誤解だ。俺は魅神に優した覚えはあっても冷たくしたことはない。ましては裏切ったこともないよ。ただ彼女の力はずっと狙っていたけれどね」

「どうしてあなたみたいな人に……」

「それはきつと彼女が孤独だったから、優しさに飢えてたんだ」

「でも菊乃ちゃんは心が読めるんだから、あなたが自分を利用しようとしてるってわかってたはずなのに、どうして……」

「そこが重要なポイントだったんだ。彼女は俺の心が読めなかった。だから彼女は凄く驚いたと思うよ、もしかしたら人生ではじめての経験だったのかも知れないね。彼女は人を信用しない、きつと俺のことともそうだと思う。けど、見えないから俺だけが特別な存在になったんだろっね」

菊乃は人の心がすべて聴こえるわけではない。狐面でその力を抑制していることからわかるように、ホークアイがどのような方法を使ったかわからないが防ぐ手だてはあるのだ。

「今はあたしが菊乃ちゃんの傍にいる」

「だから彼女は弱くなってしまう。困るんだよね、そうなの。だからさ、できれば君に消えて欲しいと思ってる」

「イヤ」

「だったら俺の仲間になるかい？」

「それもイヤ」

「じゃあ、どうしたいんだい？」

「……わからない」

自分の取るべき行動がわからない。

できることなら。

「すべて元通りに、全部なかったことにして欲しい。大変だったけど、この学校ちょっとおかしいけど、みんなと一緒に生徒会できて楽しかった。だからね、ウソだって言つて欲しいの」
「世の中はそんな都合のいい物じゃないよ。俺は入学する前からすべてを乗っ取るつもりだったし、生徒会に入ったのも天道に近づくため。ほかにもいろんな生徒を観察しながら、そいつ

の持つてる能力や生まれなんかを調べて、自分の仲間にする奴とそうじゃない奴を分けてた。はじめからね、こうなる運命だったんだよ」

「今ならまだ引き返せるから」

「それは無理だね」

「どうして！ 今からでも学園を返して、それから……」

「外にいる魔獣は誰にも止められないよ」

最大の驚異はあの魔獣 黒い眼 である。なんとしても止めなくては、すべてが壊されてしまう。

「やつぱりあれもあなたの仕業なの？」

「まあね」

黒い眼 は首謀者であるホークアイの力を遙かに凌駕する存在だろう。

学園のシステムを乗っ取っただけなら、まだ引き返せたかも知れない。

「あの魔獣がこれから先も暴れば、多くの人が死んでいくだろうね。一人死に、また一人死に、そうする度に俺は滅び道を進んでいくんだ。進んでしまったが最期、引き返すことのできない一方通行の地獄道さ」

「今からでもいい、お願いだから止めて！」

「だから無理なんだよ。あれは俺の制御できる代物じゃない。本当に偶然だったんだよ、呼び出せたのは。あの魔獣がどこから来たのか、いつたいどんな存在なんか、なぜ召喚できてしまったのか……もしかしたら、引き寄せられたのかもしれない」

強い因果か何かに」

強い因果？

あの怪物を知るものはただ一人。

ピンクシャドウ、かの者は今も戦い続けているのだろうか？

ホークアイは一步前へ出た。

「で、結局君は何がしたい？」

「……………」

「戻ることはできないよ。とりあえず俺を殺しておくかい？」

「殺す理由なんてない！」

「客観的に見て俺は悪役だと思っただけ。悪役には正義の鉄槌が下されるんだ。まあ、それは物語の中だけで、残念ながら現実の世界は悪のほうが強けれど」

「学校を取り戻す！ それから外の怪物もどうにかする！ それから鷹山さんとゆっくり話し合いたい」

「あはははは、とんだ欲張りさんだ。まあいい、運命を変えられるなら立ち向かってくれればいいさ」

夏希は一步も踏み出さなかった。気持ちはもう決まった。けれど、どうしていいのかわからない。

メインコンピューターはどこだろう？

それより先にホークアイをどうにかしなければ邪魔されてしまう。

けれど、夏希は暴力による解決を望まず、望んだとしても行使する力を持ち合わせていない。

「君から来ないなら俺から行くけど？」

ホークアイの姿が消えたと思った瞬間、すでに夏希の首に二本の刀が突き付けられていた。

「俺はすぐにも君を殺せるんだ」

交差した刀はハサミの刃のように夏希の首を挟んだ位置にある。左右どちらにも動けず、上下にも体を動かせない。逃げるとしたら後ろだが、そんな猶予は与えてくれないだろう。

ホークアイは邪悪な口元で笑った。

「死にたいかい？」

「イヤ」

夏希の表情に怯えはなかった。

「ならどうしたい？」

「学校も取り戻すし、怪物もどうにかして、鷹山くんとも仲直りする」

「すぐに殺すにはもったないくらい強情だ。だからこうやって遊んであげてるんだけど、暇つぶしで　もう一人玩具が来た」

息を切らして部屋に入ってきた人影。

「彼女を放せ！」

その人物とは　。

「オレ様ただいま参上！」

全身血みどろの霸道ハルキだった。すでに瀕死状態。

ホークアイは刀を下ろして飛び退いた。

「すごい怪我だね、誰にやられたんだい？」

「うっせーな、なんか知らねえーけど魅神に殺されかけたんだよ」

夏希は心の中でそっと思っただ。

「(あたし以外の人には容赦ないんだ)」

ハルキは鼻血を袖で拭きながら夏希に近づいた。

「なんかよくわかんねえーけど、魅神とその変態マスクが悪くてこといいんだろ？」

夏希は首を横に振った。

「彼、変態マスクじゃないし、魅神さんは悪くない」

「なるほど、魅神はその変態マスクに洗脳されてんだな！」

「それもちよつと違うけど。魅神さんはどうしたの？」

「よくわかんねえーけど、いきなり洗脳が解けたみたいでさ、オレ様にお前を助けてやってくれとか言われて、とりあえずその場に残してきたけど？」

「そうなんだ」

ハルキを殺さずに通したと言うことは、なにか心境の変化でもあったのだろうか？

変態仮面　もとい、ホークアイに向かって夏希とハルキが対峙する。

ホークアイが一本の刀の切っ先をハルキに向けた。

「霸道ハルキ！　緋色の魔術師　その末裔の力見せてもらおう！」

「名前を知られてるなんてオレ様も有名人だな」
心の中で夏希がコッソリ。

「（霸道くん、本当に鷹山くんだったって気付いてないのかな？）」

うん、きつと気付いてないよバカだもん。

そして、バカが話を続ける。

「つーか 緋色の魔術師 ってなんだよ？」

その言葉にホークアイは刀を下ろしてしまった。

「知らないのかい？」

「知らないから訊いてんだろ、オレ様のことバカにすんなよバカ！」

「どうやら君は何の才能も受け継がなかったと見える（やはりアツピンの赤い本 を受け継いだのは本家のほうか）。まあいい、霸道の名を語るなら少しはできるだろう！」

俊足でホークアイは駆け、二刀流を振るった。

ガシッ！

ハルキは紙一重で一刀を真剣白羽取りで受けた。

しかし、刀は二振り。

ギシッ！

な、なんとハルキは刀を歯で挟んで受けた！？

「むういつふあふあ、ひひよふおふおふあんふあふあひふえふおひひ、ふふあふいふえふあひふあひふあぐーどう！」（日本語訳：昔、いとことチャンバラしてるときに、二人で編み出したんだ！）

別にどーでもいいエピソードだ。

ホークアイは足を蹴り上げた。

キン・タマ!

強烈な痛みでハルキは股間を押さえながら飛び上がった。

「いでーぢぬー!」

股間を押さえて床をゴロゴロ。

容赦ないホークアイの刀はハルキを串刺しにしようと振り下ろされる。

「霸道くん危ない!」

夏希の叫びを聞いて我に返ったハルキは、ゴロゴロしながら刀を避ける避ける。

「ぎゃつ、うえつ、うおつ、刺さったら死ぬだろー!」

「そのつもりでやっているよ」

「手加減しろよバーカ!」

「するわけないだ……ろつ!」

一気に振り下ろした刀が床に刺さった。

その隙に立ち上がったハルキに頭をもつ一振りの刀が掠めた。

よかつたね、ハルキくん散髪代が浮いたよ!

「うおーオレ様の髪の毛がーッ!」

まるでカツパみたい。

ハルキは床に落ちた髪の毛をかき集める。

「もつたないもつたない!」

「君を相手にするのが馬鹿らしく思えてきたよ。バイバイ」

髪の毛を拾っているハルキの背後からホークアイの刀が振り下ろされる。

夏希が叫ぶ。

「やめて！」

ホークアイの動きが急停止した。

千里眼　を持つはずの彼が今の今まで感知できなかった。

「……そこにいるのは誰だ！」

ホークアイが叫んだ。

長身のスラリとした影が長い髪を靡かせ入ってくる。

その姿を確認した夏希が叫んだ。

「舞桜ちゃん！」

そして、再度確認して呟く。

「……違う」

紅い髪が靡く。

舞桜と同じ顔を持つ者。しかし髪は紅に燃えている。

金色に輝く瞳でその者はホークアイを見据えた。

「我が城の居心地はどうだったかね？　そろそろ私に返してくれるとありがたい」

その者の顔には歌舞伎の隈取りのような、目の回りや頬などに紅の線が入っていた。

ホークアイも思わず聞いてしまった。

「誰だ？」

と。

「私か？　名は無い。ただ、いつの日からか……魔王　と呼ばれていた」

その者はそう言った。

ホークアイは笑みを口元に浮かべた。

「本当たったのか……ならばそれが君の真の姿かッ！」

全力でホークアイは 魔王 に斬りかかった。

刹那、三本の輝線が宙を趨り、氷結するかのごとく音が響き渡った。

折れた刃が回転して天上と天下に突き刺さった。

ホークアイは刃の折れた二振りの刀を握りしめながら愕然とした。

「恐ろしい」

両の手から滑り落ちた二本の柄。

未だ刀を握る 魔王 はその切っ先をホークアイの喉仏に突き付けた。

「殺しちゃダメ！」

夏希の叫びが木霊した。

眼を瞑る 魔王 。その手はゆっくりと下ろされ、刀の切っ先は床に向けられた。

「懐かしい声だな……貴姉きしが望むならばそれも良かるう。戦意を失った者はすでに戦士であらず」

冷や汗を掻きながらホークアイは、そのまま背中から大の字になって倒れた。

「あははは、完敗だ。怖い怖い、触らぬ神に祟りなし……だね。そして、弱き者は強き者に従うのが世の常なら、僕は魔王陛下の忠実なる下僕となりましょう」

起き上がったホークアイは膝を付いて 魔王 に頭を垂れた。そんなホークアイにハルキが食ってかかる。

「調子のいいヤツめっ！」

「固いことは言わない言わない。長いものには巻き付けさ」

ホークアイとハルキのやり取りには目もくれず、魔王は穏やかな瞳で夏希を見つめていた。

「しかし……貴姉は誰だ？」

「（キシってあたし岸だけど）あなたこそ誰なの、天道舞桜じゃないの？」

「まだ長い夢を見ているのか……似ているが……違う。貴姉はいつたい誰なのだ？」

突然、建物全体が激しく揺れた。

そして、爆乳も揺れた。

慌てた様子でこの部屋に駆け込んできたベル。

「ちよつとアタクシがウンチちゃんしてる間に舞桜ちゃんがいなくなっ げっ、まさかそれって舞桜ちゃん？」

再び建物が激しく揺れた。

手を付くほどの揺れの中でただひとり、魔王だけが立つ

たままだった。

「……感じる……記憶の片隅……」

ハルキが魔王を指さした。

「あいつ飛んだぞ！」

彗星のような輝きを放った魔王が何重もの天上を突き破って遙か空に消えた。

……………。

残された四人の思考が一時的に停止する。

ハルキが叫ぶ。

「あいつどこに飛んでつたんだよ！」

夏希も呆然としながら言葉を漏らす。

「とにかく……探さなきゃ」

魔王 はどこに消えてしまったのだろうか？

ベルは床に這い蹲ったまま匍匐前進で進んで、コンピューターパネルの前まで来て立ち上がった。

「腰が抜けるほど怖かったわぁん……昔違う魔王様に仕えたことあったけど、だってもおなじようなプレッシャー放つんだもん）さーてと！」

ドゴッ！

ベルはコンピューターに蹴りを入れた。

《ザザザ……ザザッ、お早う御座いますマイマスター。本日は晴天なり、マイクテスト良好。システムエラーなし、今日一番ツイているのは蟹座のみなさんでえ〜す》

「あ……あたしだ」

ボソツと呟いた夏希。

普及したメインコンピューターにベルが命じる。

「この天上に穴開けて飛んでつた生命体を探して頂戴！」

《ただいまスクリーンに映し出します》

この部屋にあった超巨大スクリーン（映画を観るのにちょうどいい）に、星が輝く外の様子が映し出された。

魔王 とピンクシャドウが身振り手振りで、何やらコミュニ

ケーションをしているが、音声は拾えないほど遠い。

そして、思いっきり不意を突いた感じで 黒い眼 が光線を
発射した。

で、呑み込まれた二人。

……………。

「エーッ！」(一同)

マジでーッ？

メインコンピューターによると、魔王 とピンクシャドウ
の消息は不明。観測できる範囲内からは完全に消失しまったら
しい。

しかし、若者たちは希望を捨てず戦うのだ！

ゆけ、ダイマオー発進！

「なにこの展開！」

叫ぶ夏希を乗せて超巨大ヒト型ロボットが舞桜学園から飛び
立った。

魔界王者ダイマオーとはベルが趣味で作っていた合体ロボで
ある(プラモ作るノリ)。まだ試作段階のため、塗装やパーツ
などが付いておらず、まるでその形はデッサン人形のようにあ
る。カッコ悪ッ！

とりあえず急遽、試作途中だった反重力ウイングを背中に装
着して空だけ飛べるようにした。パラグライダーみたいな形で、
やっぱりそんなにカッコ良くない。

コックピットは五人乗りで、現在は三人が搭乗している。

夏希、ハルキ、そして変態仮面！

ダイマオーは 黒い眼 の前で止まった。

互いに上空で停止したまま睨み合う。

魔界王者ダイマオーVSマガデスタの黒い眼

戦いのゴングが鳴った！

が、ダイマオーが動かない。

その隙に 黒い眼 はエネルギーを充填する。

ピカピカッと目玉が光り 眼からビーム！

ダイマオーがエビ反った！

黒い眼 の放ったビームはダイマオーの腹を掠めていった。

メタボリックだったらモロ喰らっていたところだ。

コックピットの中は大混乱だった。

夏希が叫ぶ。

「え、どこ、なにをどうすればいいの!？」

変態仮面は悠長に取扱説明書を読んでいる。

「えーと、『お箸を持つ方が右レバーで、茶碗を持つ方が左レバーです』そこから説明!？」

説明書を全部読むには時間が掛かりそうだ。

ハルキはいうと面白そうなボタンはないかと探していた。

「必殺技とか隠し武器とかないのかよ!？」

そこへ舞桜学園にあるヒミツ基地から通信が入った。

コックピット前のモニターにデカデカと胸が映し出された。

おっぱいがユサユサしながらしゃべりだす。

《必殺技はハルキの担当よおん。1番から10番までスイッチがあるでしょう?》

「おっしゃ、これを押せばいいんだな？」

《とりあえず1番とかプッシュしちゃういなさあゝい！》

「よし、喰らえミラクルストロング！」

勝手な必殺技名を叫んでポチつとな。

ダイヤモンドの乳首からレーザーが発射され、黒い眼の一部がバーベキューになった。

ちよつとセンスがアレな必殺技にコックピット内はドン引き。気を取り直して叫ぶハルキ。

「もつとマシなのないのかよ！」

《じゃあ2番をプッシュよ！》

「よし、喰らえスーパージミサイル！」

ミサイルという決めつけ。

ダイヤモンドの乳首から機関銃が発射された。

ダダダダーン！

黒い眼 はちよつとチクチクした。

二度目となるとコックピット内の心象風景が真っ白になった。再び気を取り直したハルキ。

「オレ様向きな熱いやツないのかよ！」

《むさ苦しい感じのは……6番よ。ロケットパンチが仕様できるわ》

「よし、メガロケットパンチ！」

ダイヤモンドの腕からロケットパンチが飛んだ。

が、その軌道は 黒い眼 とは見当外れの星空に消えた。

《あ、ちなみにパンチは戻ってこない仕様だから》

先に言えよ！

まだぜんぜん戦っていないのに、すでに片手消失。

再び 黒い眼 のターン。黒い眼 は力をためている。

夏希はもうやけっぱちで操縦桿を握った。

「なんでもいいから動いて！」

ダイマオーが突然動き出した。

そして、頭突きアタック！

脳天から 黒い眼 の目玉に突っ込んだ。

グヲヲヲヲヲヲ！

黒い眼 がなんかよくわかんない音を発した。きつとコレ

は痛そうだ！

きつとクリティカルヒットだったに違いない。

おおっと！

黒い眼 の目玉が赤に変わったぞ、きつと怒っているに違

いない。たぶん怒ると攻撃力アップだ！

ピカピカつと 黒い眼 が稲妻を発し、メガビーム！

モロにダイマオーの腹に直撃。トンネルが開通してしまった。

しかも、下半身の重さに耐えきれず、穴が広がって下半身落下。

深海までさようなら。

上半身だけでもかるうじて動くゴキブリ並の生命力を誇るダ

イマオー。

テンパる夏希。

「どうしたらいいの!？」

《こうなったら最期の手段よなっちゃん!》

「なんですか？」

《ドクロマークの付いたボタンを押すのよ!》

「(ドクロマークって) ホントに押していいんですよね？」

《女は度胸よおん!》

「はい!」

ポチツとな。

ちゅど〜ん!!

その日、ダイマオーは海の藻屑となったのだった。

僕らはその勇姿を決して忘れない。

ススだらけになつて生徒会室に帰つてきた二人(三人じゃないの?)。

夏希は真つ黒な顔をしてベルに掴みかかった。

「死ぬとかだったんですよ!」

「でも、ちゃんとコックピットごと空に打ち上げられたでしよう? ここにこうしていることが脱出成功の証よおん」

ホークアイはマスカレードマスクを外して雪弥に戻った。眼の周りだけ黒くないのがチャームポイントだ。

「僕らは助かりましたけど、霸道は全身打撲で病院に運び込まれましたけどね」

ハルキはそういう役回りだから仕方ない!

ベルは胸の谷間から一升瓶を取り出した。

「まあ、目玉オバケ倒せたんだし、勝利の祝杯でパーツといくわよおん!」

祝杯関係なしにアンタはいつでも飲んでるがな。

しかし、夏希はそんな気分になれなかった。

「祝杯なんて……だって舞桜ちゃんの行方も、ピンクさんも、菊乃ちゃんもどこかに消えちゃったんですよ！」

生徒会室のドアが開き、誰かが倒れ込むように入ってきた。

「わたしならこよ」

息を切らせながら菊乃が畳の上に倒れ、背負っていたピンクシャドウも投げ出された。

夏希は菊乃を抱き起こして肩を貸した。

「だいじょぶ菊乃ちゃん！　ピンクさんのこと背負って運んできたの!？」

「汚くて放置された可哀想な兔がいたから……」

「菊乃ちゃん！」

「大丈夫よ、少し休めば平気だ……か……」

そのまま菊乃は気を失ってしまった。

ベルが夏希の変わりに菊乃を抱きかかえて、部屋の奥に寝かせた。

「少し疲れて眠ってしまったただだから大丈夫よおん」

「よかったあ」

安堵のため息を漏らす夏希だが、心配なのはもう一人いる。

ピンクシャドウは気を失っているのか、それとも死んでいるかわからない。

きぐるみの上からではなにもわからなかった。

脱がせればいいのだろうか……。

夏希は困った顔で雪弥を見つめた。

「頭取ったら怒られるかなあ？」

「顔を見られることを嫌がっていたみたいだからね」

二人が顔を見合わせていると、その間をベルが割って入った。

「別にいいじゃないよ、取っちゃいなさい、取っちゃいなさい

」

ベルは独断と偏見できぐるみの頭部を投げ取ってしまった。

三人は言葉を失った。

中でも一番驚いたのは……。

「あたし？」

夏希はそれ以上の言葉を発せなかった。

素顔を晒されたピンクシャドウ。

そこにあっただのは“夏希”の顔であった。

微かにピンクシャドウの瞼が動く。

次の瞬間、勢いよく立ち上がったピンクシャドウは飛び退いた。

自分に集まる視線に気付いたピンクシャドウは自らの頬に触れた。

「そうか……見られたのか」

同じ顔が互いを見つめ合う。

夏希はまだ信じられなかった。

「どうして……もしかして双子？」

「表現としては近いがそれは間違いだ」

「鏡を見てみたいだけけど今の鏡じゃないの。そう、まるで未

来の鏡を見ているみたい」

そう言われて雪弥も気付いた。

「なるほどね、それが僕の感じた違和感か。こっちのほうが大人の顔をしてるんだよ」

こっちはピンクシャドウのことである。

今の夏希が何年後かしたらこうなるだろうと思わせる顔でも。

「あたしこんな声低くないし、ピンクさんのほうがいい声してる」

「声の違いは発声の違いだろう。君にも出せる、オレたちは同じ存在なのだから」

ピンクシャドウはついに核心を述べた。

同じ存在。

ベルはピンクシャドウの顔をまじまじと見つめている。

「もしかしていなっちって女の子だったのあん？」

「生まれたときからオレは男として振る舞ってきたからな。別にあなたのことを騙すつもりはなかった」

「オカマ当てクイズとか得意だったのに、ショックだわあん！」

やはりこの二人、知り合いであつたらしい。

夏希は少し頭が混乱していた。

同じ顔がそこにあるだけでも不思議な感覚に襲われるのに、たしかに“同じ存在”と言ったのだ。

「あなたは何者なんですか？」

それは自分にたいしての質問のようであった。

今になって、自分は何者なのかという疑問が沸々と湧いてしまったのだ。

ピンクシャドウは真摯な眼差しを夏希に向けた。

「この世界でオレは因幡兎いなはつうさぎという名前で生まれた。霸道家の隠密として育てられ、ずっと舞桜様の傍に仕えてきた。物心ついたときから自分はこの世界の住人ではないと気付いていた。前世の記憶を持ち、舞桜様が別の世界で何者であったのかも知っていた。だから決して魔王として覚醒めざきめさせてはならないと注意を払ってきたのだが……」

「あたしと“同じ存在”ってどういうことですか？」

「同じ存在だが、厳密に言うとう違う。平行する違う世界に存在する同じ魂を持った存在。本来は同じ世界に同じ人間は二人以上生まれませんが、この世界では同じ時代にオレと君が存在してしまった。この世界の正しい住人は君で、オレはこの世界にやってきてしまったイレギュラーなんだ」

さらに呼吸を兎は置いて続ける。

「オレは舞桜様の影として、誰にもその存在が悟られぬようにしていた。そこにいるベルフェゴールにはすぐに気付かれてしまったが。しかし、何の特殊な能力も持たない者が私の存在を感知するのは容易なことではない。それなのに君はオレの存在にすぐ気付いた。それは、君の魂とオレの魂が同調したからなのだろう」

存在を知られないようにしている節はあった。一人だけ反応

の可笑しい人物がいた。他の者の場合は兎が姿を隠していたが、あの人物は隠れてもいない兎が感知できていなかった。

夏希はエクストリーム生徒会選挙で火に囲まれたときのことを思い出した。最初はとぼけているのかと思つたが……。

「一つ訊いてもいいですか、舞桜ちゃんにはあなたのこと見えてませんよね？」

「オレにもよくわからないがそうらしい。もとよりオレは掟により舞桜様に存在が知られてはないとされていたが、あるとき不意に舞桜様の前に姿を見せてしまったことがあつた。しかし舞桜様はオレの存在に気付かなかつた。視界には入っているはずなのに感知できず、それだけではなくオレが舞桜様に触れても気付かない。オレに関わるすべてのことを舞桜様は“無い”ことにしてしまふんだ。ただ、魔王として覚醒めたときにはオレを感知できるようになつていたが……」

なぜ舞桜は兎を感知できないのか？

なぜ魔王ならば感知できたのか？

夏希は少しうつつむぎ、心を整理してから顔をあげて兎の眼を見た。

「舞桜ちゃん生きてますよね？」

兎は頷く。

「ああ、オレにはわかる。もうすぐ帰ってくる……ただ（帰ってくるのは）。迎えに行こう、そう、広くて辺りを見渡せる場所がいい」

「あたしも行きます！」

「君にはその権利があるだろう。ただし、ほかの者は付いてこないでくれるか？」

兎はベルと雪弥に目を配った。

二人は何も言わなかったがそれが答えだろう。

「では、行こう」

兎は夏希に声をかけ、二人は部屋をあとにした。

満天の空。

明るい月が静かに世界を照らす。

広い草原に二人は立っていた。

「風が気持ちいいな。頬に風を感じたのは……もう遠い昔か」

兎は感慨深く囁いた。

いつも被っているウサギの頭は置いてきた。

「あ、流れ星」

夏希が指さした方向から帚星が落ちてくる。それが星ではないと気付いたのはすぐだった。

空を見上げながら兎が呟く。

「……帰ってきた」

燦然と輝くそれは、神々しい光だった。

魔王 は地に降り立った。

それを見た夏希は驚きを隠せない。

「えっ……」

服が破れ、上半身裸になった 魔王 のその姿。

「ツルペタ！」

思わず夏希は叫んでしまった。

ツルペタというより、それはまるで……男のようだった。もしかして、髪の色が変わり、顔の模様が入ったことからわかるように、魔王 になることによつて肉体的な変化もあったのだろうか？

夏希は兎と顔を見合わせた。

「魔王 って男の人だったんですか？」

「そうだ」

「でも舞桜ちゃんは女の子ですよね？」

「いや、舞桜様も男だ」

「えーッ！」

なんか今日はいろいろあったけど、もしかしたら一番の驚きだったかもしれない。

男だと思っていた兎が女で、女だと思っていた舞桜が男。

走馬燈のように駆けめぐる思い出。

舞桜とのキッス！

急に恥ずかしくなつて夏希は顔を真っ赤にしてしまった。

魔王 は夏希たちと少し距離を開けて足を止めた。

「やはり……あのときの兎は貴姉だったのか……」

「改めて言おう、久しぶりだな 魔王」

「貴姉が貴姉であるならば、そこにいる貴姉は誰なのだ？」

魔王 は夏希に視線を送った。

同じであるが、個々に存在している二人。

兎が答える。

「異世界の 魔王 だったお前なら理解できるだろう？ 平行世界に存在している同じ存在だ」

「なるほど、ならば……二人とも私が愛した女ということだな。愛してるぞ二人とも！」

いきなり 魔王 は軽いノリで夏希と兔に抱きついてきて、さらにいきなり夏希にキス！

眼を丸くする夏希から口を離して兔にキスしようとしたところで、 魔王 は顔面にウサギパンチを食らって地面に転がった。

「私を殴るとは何事だ！ 別にキスくらい減るものではなからう！」

「相変わらずの女つたらしだな 魔王 ！ オレはお前のそういうところが嫌いなんだ！」

「ちゃんと前の世界で両思いだと確認しただろう！」

「そんなこと知るか。お前は両思いだろうとなかろうと女に手を出すだろ！」

「愛してる女に手を出して何が悪い！」

「悪いに決まってるだろ、せめて一人にしろ！」

二人が言い争ってるのを聞いて、なんだか夏希は呆気にとられてしまった。

「（何この二人の関係……てゆか、この人ホントに 魔王 なの？ 舞桜ちゃんが劣化したみたい）」

今そこで兎と言い争っている 魔王 は、威厳も威圧感も、人に恐怖感を与える雰囲気すらも持っていなかった。世俗的で、

女つたらしで、わがままな“ただの人”。

急に兎が真剣な面持ちをした。

「よく聴け 魔王。お前はオレと夏希のどちらを選ぶのだ？」

夏希は少し驚いた。

その質問の真意は？

魔王 は答える。

「両方だ」

このとき、夏希の目からは兎が少し肩を落としたように見えた。

静かに口を開く兎。

「そうか……どちらを選ぼうとこの先の運命は変わらないが。

魔王 よ、そろそろ続きをしないか？」

「続き……か。虚しい運命だな」

「なにがあるうとオレは 魔王 を滅ぼさなければならぬ」

「こちらと同じだ。剣を構えろ！」

そう叫んで 魔王 は刀を抜いた。

対峙する兎もまた、光り輝く剣を構えた。

兎は背中越しの夏希に鋭い口調で言う。

「下がっている。絶対に邪魔はしないでくれ、それがオレと

魔王 の望みなんだ」

「……………」

夏希は何も言わずに背を走り出した。

それを確認して兎が 魔王 に斬りかかった。

刃が交わり火花が散った。

力と力のせめぎ合い。

互いの刃を挟んで顔を向き合わせる二人。

兎がこんなことを言った。

「知っているか 魔王？」

「戦いの最中に話すとは余裕だな」

「この国にも桜があるぞ」

「ほう、ならば桜の下で誰かと酒を酌み交わしたいものだな。
で、いつ咲く？」

「来年の春。まだまだ先だ」

「ならばまだ死ねんな」

「まったくだ」

まばゆい光が天高く舞い昇った。

雷鳴のような轟き。

閃光が世界を包み込み、遠くから刃を交える音が聞こえ、夏
希は振り返った。

まだ、未来は何も見えなかった。

エピソード

「それでは生徒会会議をはじめよう」

いつものように舞桜の言葉ではじまった生徒会会議。

「私は重大なことを見落としていたらしい。この学園には校則がないのだ！」

今さらーっ!?

まあ、いつものことなのでほかのメンバーは特に驚きもしない。

夏希が『はい』と手を挙げた。

「別になくてもだいじょぶだと思うけど？」

立てた人差し指を『ノンノン』と雪弥が横に降った

「今はいいかもしれないけど、時間が経つと風紀が乱れるから必用だと思うね。ついでに風紀委員も作つたらいいんじゃないかな。な、魅神？」

「え……うん。貴方が必用だと思うなら」

この二人の関係もあの事件以降に、気まずい方向に進むことはなかった。

ちよつとした余談だが、夏希が菊乃に『舞桜ちゃんが男の子だつて知ってた？』と尋ねると、あっさり『知っていたわ』と答えられてしまったらしい。おそるべし魅神菊乃。

つい菊乃には話してしまつたが、舞桜が男の子ということとは

周りにはヒミツだったりする。

そうそう、そう言えば、今日の昼休み夏希は裏庭に呼び出された。誰かに袋だたきにされると思ってたビクビクしていたが、その場に現れたのはピンク色をしたウサギのきぐるみだった。

そのウサギはこんな話をした。

「これからも私のことは絶対に他言無用だからな。それと、舞桜様は自分が男だということを知らない。本人がそう思っているのだから、絶対に無駄なことを言っただけで本人に悟られるなよ」
そんなことだけ言ってささっと消えてしまった。

生徒会の話が進む中で、そんな昼間の出来事をばーっと考えていると、舞桜が自分の顔を見つめていることに気付いて夏希はハツとした。

「わっ！」

「どうしたのだ夏希？」

「え……別に（男の子だつて意識するとドキドキする）」

「顔が赤いぞ？」

「げほげほっ、ちよ、ちよつと風邪気味で」

「それはいかん。今すぐ私に移すのだ、さあ接吻をしよう！」

いきなり飛びかかってきた舞桜の顔面を夏希ちゃんピンタ！

「キスはダメ！」

「……今日の夏希は元気が有り余っているな」

叩かれたというのに、精神的ダメーゼ口の舞桜。たぶんなんで叩かれたのかも理解してない。相変わらず世界は舞桜を中心に廻っている。

気を取り直して舞桜はもう一人の生徒会メンバーに目を向けた。

「話を戻して、君は校則について意見があるかい、ゴリ子さん？」

ゴリ子さん生徒会に復帰！

でも、今日もバナナを食べることで忙しいらしい。

突然、生徒会室に通信が入った。テレビ画面に映る爆乳のアップ。

「舞桜ちゃんそこにいる？ さっき仕入れたネタなんだけど、ついにムーンの裏側からスペース艦隊がアースに向かって飛び立ったらしいわよぉん」

「なにっ、いつに光の勇者が攻めてきたかっ！」

まだこんなことを言っている。

ほかにも『自分は魔王』発言とかも未だにっていて、あの事件で自分が魔王になっちゃったときの記憶はバツサリないらしい。周りも空気を読んで舞桜がいるときには、その話は一切しない暗黙のルールがある。

ちなみにあの一連の事件では負傷者は出たが、死傷者は出なかったらしい。ミラクルだ！

舞桜は席を立ち上がって部屋の外に出ようと走った。

「急用ができた、すまんがあとには任せた！」

と、言っただけで部屋を出ようとした瞬間、ミイラ男が部屋に飛び込んできた。

「オレ様が生徒会メンバーからハズされ」

ゴッソ!

おでことおでこがごつつんこ

舞桜とミイラ男は出会い頭にヘッドバッド。

「いつてー!」

床に転がって悶えるミイラ男。

舞桜はそのまま気を失って……倒れてしまった。

慌てて夏希が駆け寄った。

「だいじょぶ舞桜ちゃん!」

すると舞桜がムクツと上体を起こして、

「愛しているぞ貴姉!」

ぶちゅ

いきなりのキス攻撃を夏希は受けてしまった。

夏希はバツと舞桜から体を離して眼を丸くした。

「ま、魔王!」

そこにいたのは女つたらしでご近所さんでも有名な歌舞伎メ

イクの悪の帝王。

えっ……魔王復活?

とか思った瞬間、ピンクの影がどこからともなく現れ、ハリ

センで魔王の後頭部をぶん殴った。

バチコーン!

クリティカルヒットを喰らった魔王はそのまま気を失い。

何事もなかったようにムクツと起き上がった。

「ふむ、朝か」

呟いたのは紛れもない舞桜だった。

だが、悲劇は再び起きた。

ミイラ男が持っていた松葉杖を大きく振りかぶった！

「てめえよくもオレ様に頭突きしてくれたな！」

ドーン！

松葉杖が寝起きの舞桜の頭にクリティカルヒット！

再び気を失う舞桜。

そして、ムクツと上がって

「ふははははっ、私は何度でも甦るのだ！」

再びハリセンがバチコーン！

気を失った魔王が舞桜に戻って起き上がった。

「なんだか知らんが頭痛がする」

このエンドレスを見ていた夏希も頭が頭痛で痛くなってきた。

「もしかしてこれからもずっとこの入れ替わり生活が続くの？」

まだ学園生活ははじまったばかり。

なのにこの濃密すぎる苦難の連続。

無事に卒業できるだろうかと思うと夏希はやっぱり不安だった。

でも、ふと周りを見渡すと。

そこには菊乃がいた、雪弥がいた、姿は見えないけどピンクさんもいる。

そして……ゴリ子さんもいるではないか！

なんだか急に夏希は笑顔になった。

「ねえ、舞桜ちゃん？」

「ん、なんだ夏希？」

「ううん、やっぱりなんでもない」

そう言っつて夏希は太陽の笑顔を見せたのだった。

これからもいろいろいることがあるだろうけど、みんながいてくれればきつと大丈夫。

すっかり夏希は一人のこと忘れてるけどなっ！（笑）